高知県香南市発掘調査報告書　第 17 集

安岡家住宅

やすおか

― 重要文化財建造物保存修理工事に伴う埋蔵文化財試掘確認調査報告書 ―

2020.3

香南市教育委員会

安岡家住宅

やすおか

― 重要文化財建造物保存修理工事に伴う埋蔵文化財試掘確認調査報告書 ―

2020.3

香南市教育委員会

序

安岡家住宅が国の重要文化財に指定されたのは、平成17年7月22日のことです。江戸時代後期の「郷士屋敷」としての建造物指定で、宅地に接する旧街道や墓地など周辺の史跡、当家に伝わる歴史資料からも当時の様子をしのぶことができます。

平成24年度から始まった保存修理工事は平成31年度までの8年間にわたる大事業です。最初は建物の半解体も含む修復の予定でしたが、予想以上に傷みが大きかったため、全ての建物が全解体修理となりました。民家の保存修理事業としては高知県始まって以来の大規模なものです。18世紀後半、当地に居を構えてから250年あまり、解体調査によって明らかになった建物の変遷は、安岡家の歴史そのものです。

発掘調査は、保存修理工事の進捗に応じて平成25～30年度の6年間にわたって行われました。いずれの調査も建物復原の根拠となる情報を得る目的の試掘確認調査です。近世から近現代にかけての民家の歴史を辿る発掘調査という点で、県内では他に例がありません。

調査成果には復原の根拠となる所見とともに、建物の床下から見つかった鍛冶関連遺構など、現存する建物に先行する時期の重要な情報も含まれていました。20基以上まとまって確認された壺状の土坑群、漆椀や陶磁器類の埋納遺構、戦時中使われていた国民食器や統制陶器など、出土した遺物や遺構から、江戸時代から戦後にかけての安岡家住宅の変遷の一端を垣間見ることができます。

最後になりましたが、調査の際にご協力いただきました安岡富美様、安岡正俊様はじめ安岡家の皆様、設計監理の(公財)文化財建造物保存技術協会、請負者の新東住建工業株式会社はじめ保存修理事業に関係された多くの方々に深く感謝いたします。

令和2年3月

高知県香南市教育委員会
教育長　入野　博

例　言

1．本書は、平成25 ～ 30年度にかけて実施した重要文化財安岡家住宅の試掘確認調査（埋蔵文化財発掘調査）の報告書である。安岡家住宅は、高知県香南市香我美町山北979－1に所在する。試掘確認調査は、安岡家住宅復原の根拠となる情報収集を目的として行った。整理作業は基礎作業を当該年度に、報告書作成作業を平成30・31年度に実施した。

2．発掘調査及び整理作業は香南市教育委員会が実施した。

3．発掘調査担当部署である生涯学習課文化振興保護係の体制は以下のとおりである。

平成25年度

課　長	近森　孝章
係　長	小松　　誠
主　任	田中　一也
主監調査員	松村　信博
埋蔵文化財調査員	宮地　啓介

平成26年度

課　長	近森　孝章
係　長	小松　　誠
主　任	小川　哲弘
主監調査員	松村　信博
埋蔵文化財調査員	宮地　啓介
埋蔵文化財調査員	藤方　正治

平成27年度

課　長	近森　孝章
係　長	寺内より子
主　任	小川　哲弘
主監調査員	松村　信博
埋蔵文化財調査員	宮地　啓介
埋蔵文化財調査員	藤方　正治

平成28年度

課　長	近森　孝章
係　長	寺内より子
文化財調査員	濱田　眞尚
主監調査員	松村　信博
埋蔵文化財調査員	宮地　啓介

平成29年度

課　長	田中　彰裕
係　長	寺内より子
文化財調査員	濱田　眞尚
主監調査員	松村　信博
埋蔵文化財調査員	宮地　啓介
埋蔵文化財調査員	横山　　藍

平成30年度

課　長	田中　彰裕
係　長	竹中　ちか
主　査	澤田　秀幸
主監調査員	松村　信博
埋蔵文化財調査員	宮地　啓介
埋蔵文化財調査員	横山　　藍

平成31年度

課　長	小松　靖生
係　長	竹中　ちか
主　査	澤田　秀幸
主監調査員	松村　信博
埋蔵文化財調査員	宮地　啓介
埋蔵文化財調査員	横山　　藍
埋蔵文化財調査員	坂本　憲彦

4．各年度ごとの調査担当は以下のとおりである。

平成25年度	釜屋1次調査	松村信博
平成26年度	主屋1・2次調査	松村信博
平成27年度	主屋3次調査　釜屋2次調査	松村信博・藤方正治
平成28年度	主屋4次調査　新宅及び周辺の水路・石垣　雪隠	松村信博・藤方正治
平成29年度	米蔵　釜屋3次調査	松村信博・藤方正治・横山藍
平成30年度	道具蔵　釜屋4次調査	松村信博・横山藍

5．本書の執筆は第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅳ章を松村、第Ⅲ章を松村・横山が担当し、横山が編集を行った。遺構・遺物の写真撮影は松村が行った。

6．検出した遺構については、SD(溝)・SK(土坑)・P(ピット)・SX(性格不明遺構)・SE(井戸)・SF(祭祀遺構)の略号を用い、調査地点ごとに遺構名を付した。調査で使用した遺構名で報告し、遺構の略号と性格に齟齬が生じる場合は本文中に示した。S=1/20・S=1/40・S=1/50・S=1/60・S=1/80・S=1/100で作成しそれぞれに記載しており、方位(N)は世界標準座標方眼北である。

7．地盤面の標高は主屋25.1m、釜屋25.1m、米蔵24.8m、道具蔵24.9 ～ 25.1m、新宅及び雪隠24.5mで、各棟毎に仮水準点を設置し調査を実施した。原則的に調査時及び保存修理工事終了後で地盤面の変更は無い。各遺構図には詳細な標高を表記せず、遺構の形状・深さ及び埋土について報告した。

8．遺物については、原則S=1/3とし、法量によってS=1/6・S=1/4・S=2/3・S=1/2で掲載し、各遺物にはスケールバーを掲載している。

9．調査に際しては(公財)文化財建造物保存技術協会・新東住建工業株式会社・高知県教育委員会文化財課・(公財)高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力と指導・助言をいただいた。また、安岡正俊氏には多大なるご協力・助言をいただいた。記して感謝する。

10．瓦及び検出遺構については(公財)文化財建造物保存技術協会 辻田芳典氏、澤田拓氏に、近世陶磁器については浜田恵子氏にご教示をいただいた。記して感謝する。

11．現場発掘作業には以下の諸氏が従事した。
植田秀夫・大野久雄・川村正廣・河村みさ子・清藤勝秀・齋藤美幸・澤田佐世・宗圓良一・高橋由香・永野宏幸・松木富子・宮本幸子(敬称略・五十音順)

12．整理作業には以下の諸氏が従事した。
齋藤美幸・澤田佐世・高橋加奈・高橋由香・藤方正治・藤原ゆみ・松田克純・宮本幸子・吉本由佳(敬称略・五十音順)

13．出土遺物は香南市文化財センター（香南市香我美町山北1553－1)で保管している。出土遺物への注記は以下のとおりである。

主　屋　「14－シ1YK」「14－シ6YK」「15－シ1YK」「16－YKⅣ－SK」
釜　屋　「13－KYK」「15－シ6YK」「17－5YK」「18－3YKK」
米　蔵　「17－3YKK」
道具蔵　「18－1YKD」
新　宅　「16－5YKK」

本文目次

第Ⅰ章　調査の経緯と経過 …… 1
1. 調査の経緯 …… 1
2. 調査の経過と概要 …… 2
第Ⅱ章　地理的・歴史的環境 …… 5
1. 地理的環境 …… 5
2. 歴史的環境 …… 5
(1) 埋蔵文化財からみた周辺の歴史 …… 5
(2) 香我美町山北地区 …… 8
(3) 安岡家住宅の歴史 …… 9
第Ⅲ章　調査成果 …… 11
1. 主屋 …… 11
(1) 調査の概要 …… 11
(2) 調査成果 …… 13
2. 釜屋 …… 30
(1) 調査の概要 …… 30
(2) 調査成果 …… 31
3. 米蔵 …… 49
(1) 調査の概要 …… 49
(2) 調査成果 …… 50
4. 道具蔵 …… 59
(1) 調査の概要 …… 59
(2) 調査成果 …… 59
5. 新宅 …… 62
(1) 調査の概要 …… 62
(2) 調査成果 …… 62
6. 雪隠 …… 65
(1) 調査の概要 …… 65
(2) 調査成果 …… 65
第Ⅳ章　まとめ …… 67
1. 主屋 …… 67
2. 釜屋 …… 69
3. 米蔵 …… 70
4. 道具蔵 …… 71
5. 新宅 …… 72
6. 雪隠 …… 72

挿図目次

図1－1　香南市位置図 1
図1－2　試掘調査対象地位置図 2
図1－3　試掘調査地点の概略 3
図2－1　安岡家住宅周辺の遺跡 6
図2－2　安岡家住宅周辺の文化財 8
図3－1　主屋修理前居室名称図 11
図3－2　主屋グリッド設定図・トレンチ配置図 12
図3－3　主屋TR3・5セクション図 13
図3－4　主屋TR6・10セクション図 14
図3－5　主屋柱抜取穴位置図 15
図3－6　主屋式台周辺柱抜取穴・石列遺構図 16
図3－7　主屋式台周辺・造成土出土遺物 17
図3－8　主屋中庭出土遺物 18
図3－9　主屋遺構配置図 19
図3－10　主屋土間周辺遺構図 20
図3－11　主屋壺状土坑遺構図 21
図3－12　主屋壺状土坑出土遺物 22
図3－13　主屋陶器埋納遺構遺構図 23
図3－14　主屋陶器埋納遺構出土遺物1 24
図3－15　主屋陶器埋納遺構出土遺物2 25
図3－16　主屋漆器椀埋納遺構遺構図・出土遺物 26
図3－17　主屋鍛冶関連遺構図 27
図3－18　主屋鍛冶関連遺構出土遺物 27
図3－19　主屋SK4・5遺構図・出土遺物・P30出土遺物 28
図3－20　主屋廃棄土坑出土遺物 29
図3－21　釜屋遺構平面図 30
図3－22　釜屋トレンチセクション図 31
図3－23　釜屋SK1遺構図・出土遺物 32
図3－24　釜屋SX2遺構図・出土遺物 33
図3－25　釜屋SX10～13・16遺構図・出土遺物 34
図3－26　釜屋SX17遺構図・出土遺物 35
図3－27　釜屋SX4遺構図・出土遺物 36
図3－28　釜屋SX5遺構図・出土遺物 37
図3－29　釜屋SD1出土遺物1 39
図3－30　釜屋SD1出土遺物2 40

図3－31　釜屋崩落土出土遺物1 41
図3－32　釜屋崩落土出土遺物2 42
図3－33　釜屋崩落土出土遺物3 43
図3－34　釜屋崩落土出土遺物4 44
図3－35　釜屋崩落土出土遺物5 45
図3－36　廃棄土坑出土遺物 46
図3－37　釜屋包含層出土遺物1 47
図3－38　釜屋包含層出土遺物2 48
図3－39　米蔵遺構平面図 49
図3－40　米蔵トレンチセクション図 50
図3－41　米蔵SX1遺構図・出土遺物1 51
図3－42　米蔵SX1出土遺物2 52
図3－43　米蔵SX2・5遺構図・SX2出土遺物1 53
図3－44　米蔵SX2出土遺物2 54
図3－45　米蔵SX2出土遺物3 55
図3－46　米蔵SX5出土遺物 56
図3－47　米蔵SX4遺構図 56
図3－48　米蔵SX10・北西部石垣・北部溝遺構図 57
図3－49　米蔵包含層出土遺物 58
図3－50　道具蔵トレンチ位置図・遺構配置図 59
図3－51　道具蔵TR1セクション図 60
図3－52　道具蔵SX1出土遺物 60
図3－53　道具蔵SX1遺構図 61
図3－54　新宅トレンチ配置図 63
図3－55　新宅縁石エレベーション図 64
図3－56　新宅トレンチセクション図 64
図3－57　新宅TR5遺構図・TR1出土遺物 65
図3－58　雪隠遺構図 66
図4－1　安岡家住宅試掘調査全体遺構配置図 69

表目次

表2－1　安岡家住宅周辺の遺跡 7
表3－1　道具蔵SX1出土瓦法量表 62

遺物観察表目次

遺物観察表 1（主屋）..... 75
遺物観察表 2（主屋）..... 76
遺物観察表 3（主屋）..... 77
遺物観察表 4（主屋）..... 78
遺物観察表 5（主屋・釜屋）..... 79
遺物観察表 6（釜屋）..... 80
遺物観察表 7（釜屋）..... 81
遺物観察表 8（釜屋）..... 82
遺物観察表 9（釜屋）..... 83
遺物観察表 10（釜屋）..... 84
遺物観察表 11（釜屋・米蔵）..... 85
遺物観察表 12（米蔵・道具蔵・新宅）..... 86

資料目次

資料1－1 安岡家住宅附指定絵図 4
資料3－1 主屋周辺絵図 11
資料3－2 釜屋周辺絵図 30
資料3－3 米蔵周辺絵図 49
資料3－4 道具蔵周辺絵図 59
資料3－5 新宅周辺絵図 62
資料3－6 雪隠周辺絵図 65

図版目次

図版 1　主屋覆屋設置状態(南西より)
主屋覆屋設置状態(南より)
図版 2　主屋調査前風景(南より)
主屋座敷部調査前風景(北より)
図版 3　主屋座敷部調査前風景(南西より)
主屋居室部北東調査前風景(西より)
図版 4　主屋居室部調査前風景(南より)
主屋居室部西部調査前風景(南より)
図版 5　主屋座敷部式台調査前風景(東より)
主屋居室部土間調査前風景(南西より)
図版 6　主屋TR3西壁セクション(南東より)
主屋TR3西壁セクション(南東より)
図版 7　主屋TR6黒色土検出状態(南より)
主屋座敷部TR10掘削状態(東より)
図版 8　主屋居室部土間トレンチ掘削状態(北より)
主屋居室部土間トレンチ掘削状態(東より)
図版 9　主屋TR11 抜取穴完掘状態(北西より)
主屋礎石抜取穴検出状態(西より)
図版 10 主屋焼土を伴う遺構群検出状態(西より)
主屋SX1セクション(北より)
図版 11 主屋壺状土坑検出状態(南より)
主屋壺状土坑半裁状態(南東より)
図版 12 主屋壺状土坑1・2完掘状態
主屋壺状土坑1遺物出土状態
主屋壺状土坑3半裁状態
主屋壺状土坑4半裁状態
主屋壺状土坑6半裁状態
主屋壺状土坑9遺物出土状態
主屋壺状土坑10検出状態
主屋壺状土坑11検出状態
図版 13 主屋壺状土坑13 ～ 15完掘状態(南より)
主屋壺状土坑16検出状態
主屋壺状土坑17検出状態
主屋壺状土坑19半裁状態
主屋壺状土坑完掘状態(南より)

図版 14 主屋陶器埋納遺構遺物出土状態(西より)
主屋陶器埋納遺構遺物出土状態(北東より)
図版 15 主屋SF3遺物出土状態(29)
主屋SF4遺物出土状態(31)
主屋SF4遺物出土状態(33)
主屋SF5遺物出土状態(35～40)
主屋SF5遺物出土状態(39･40)
主屋SF5完掘状態
主屋SF6遺物出土状態(41～48)
主屋SF6完掘状態
図版 16 主屋P6遺物出土状態(西より)
主屋漆器椀埋納遺構完掘状態(南東より)
図版 17 主屋P6遺物出土状態(49)
主屋P7遺物出土状態(50)
主屋P8遺物出土状態(51)
主屋P11遺物出土状態
主屋鍛冶関連遺構検出状態(南より)
図版 18 主屋P18・50検出状態(西より)
主屋鍛冶関連遺構焼土・炭化物検出状態(東より)
図版 19 主屋P14遺物出土状態(53～56)
主屋P22半裁状態
主屋SK4セクション(東より)
主屋SK4完掘状態(南東より)
主屋SK5半裁状態(西より)
主屋SK5完掘状態
主屋SK7完掘状態(南より)
主屋炉検出状態(北より)
図版 20 釜屋調査前風景(西より)
釜屋「釜場」カマド調査前風景(東より)
図版 21 釜屋「釜場」崩落土調査前風景(南東より)
釜屋「釜場」崩落土除去状態(西より)
図版 22 釜屋1次調査終了状態(西より)
釜屋2次調査終了状態(西より)
図版 23 釜屋「釜場」2次調査終了状態(東より)
釜屋「釜場」遺構完掘状態(西より)
図版 24 釜屋「釜場」トレンチ掘削状態(南西より)
釜屋TR1東壁セクション(西より)
図版 25 釜屋TR2北壁セクション(南より)

図版 25 釜屋TR3東壁セクション(南西より)
図版 26 釜屋「味噌納家」トレンチ掘削状態(南より)
釜屋TR4西壁セクション(南東より)
図版 27 釜屋トレンチ掘削状態(北西より)
釜屋TR5西壁セクション(東より)
釜屋TR5南壁セクション(北より)
釜屋TR24セクション(西より)
釜屋SE1周辺堆積状態(南東より)
図版 28 釜屋SK1炭化物検出状態(南より)
釜屋SK1セクション(南東より)
釜屋SK1鉄製品出土状態(82)
釜屋SK1完掘状態(北より)
釜屋SK1復原状態(南西より)
図版 29 釜屋SX2検出状態(南東より)
釜屋SX2遺物出土状態(南より)
釜屋SX2完掘状態(南東より)
釜屋SX2完掘状態(北より)
釜屋SX2焼土検出状態(南より)
図版 30 釜屋クド遺構セクション(南より)
釜屋SX13検出状態(東より)
釜屋SX10・16検出状態(南より)
釜屋SX10～12・16焼土検出状態(北西より)
釜屋SX11・16北壁セクション(南より)
図版 31 釜屋SD2暗渠検出状態(西より)
釜屋SX17完掘状態(南より)
図版 32 釜屋SX4セクション(西より)
釜屋SX4完掘状態(西より)
図版 33 釜屋SX5検出状態(東より)
釜屋SX5半裁状態(北より)
図版 34 釜屋SX4遺物出土状態(101)
釜屋SD1セクション(北より)
釜屋SD1集石出土状態(南より)
釜屋SD1遺物出土状態(123)
釜屋SD1遺物出土状態(126)
釜屋SD1遺物出土状態(129)
釜屋SD1遺物出土状態(131)
釜屋SD1遺物出土状態(135)
図版 35 釜屋SD1遺物出土状態(137)

図版 35 釜屋崩落土遺物出土状態(139)
釜屋崩落土遺物出土状態(142)
釜屋SD1遺物出土状態
釜屋排水遺構(現代)検出状態(北より)
釜屋崩落土遺物・漆喰出土状態(南西より)
釜屋崩落土遺物出土状態(南より)
釜屋崩落土下面排水管検出状態(南より)
図版 36 米蔵調査前風景(西より)
米蔵調査前風景(東より)
図版 37 米蔵完掘状態(南西より)
米蔵北西部完掘状態(西より)
図版 38 米蔵完掘状態(北より)
米蔵TR1・5東壁セクション(西より)
図版 39 米蔵TR1南部東壁セクション(西より)
米蔵TR1南部西壁セクション(南東より)
米蔵TR1東壁セクション(南西より)
米蔵TR2－1北壁セクション(南東より)
米蔵TR2－2北壁セクション(南より)
米蔵TR2－4上面完掘状態(東より)
米蔵TR2遺物出土状態(236)
米蔵TR3南壁セクション(北東より)
図版 40 米蔵TR3上面完掘状態(北より)
米蔵TR4－s P2検出状態(北より)
米蔵TR4－s完掘状態(西より)
米蔵TR6上面完掘状態(北東より)
米蔵TR7上面完掘状態(南東より)
米蔵TR10上面完掘状態(西より)
米蔵SK3検出状態(北より)
米蔵SX4 焼土・炭化物検出状態(南西より)
図版 41 米蔵SX1遺物出土状態(北東より)
米蔵SX1遺物出土状態(西より)
米蔵SX1完掘状態(西より)
米蔵SX5床面SX2検出状態(南より)
米蔵SX2遺物出土状態(北より)(213)
図版 42 米蔵SX2・5半裁状態(南東より)
米蔵SX2・5セクション(南より)
図版 43 米蔵北西部石垣検出状態(南より)
米蔵北西隅石垣検出状態(南西より)

図版 44 米蔵北部溝石垣検出状態(北より)
米蔵北部溝胴木検出状態(北より)
図版 45 米蔵SK1完掘状態(南東より)
米蔵SK1・P1完掘状態(北西より)
図版 46 道具蔵SX1遺物出土状態(北東より)
道具蔵トレンチセクション(南東より)
図版 47 道具蔵トレンチセクション(南より)
道具蔵トレンチセクション(東より)
図版 48 道具蔵SX1半裁状態(東より)
道具蔵P2～4遺構検出状態(東より)
図版 49 道具蔵SX1遺物出土状態(北東より)
道具蔵SX1南部セクション(東より)
道具蔵SX1中央バンクセクション(北より)
道具蔵遺物出土状態(南より)
道具蔵SX1遺物出土状態(南より)
図版 50 新宅調査前風景(北東より)
新宅調査前風景(東より)
図版 51 新宅トレンチ掘削状態(北東より)
新宅TR2セクション(北東より)
図版 52 新宅TR2・3完掘状態(北より)
新宅下層確認TR掘削状態(北東より)
図版 53 新宅西部溝石垣調査前風景(北より)
新宅西部石垣(東より)
図版 54 新宅南西部石橋(西より)
雪隠掘削状態(北東より)
図版 55 雪隠北部完掘状態(南東より)
雪隠南部石組検出状態(東より)
図版 56 雪隠整備前状態(北より)
雪隠北部整備前状態(東より)
図版 57 陶器(碗・捏鉢・供膳具)・磁器(碗・猪口)・青磁(鉢)・煉瓦・銭貨
図版 58 磁器(ミニチュア)・石素材(剥片)・銅製品(煙管)・銭貨
図版 59 土師質土器(焼炉)・瓦質土器(焼炉)・石製品(叩石・石臼・石墨)・石素材(剥片)・鉄製品(椀)
図版 60 陶器(碗・蓋)・石製品(石印)
図版 61 陶器(碗・蓋)・土師質土器(杯・椀・蓋)
図版 62 陶器(碗・壺・蓋)
図版 63 陶器(壺・蓋)
図版 64 磁器(皿・碗・蓋)・漆器(椀)・石製品(石臼)・鉄製品
図版 65 磁器(皿・おろし皿・蓋)・棒状鉄製品・鉄滓

図版 66 ガラス瓶(日常生活瓶・薬品瓶・白髪染め瓶・目薬瓶・化粧品瓶)・コルク栓
図版 67 陶器(甕)・磁器(蓋)・青磁(碗)・土師質土器(サナ)・丸瓦・平瓦・煉瓦・鉄製品
図版 68 陶器(碗・甕)・磁器(碗)・陶胎染付(碗)・丸瓦・ガラス瓶(薬品瓶)・鉄製品(釘)
図版 69 陶器(蓋・火入れ)・磁器(紅皿)・炻器(擂鉢)・竹製品(竹筒)
図版 70 陶器(皿・碗)・磁器(皿・紅皿・杯)・陶胎染付(碗)・土師質土器(サナ)
図版 71 磁器(皿・碗・猪口・蓋)
図版 72 陶器(甕・瓶・鍋・涼炉)・磁器(猪口)・炻器(擂鉢)
図版 73 炻器(擂鉢)・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦
図版 74 軒平瓦
図版 75 軒平瓦・丸瓦・平瓦
図版 76 平瓦
図版 77 陶器(捏鉢)・磁器(碗)・平瓦
図版 78 陶器(碗・鉢・捏鉢・甕)・磁器(皿)・煉瓦
図版 79 陶器(碗・鉢・甕)・磁器(碗)・炻器(擂鉢)
図版 80 磁器(碗・猪口・仏飯器)・炻器(擂鉢)
図版 81 炻器(擂鉢)・平瓦・ガラス瓶(洋酒瓶)
図版 82 平瓦・碍子
図版 83 陶器(壺)・磁器(碗)・軒平瓦
図版 84 陶器(皿)・磁器(皿・碗)・土管
図版 85 磁器(碗・戸車)・平瓦・煉瓦

第Ⅰ章　調査の経緯と経過

1. 調査の経緯

安岡家住宅は高知県香南市香我美町山北に所在する。江戸時代後期から幕末にかけての土佐の郷士屋敷の様相を現在に伝える建造物として、平成17年7月22日に国の重要文化財に指定された。敷地内にある「主屋」「道具蔵」「米蔵」「釜屋」の4棟と併せて、附として「風呂場」「雪隠」の2棟と明治20年頃に作成された「絵図」も指定された。また建造物だけではなく、宅地及び山林の範囲が指定されている。「地域内の井戸、石垣、水路を含む」指定であり、総面積700坪を超える敷地全体が指定の対象となっている。重要文化財指定書には、「安岡家住宅(高知県香美郡香我美町)四棟」として主屋の概要が記されている。主屋には桁行11.2m、梁間8.9mの「居室部」と桁行5.9m、梁間7.0mの「座敷部」があり、いずれも切妻造桟瓦葺である。主屋以外の建造物及び附、宅地等の指定内容は以下の通りである。

安岡家住宅(宅地及び山林、域内の井戸・石垣・水路を含む)

主　屋	(居室部)	桁行11.2m	梁間 8.9m	切妻造、四面庇付、南面四畳半間・脇門・板塀附属、桟瓦葺
	(座敷部)	桁行5.9m	梁間 7.0m	切妻造、北面東寄り・東面・南面・西面北寄り庇付、西面南寄り式台附属、桟瓦葺
道具蔵	土蔵造	桁行6.9m	梁間4.4m	二階建、切妻造、西面庇付、桟瓦葺
米　蔵	土蔵造	桁行8.9m	梁間3.9m	二階建、切妻造、南面庇付、桟瓦葺
釜　屋		桁行8.5m	梁間5.5m	切妻造、桟瓦葺
附指定の文化財				
風呂場	一棟	桁行2.3m	梁間1.4m	切妻造、桟瓦葺
雪　隠	一棟	桁行4.2m	梁間2.1m	切妻造、桟瓦葺
絵　図	一枚			

図1－1 香南市位置図

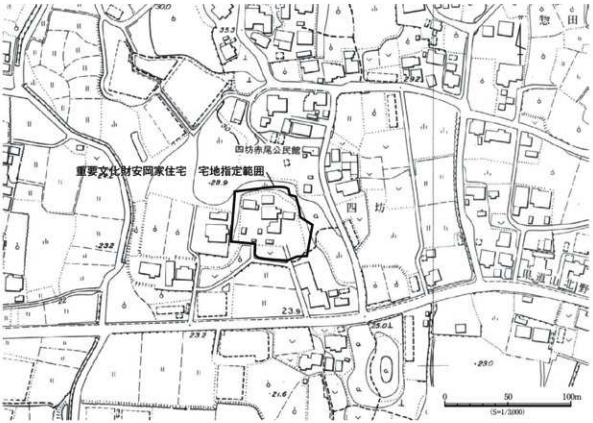


図1－2 試掘調査対象地位置図

重要文化財安岡家住宅主屋ほか5棟 保存修理事業は平成24年度に開始され、それに伴う試掘調査は平成25～30年度にかけて香南市教育委員会が実施した。

先行して行われた平成24～25年度の釜屋の解体調査で発見された墨書から、釜屋の建築年代が従来推定されていた文化年間(二代目広助正雄が養子となった時期)ではなく文政8年(1825)であることや、「味噌納家」の増築時期が天保10年(1839)であることなどが判明した。平成25年11月に建物解体で明らかになった情報を元に、復原根拠を裏付ける目的で試掘調査が実施された。調査では、近世(18世紀末～19世紀前半)以降昭和50年頃までの遺構と遺物が確認され、建造物の復原根拠が示された。

釜屋の調査結果を受け、平成26年度に香南市と高知県教育委員会文化財課が協議、重要文化財安岡家住宅の宅地指定範囲を「周知の埋蔵文化財包蔵地」に指定した。遺跡名称は「安岡家住宅」とされ、以後、平成30年度にかけて修理工事に伴い主屋・釜屋・新宅他・雪隠・米蔵・道具蔵の試掘調査を実施した。復原修理のための基礎資料を得るための試掘確認調査である。なお、平成26年度以降は文化財保護法に基づく発掘届提出を受けての調査となった。

2. 調査の経過と概要

年度ごとの調査地点と期間及び調査面積は以下のとおりである。

平成25年度

釜屋1次調査　平成25年11月12日～12月2日　29㎡

平成26年度

主屋1次調査　平成26年6月19日～8月13日　130㎡

主屋2次調査　平成27年3月2～19日　92㎡

平成27年度

主屋3次調査　平成27年4月28日～8月11日　225㎡

釜屋2次調査　平成27年10月23日～平成28年2月24日　47.2㎡

平成28年度

新宅及び周辺の水路・石垣　平成28年8月30日～9月16日　12㎡

主屋4次調査　平成29年1月21～24日　6㎡

雪隠　平成29年3月14～17日　20㎡

平成29年度

米蔵　平成29年5月24日～8月1日　48㎡

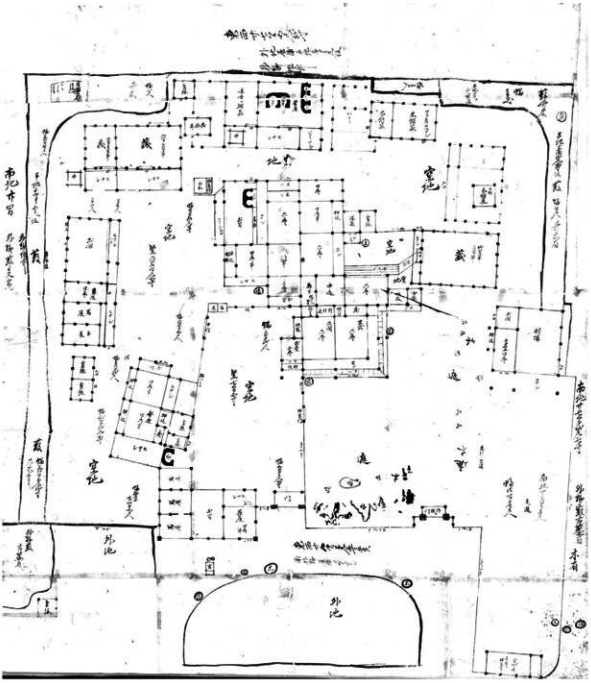
釜屋3次調査　平成29年9月14日～11月2日　40㎡

平成30年度

道具蔵　平成30年4月16～20日　20㎡

釜屋4次調査　平成30年6月25日　2㎡

図1－3 試掘調査地点の概略



資料1－1　安岡家住宅附指定絵図

第Ⅱ章　地理的・歴史的環境

1. 地理的環境

重要文化財安岡家住宅のある香南市は、高知県中央部高知平野東端に位置する。当市は平成18年3月に赤岡町・香我美町・野市町・夜須町・吉川村5カ町村の合併により誕生した自治体である。面積126.49㎢、人口33,360人(令和元年7月現在)、土佐湾に面し、海岸線から四国山地に連なる標高600ｍの山岳地帯を有する。恵まれた自然環境を活かしたニラの生産やシイラの水揚げなど特産物も多く、農業・漁業を中心とした1次産業が盛んな地域である。

北部に連なる山地は標高200～500ｍほどの急峻な山並みで、西端の三宝山(金剛山・標高265m)から東側の秋葉山(標高489.5m)、さらに北の四国山地へと連なる。この山地に沿って、2つの地質構造帯を分ける仏像構造線が走っている。構造線より北部が秩父帯南帯、南部が四万十帯北帯であり、秩父帯南帯は当地のランドマークである三宝山(金剛山)の名前をとって、「三宝山帯」と呼ばれている。中生代に形成された秩父帯南帯には、チャート・石灰岩などが含まれ、山稜北部には龍河洞や鬼ヶ岩屋洞窟に代表される多くの石灰岩洞窟や岩塊が分布している。

香南市内では近世以降、石垣の素材として、香我美町山北・大岩、夜須町大峰山などの石切り場から砂岩が採掘され、近年まで使われていたと伝えられている。現在でも山中に残る遺構を確認することができる。

2. 歴史的環境

(1) 埋蔵文化財からみた周辺の歴史

香南市の平野部から山麓部にかけて、近年の高規格幹線道路建設をはじめ様々な原因で遺跡の発掘調査が進み、新しい歴史が明らかになってきた。人々の足跡は旧石器時代まで遡り、弥生時代から古墳・古代・中世・近世にかけての新知見が蓄積されている。

平成27年、安岡家住宅から南西約4kmの東野土居遺跡から、後期旧石器時代(約2万5千年前)の角錐状石器が出土した。この遺跡からは、縄文時代草創期の有舌尖頭器も出土しており、今後、旧石器から縄文草創期の遺跡発見が期待されている。

縄文時代の遺跡は少ないが、山北の南側にあたる山南地区からは縄文時代後・晩期の遺物が出土している。香我美町徳王子地区の若一王子宮にはチャート製の石匙と石鏃など縄文時代の遺物が宝物として保管されており、山北・山南・徳王子地区など周辺に縄文時代の遺跡が立地する可能性を示す資料である。庭ヶ渕遺跡の調査では、縄文晩期から弥生時代前期への移行期の資料と北陸系土器、孔列文土器などが出土した。

弥生時代の遺跡として著名なのは、弥生時代の拠点的集落として知られる田村遺跡群(南国市)だが、近年、庭ヶ渕遺跡・徳王子大崎遺跡など弥生時代前期前半の遺跡が香南市域にも分布することが明らかになった。弥生時代前期前半の遺跡は少ないが、前期末になると香南市域でも遺跡数が増加し、物部川流域や香宗川流域に広く分布する。

安岡家住宅から南に4km、山北地区と山南地区との境界付近にまたがって、小丘陵の先端の沖積地に立地する下分遠崎遺跡がある。弥生時代前期末から中期の土器とともに多数の木製品や動植物資

料が出土し、注目された。近在で最も古い時期の遺跡は仁王堂遺跡(弥生時代中期末から後期末)で、丘陵南西斜面から弥生時代後期の竪穴建物2棟が確認されている。野市町富家の本村遺跡は、丘陵の緩斜面で弥生時代中期末から後期初頭の竪穴建物7棟が確認された高地性集落である。

3世紀中葉、弥生時代後期終末から古墳時代のはじめにかけて、高知平野では遺跡数が急増する。2世紀以降、拠点的集落田村遺跡群が衰退するのと機を同じくして、周辺部へ集落が拡散、集落の増加とともに人口が急増し、東野土居遺跡など大規模な遺跡が形成されるようになる。香南市内でも香我美町の

図2－1 安岡家住宅周辺の遺跡

表2－1 安岡家住宅周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代
1	烏ヶ森城跡	城跡	中世
2	高田山城跡	城跡	中世
3	ノツゴ遺跡	散布地	弥生
4	西佐古遺跡	散布地	古代・中世
5	前ノ山城跡	城跡	中世
6	東佐古遺跡	散布地	弥生・古墳
7	上分古墳	古墳	古墳
8	小山谷古墳	古墳	古墳
9	鬼ヶ岩屋洞穴遺跡	洞穴遺跡	弥生・中世
10	笹ヶ峰遺跡	洞穴遺跡	弥生
11	白岩窯跡	窯跡	古代・中世
12	アゴデン窯跡	窯跡	古代
13	竹ノ内（溝洞山）古墳	古墳	古墳
14	亀山窯跡	窯跡	弥生・古代・中世
15	日吉山古墳群	古墳	古墳
16	父兼寺城跡	城跡	中世
17	父兼寺古墳	古墳	古墳
18	母代寺上居屋敷遺跡	集落跡	古代～中世
19	城八幡城跡	城跡	古墳
20	母代寺遺跡	散布地	古代・中世
21	深洞北遺跡	集落跡	弥生～中世
22	西上野遺跡	散布地	弥生
23	大谷城跡	城跡	中世
24	大谷遺跡	散布地	古墳・古代
25	大谷古墳	古墳	古墳
26	山下遺跡	散布地	古代・中世
27	中山田土居城跡	城跡	中世
28	兎田柳ヶ本遺跡	祭祀跡	弥生・古墳
29	兎田八幡宮遺跡	散布地	中世
30	西ノ谷遺跡	散布地	古代・中世
31	大崎山古墳	古墳	古墳
32	宮家城跡	城跡	中世
33	本村遺跡	集落跡	弥生～中世
34	本村アンノヤシキ遺跡	散布地	古代・中世
35	曽我遺跡	集落跡	弥生～中世
36	香宗城跡	散布地	中世
37	香宗遺跡	散布地	中世
38	宝鏡寺跡	寺跡	古代～中世
39	東野土居遺跡	集落跡	旧石器～近世
40	東野遺跡	散布地	古代・中世
41	平井遺跡	散布地	古墳・古代
42	深川城跡	城跡	中世
43	深川遺跡	散布地	弥生～中世
44	西野遺跡	集落跡	弥生～中世
45	北地遺跡	集落跡	弥生～中世
46	下ノ坪遺跡	集落跡	弥生～古代
47	上岡北遺跡	堤防・集落跡	弥生・近世
48	上岡遺跡	集落跡	弥生・古代
49	高田遺跡	集落跡	弥生～中世
50	下高田遺跡	集落跡	古代～中世
51	宇賀遺跡	散布地	弥生～中世
52	下井遺跡	散布地	古代・中世
53	八丁地遺跡	集落跡	古代
54	横井ナノ丸遺跡	散布地	中世～近世
55	横井ウノ丸遺跡	集落跡	古代～中世
56	野口遺跡	散布地	弥生～中世
57	射場屋敷遺跡	集落跡	弥生～中世
58	吉原遺跡	城跡	中世
59	八反遺跡	散布地	中世
60	浜口遺跡	散布地	弥生・古墳
61	南中曽遺跡	散布地	弥生・古墳
62	住吉砂丘遺跡	散布地	弥生
63	小屋敷遺跡	散布地	中世
64	ハザマ遺跡	散布地	弥生～中世
65	屋敷田城跡	城跡	中世
66	御所の前遺跡	散布地	弥生～中世
67	大東遺跡	散布地	古墳～中世
68	江見遺跡	散布地	古墳
69	岸本飛鳥神社西遺跡	集落跡	近世
70	岸本ヨノ丸遺跡	散布地	中世
71	西坊遺跡	散布地	中世
72	安岡家住宅屋敷遺跡	近世	近世
73	岡ノ芝遺跡	散布地	古墳～中世
74	宮の西遺跡	集落跡	弥生・古墳
75	宮ノ前遺跡	散布地	弥生～中世
76	前田城跡	城跡	中世
77	下分海崎遺跡	集落跡	弥生
78	中城跡	城跡	中世
79	久保田竜免遺跡	集落跡	古代～中世
80	久保田遺跡	集落跡	中世
81	刈谷城跡	城跡	中世
82	国吉城跡	城跡	中世
83	花宮遺跡	集落跡	弥生
84	惣王子大崎遺跡	集落跡	弥生・中世
85	東狭間遺跡	集落跡	弥生・古代～中世

幅山遺跡・拝原遺跡・下分遠崎遺跡、野市町の兎田柳ヶ本遺跡・西野遺跡・深洲遺跡・東野土居遺跡、夜須町の寺尾遺跡、吉川町の射場屋敷遺跡・東狭間遺跡など、香南市内全域に集落が広がる。市内で確認された竪穴建物の半数以上がこの時期のものである。

山北地区では遺物散布地として「宮ノ前遺跡」の存在が知られている。浅上王子宮の南側一帯に弥生土器や須恵器などの遺物が散布し、集落遺跡の存在が予想されている。

(2) 香我美町山北地区

安岡家住宅は香南市香我美町山北地区に所在する。山北地区は、山麓から平野部にかけて小丘陵の連なる地形の特徴と温暖な気候を活かした温州みかんの栽培として広く知られる。このみかん栽培は安政5年(1858)池田文治が長岡村(現南国市)から苗木を取り寄せたことから始まったと伝えられ、「山北みかん」のブランド名で広く流通する。

毎年11月18日に行われる県指定の無形文化財「山北棒踊り」には、祭礼が行われる浅上王子宮に多くの人々が集まる。「山北棒踊り」は、正徳元年(1711)土佐藩家老山内規重の山北村蟄居をきっかけに、翌2年(1712)から始まり、現在まで伝承されてきた。山北村安弘が蟄居の地とされ、ここで誕生した豊敷は後に土佐藩8代藩主となる。また、周辺には山内規重蟄居跡・殿様釣井など関連する史跡も残る。日本で唯一残る香我美町徳王子若一王子宮の「烏喰いの神事」に代表されるように、現在まで伝承されてきた無形文化財も数多い。

山中には信仰の対象となってきた寺院・神社もあり、山越えの道が地域の大切な往還として機能してきた。なかでも2体の国指定重要文化財木造大日如来坐像、金剛界と胎蔵界(平安後期)のある恵日寺を通る往還は、主要な山道として一丁ごとに「丁石」が置かれ整備されていた。基点となる南麓

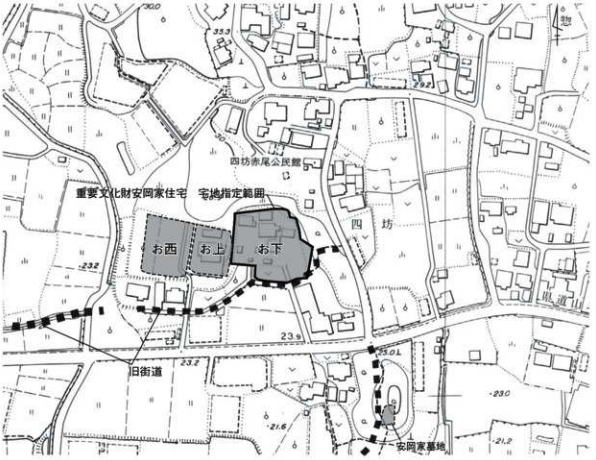


図2－2 安岡家住宅周辺の文化財

には「万延二年」銘(1861)の丁石が残っている。

山北地区には石碑・墓地・絵馬など江戸時代以降の史跡や文化財が多く、旧街道筋の金比羅燈籠など、当時の文化と景観を伝える。

(3)安岡家住宅の歴史

安岡家住宅は、芥川賞作家安岡章太郎の父親の生家として知られている。章太郎の父方のルーツを探った『流離譚』(上・下)には安岡家の歴史について詳細な描写が記されている。安岡家一族には日記等の記録を残した当主が多く、それらの日記は同時代資料として史料価値が高い。特に、幕末前後の状況を記録した「文助日記」は、章太郎が「流離譚」を著した際の重要な原資料で、著述の根拠となった。

安岡家の先祖、安岡喜三郎重正が夜須から山北へ移住したのは、寛永年間(1624～1643)とされている。一族で最初に郷士(譲受郷士)となったのは佐五右衛門正直(前田安岡家)である。お下家の2代目となる広助は、前田安岡家から郷士株を譲り受け、文化6年(1809)に郷士となった。

安岡家が現在の四坊山周辺に移ったのは、平八正久(四坊安岡家の祖)の時で、その後四家に分家する。本家は平八正信が継ぎ、お下家は覚兵衛正元、お上家は喜六正家、お西家は文助正理が元祖となった。平八正久からみると、本家・お下家・お上家は子の世代、お西家は孫の世代で、分家した時期も異なる。(18世紀後半から幕末・19世紀中葉にかけて。本家・お下家・お上家・お西家の順)

初代覚兵衛正元が重要文化財安岡家住宅である「お下家」に住み始めたのは明和8年(1771)で、2代目広助正雄、3代目源右衛門正方、4代目恒之進正代、5代目又彦、6代目秀彦、7代目寿雄と受け継がれ現在に至る。

初代の覚兵衛には3人の男子と4人の女子がいたが、長女と3女以外は早世している。2代目広助正雄は本家平八の次男として生まれ、お下家に養子として入った。当時、豪農や郷士に多く見られたように、安岡家でも一族の中で養子縁組を行った。また、同じ郷士の間で縁戚関係を結ぶ例が多かった。「お下家」が大きく発展したのは、広助の時期である。広助には5人の男子と2人の女子がいた。お下家を相続した源右衛門、お西家の祖である文助の他、3人の男子が公文家、傍士家、別役家へ養子として入っている。

幕末になると一族7名が歴史の舞台に登場する。安岡恒之進・権馬・覚馬・覚之助・嘉助・道太郎・公文俊章の7名で、養子縁組や分家など全員が広助の孫と曾孫である。

中でも勤王党で活躍し後に戊辰戦争に従軍、戦死した安岡覚之助、吉田東洋暗殺に関わり、天誅組に参加した嘉助、若くして勤王運動に参加、その後自由民権運動で活躍した道太郎の3兄弟は広く知られている。覚之助、嘉助は明治中期に正五位、従四位を贈られ、旧山北村役場の前に顕彰碑が建てられている。

戊辰戦争には覚之助の他に道太郎、公文俊章、別役俊蔵が従軍した。明治前期には、土佐で自由民権運動が広がり、安岡家一族は古勤王派と民権派の相対する勢力に参加した。

古勤王派に属し、お上家で富永有隣[11]を匿った権馬(お下家からお上家に養子に入る)は、古勤王党のリーダー大石圓とともに松山で投獄され、釈放後病気で亡くなっている。

民権派として活躍したのは、道太郎、正象、又彦、別役儁(春田)である。道太郎は立志社で活躍、民選議員設置の「立志社建白書」の提出に関わり、高知新聞創刊時の編集委員で、「民権よしや節」の作詞者としても知られている。画家として著名な別役儁(春田)は、広助の孫で安岡家住宅の西部の冨家村の初代村長であり、自由民権運動のリーダーの一人として活躍した。

江戸時代後期から明治にかけて地域の中心となる安岡家は、山北での蒸蚕の導入の際にも大きな役割を果たした。安岡家住宅には明治時代の蚕の種紙(描かれたマスの中に蚕の卵が産み付けられた紙)が残る。種紙は明治40年以降28マスに統一されるが、安岡家住宅に残るものは25マスで、統一規格になる以前のものである。又彦が当主であった明治中期のもので、本家が移住した福島県梁川市から送られた封筒、道具類とともに現在も残る。

安岡家の歴史資料としては、幕末から明治の歴史史料としての「文助日記」が知られているが、秀彦日記など、より新しい時期の資料も残されている。安岡家住宅は、江戸時代から現代に至る変遷について、文献資料のみならず今回の建造物調査及び埋蔵文化財調査、民具資料からも知ることができる貴重な文化財である。

お下家歴代当主と年代
初代　覚兵衛正元(1752～1807) 55歳
2代目　広助正雄(1780～1841) 61歳
3代目　源右衛門正方(1812～1844) 32歳
4代目　恒之進正代(1835～1863) 28歳
(この間に覚馬、庸次郎(ようじろう)、房が相続)
5代目　又彦(1866～1900) 35歳
6代目　秀彦(1885～1961) 76歳
7代目　寿雄(1912～1998) 86歳
現在の当主は安岡富美氏 (1918年～)

補注

(1) 長州の富永有隣は明治初期、新政府から逃れて土佐に潜伏、大石圓(現香南市野市町。市指定史跡『大石圓宅跡』に当時の屋敷の一部が残る)など、土佐の有志によって匿われ、明治11年(1878)大豊町の洞窟で捕まるまで高知県下各地で潜伏生活を送り、安岡家(お上家)にもその足跡を残した。

参考文献

『流離譚』(上・下) 安岡章太郎 1981
『家を支えた先人たち ある土佐藩郷士の家譜』 安岡由喜 1988

第Ⅲ章　調査成果

1. 主屋

(1) 調査の概要

主屋では1～4次にわたって調査を行った。各次調査ごとの概要及び成果を以下にまとめる。事前に行われた(公財)文化財建造物保存技術協会(以下、文建協)による解体調査の結果、居室部の創建(移築)年代は文化5年(1808)、座敷部の創建(新築)年代は文化7年(1810)であることが判明している。なお、本文中でトレンチ又は遺構の位置を示す際には便宜上修復前の居室名称を用いる。名称は保存修理工事の際に使用されたものに準じる。また、調査に際しては、建物の主軸方向を踏襲した任意の4mグリッドを設定し、測量を行った。調査は建造物の復原根拠の検証を行うことを目的とし、工事の障害となる掘削や調査等は実施していない。設定したトレンチの範囲内で

資料3－1 主屋周辺絵図

図3－1 主屋修理前居室名称図

地層確認や遺構調査を行うことを基本とし、遺構・遺物・堆積状況等の必要な情報を図面・写真等により記録した。

①1次調査

試掘トレンチは11カ所(TR1～11)で、原則幅0.5mとし、その他必要に応じてサブトレンチを設定した。面的に確認が必要な場合や遺構調査を行う場合は、検討協議を行った上でトレンチ外の範囲についても掘削を行った。1次調査着手前に確認した検討課題は以下の4点で、これらの課題のうち、ⅰ～ⅲについては建物の復原根拠を裏付ける調査である。

ⅰ. 屋敷地形成の状況(地層)確認

ⅱ. 礎石抜取穴の確認

ⅲ. 絵図及び居室部移築時のクドの位置確認

ⅳ. 座敷部北東部(相の間)床下で観察された20基以上の遺構痕跡の性格確認

試掘トレンチは、これら4点の課題を検証可能な位置に設定した。

②2次調査

1次調査の結果、蟻道が確認されたため床面以下0.15m程度に防蟻処理を施す掘削工事が行われることとなった。掘削工事に先行し、座敷部北端及び居室部南部など、遺構の存在が想定される地点に新たなトレンチ(TR21～35)を設定し、遺構の確認及び工事で影響を受ける遺構の調査を行った。目的

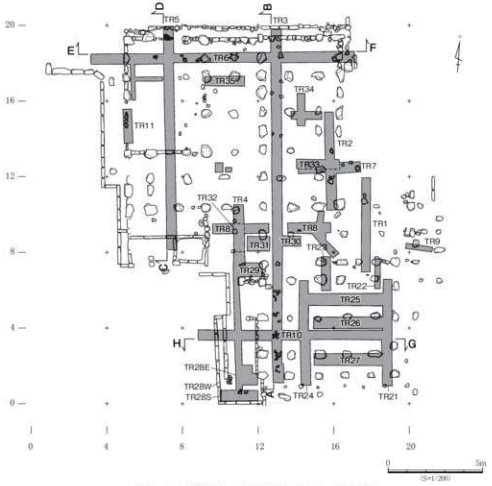


図3－2 主屋グリッド設定図・トレンチ配置図

は座敷部下層遺構と礎石の設置状況の把握、壺状土坑の性格特定に必要な情報収集である。壺状土坑については1次調査より継続、加えて座敷部の北側で確認された陶器埋納遺構の周辺調査を行った。

③3次調査

主屋床面剥ぎ取り工事に伴い、工事前及び並行して実施した調査である。工事は座敷部から居室部へと連続して行われ、全域にわたって可能な範囲で遺構の確認調査を実施した。

④4次調査

主屋周縁の側溝整備に伴う調査である。トレンチ状に掘削された雨落ち溝の壁面・床面で堆積状況及び遺構・遺物の有無の確認を行った。

(2) 調査成果

1次調査の際に課題とされた項目と、その他の調査成果について詳細を掲載する。1～4次までの調査で確認した遺構を遺構配置図に示す。検出した遺構についてはそれぞれの棟で通し番号を付し、主なものについて抽出し出土遺物と併せて図示する。礎石抜取穴の位置については別途記載する。また、包含層遺物については出土地点毎に掲載する。

①基本層序

試掘トレンチの基本層序を以下に図示する。

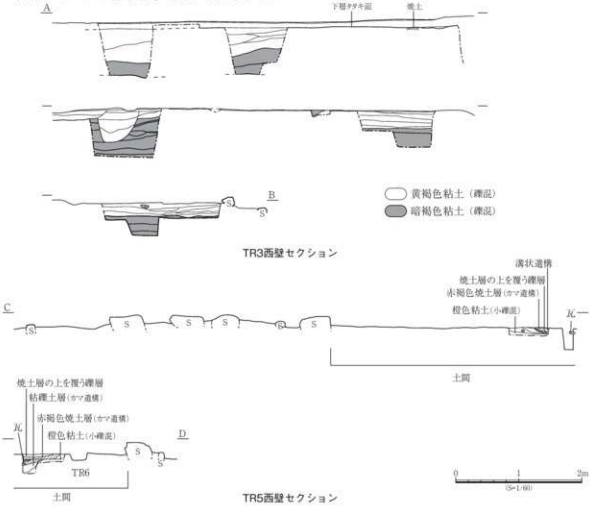


図3－3 主屋TR3・5セクション図

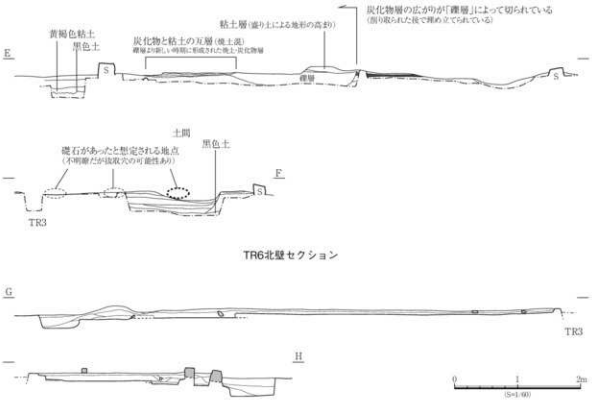


図3－4 主屋TR6・10セクション図

現況床面以下、南部で0.9m、北部で0.6mの地点で旧表土を確認した。座敷部は礫、居室部は小礫が混じる橙色を呈する粘土である。詳細な初見については各地点の項目において示す。

②礎石抜取穴の検証

礎石抜取穴の検証は、その位置に柱があったかどうか確認する作業である。主屋の解体調査で明らかにされた移築や改築、間取り変更など建物の変遷を裏付ける情報を得ることを目的とした。

想定される検証結果は3種類、抜取穴の存在が確認できる場合、抜取穴がなかったと確認できる場合、後世の地形改変等のためいずれとも判断できない場合である。

検証を行ったのは合計24地点で、居室部北西角から座敷部南端まで、1～24の番号で以下に示した。1～4が土間周辺、5～7が居室部北東部、8が現存する床下土坑隣接地点、9～12が居室部南東、13～15が居室部と座敷部の境界、16～24が座敷部南西端の式台周辺である。それぞれについて所見をまとめる。

ⅰ)居室部北西の柱

解体調査では、土間の小屋梁および桁に残る痕跡から1～3の位置に柱があったと推定された地点である。抜取穴の可能性のある落ち込みを検証したが、明瞭な遺構ではない。下層確認調査で地形改変を受けていることが判明し、抜取穴ではないことが明らかになった。この地点の礎石の有無は検証できなかった。

ⅱ)土間出入口(居室部西側)中央の間柱

居室部西側の土間出入口の中央部に間柱があったと解体調査で推定された地点4である。検出さ

れた遺構は2基で、南部が長軸0.3mの楕円形、北部が長軸0.4mの楕円形、埋土に拳大の礫が混ざる。礎石抜取穴と判断された。

ⅲ）居室部北東の束あるいは柱

改築前の解体調査で、居室部北東5～7の位置に束あるいは柱があったと想定された地点である。5・6では明確な遺構を把握することができなかった。7の位置には、現状の床面に径約1.0m、深さ0.2mの不整円形の掘り込みがあり、礎石の有無については検証できなかった。

ⅳ）居室部南側の間取り変更を示す柱

居室部の中央南側、隅丸長方形（長軸1.65m、短軸1.20m、深さ0.40m）の土坑南側にあたる。長軸0.60m、短軸0.50m、深さ0.09mの方形の掘り込み8が現状の床面に残っており、礎石抜取穴と考えられる。

居室部南西の現状は4畳半間2室が隣合う間取りだったが、文化5年（1808）の移築時には6畳間2室に分かれていたことが解体調査で判明しており、抜取穴の存在はこれを裏付ける。

ⅴ）移築前の居室部の間取りに必要な柱位置

居室部東部の9～12は移築前の居室部の平面形状から想定された礎石（柱）の位置である。トレンチ

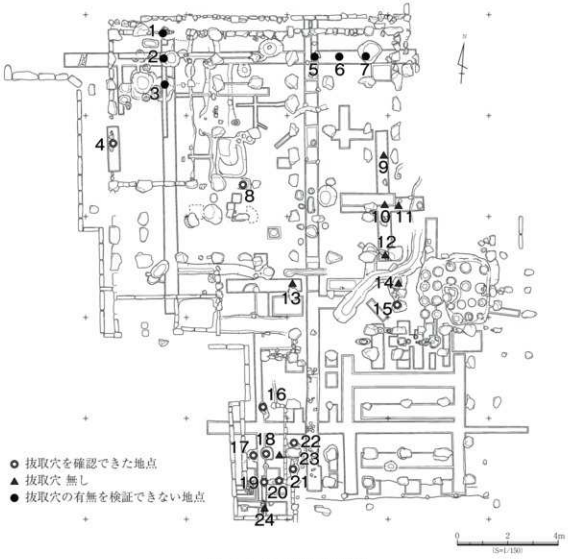


図3－5 主屋柱抜取穴位置図

範囲の面的な調査を行ったが礎石抜取穴の痕跡はなく、この位置に礎石がなかったことが確認された。これにより、居室部が当地に移築された際に間取りが変更されたとする解体調査の結果が裏付けられた。

vi）移築前の居室部南東下屋の柱位置

居室部が単独の建造物として移築されたと想定すると、下屋を支える柱が必要となる。移築前の建物で下屋を支える柱及び礎石があった場所は、13・14と推定されたが、2地点とも抜取穴がないことが確認された。ここに礎石が存在しないことにより、居室部が単独の建物という意図で移築されたのではなく、居室部の移築（文化5年）と座敷部の建築（文化7年）が計画的に行われたことを裏付けるものと判断された。

vii）居室部移築時の軒まわりの納め方

居室部南東角に続く廊下部東面と座敷部北面の庇の隅柱の位置が15である。中庭の東側にあたり、長軸0.70m、短軸0.60m、深さ0.23mを測る不整楕円形の礎石抜取穴と考えられる遺構が確認された。これにより、廊下部東面と座敷部北面の庇の桁がこの位置で接続していたとする解体調査の推定が裏付けられた。

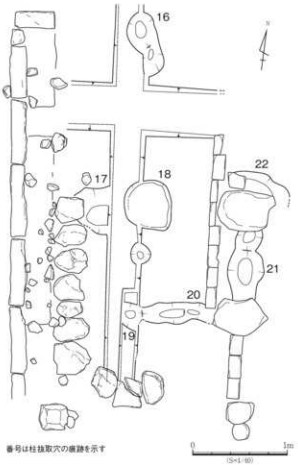


図3－6 主屋式台周辺柱抜取穴・石列遺構図

viii）座敷部式台周辺の構造・規模推定の根拠

座敷部南西角に位置する式台周辺は建築当初から大きく形状を変えている。16～24の9地点で礎石抜取穴の存在について検証した。16～22は礎石及び布石など形状を変える前の式台の構造に関する抜取穴の検証、23・24は式台の規模の推定根拠とする情報を得るための検証である。

16～22では抜取穴が残っていることを確認した。現状の床面からの深さは0.03～0.14mと比較的浅い。これら式台周辺の礎石検証は、創建期の式台の規模、向きなど想定される建物の復原根拠を裏付けるものと判断された。23・24には抜取穴は確認されなかった。

ix）出土遺物

式台周辺からは出土した遺物の内、図示したものは1～6である。それぞれの法量及び特徴等については遺物観察表にまとめ、本文では特徴的なものについて述べる。4は肥前産の青磁鉢である。内外面に青磁釉がかかり、高台畳付は露胎する。高台内周縁に砂粒が付着し、見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。TR3の南部、式台付近の現床面より0.3m下の黒色土層より出土した。5は銭貨で、約1/2が欠損するが「寶」の文字が見てとれる。6は煉瓦で、全長23.1cm、全幅11.1cm、全厚6.2cmを測る。大正14年（1925）に定められた日本標準規格（JES）及び現行の日本工業規格（JIS）は全長21cm、全幅10cm、全厚60cmであることから、大正14年（1925）以前のものと推察される。刻印は施されていない。

造成土出土及び表土から出土した遺物の内、図示したものは7～16である。14～16は砂岩製で、

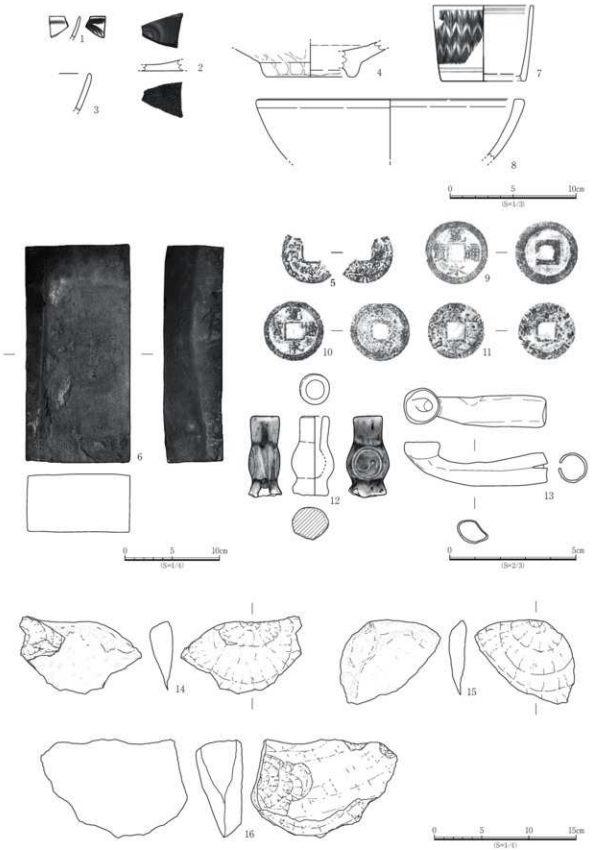


図3－7 主屋式台周辺・造成土出土遺物

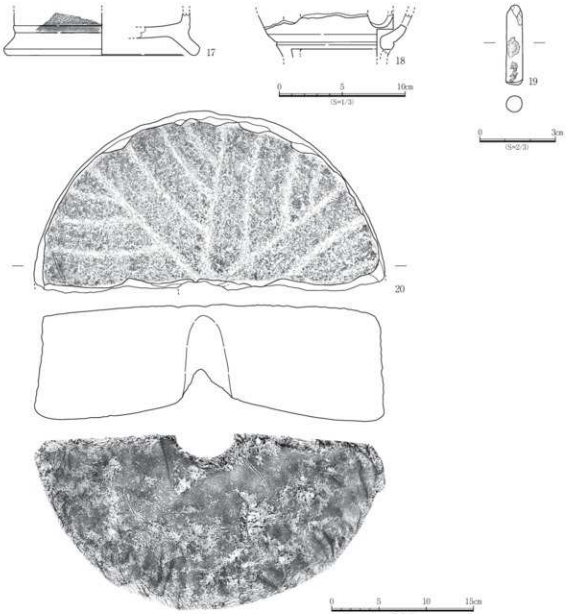


図3－8 主屋中庭出土遺物

礎石等の製作時に生じた剥片とみられる。剥片類の出土は、式台周辺に限定される。礎石や狭間石、布石の一部は現地で成形加工の最終作業が行われていたと推定されるが、接合できるものは確認できない。14・15は土間の入り口、16はTR6西部から出土した。17～20は中庭で出土した遺物である。20は花崗岩製の石臼である。

③居室部土間の堆積状況と焼土を伴う遺構群

絵図に記載されている居室部土間北東部のクドの位置を検証したが、痕跡は確認できなかった。また、居室部移築当時のクドの有無や位置の特定につながる情報も得られなかった。

土間からは重なり合う焼土遺構と焼土層を検出した。この地点は主屋の台所として、煮炊き作業が行われた場所である。土間北東部一帯は、明治中期以降の改変を受けており、推定される礎石抜取

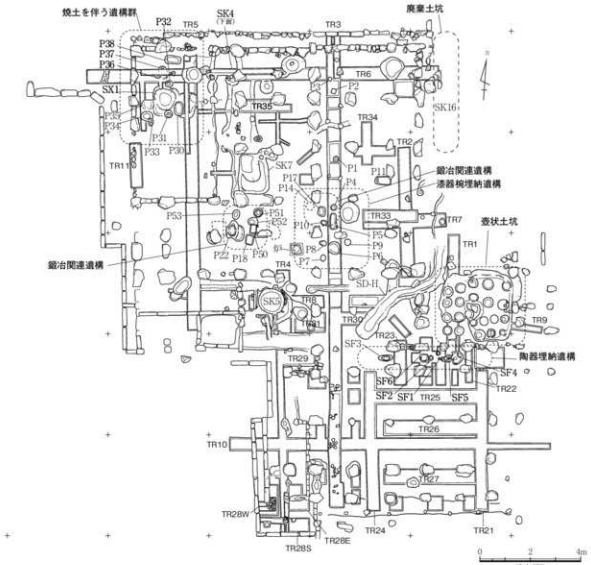
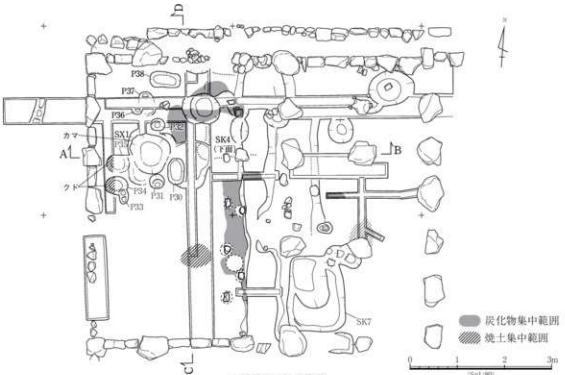


図3－9 主屋遺構配置図

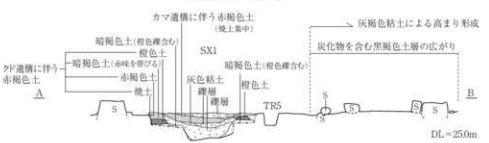
穴の有無やクドの位置を検証することはできない。焼土の検出は土間北半の西側3分の2に限定されており、炭化物・焼土層もこの範囲に集中している。

焼土分布範囲で検出できた遺構はA群－SX1(カマ遺構)及びP31～33(同時期の遺構)、B群－P34・35(2連のクド遺構)、C群－その他の土坑・ピットに分けられる。A・B群は埋土に焼土を含む。B群はA群より下層で検出されており、より古い時期の遺構と判断された。遺構の切合い関係から、A群は明治20年頃よりも新しい時期に位置づけられる。

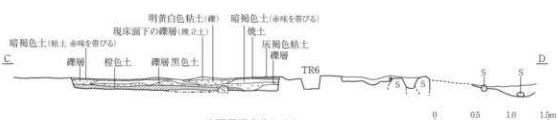
絵図にクドが記載された地点には長軸1.8m、短軸1.5mの長方形で、床面からの深さ0.45～0.48mの土坑(SK4)が構築されていた。明治中期のクドの痕跡が確認できなかったことから、SK4及び周辺の改変はそれ以降に行われたと考えられる。絵図のクドの位置を特定することはできなかった。検出した遺構の内、最も古い時期の焼土を伴う遺構(クドと推定される)も、建物改築を根拠に弘化年間以降と推定され、創建期である文化年間のクドを特定することはできなかった。



土間周辺遺構配置図



土間周辺東西セクション



土間周辺南北セクション

図3－10 主屋土間周辺遺構図

煮炊に関連する施設の変遷を以下に示す。

1. 居室部移築当初	不明(遺構の存在を確認できず)
2. 弘化年間以降	2連のクド遺構(B群－P34･35)
3. 明治20年頃	絵図の位置(地形改変のため遺構は残存せず)
4. 明治中期以降	カマ遺構と周辺の焼土遺構(A群－SX1及びP31～33)
5. 現状土間床面形成以降	煮炊に関する施設なし

B群を弘化年間以降に比定したのは、当該期に居室部の大きな改変があり、建物間の連携が大きかった主屋と釜屋の関係及び土間出入口の形状が変化したことを根拠とする。

④壺状土坑

床面を掘り込んだ壺状土坑と把握できるものは21基である。当初可能性があるとして1～23の番号を付したが、他地点と同じ形態の遺構が確認できないものは11と14である。11は直径34cmの円形の物体を据えた痕跡が残る。14については13と15の間に重なる連続した遺構として把握できる可能性を検討したが、壺状土坑とは異なる性格のものであると判断した。

周囲から一段低くなった平坦面に19基、南側の一段高い座敷部に連なる面に2基、相の間の床下中央に据えられた礎石または束石を取り囲むように規則的に配置されている。束石の周囲は円形に取り囲んでいるが、周辺部はそれぞれ直線的に並べて配されている。

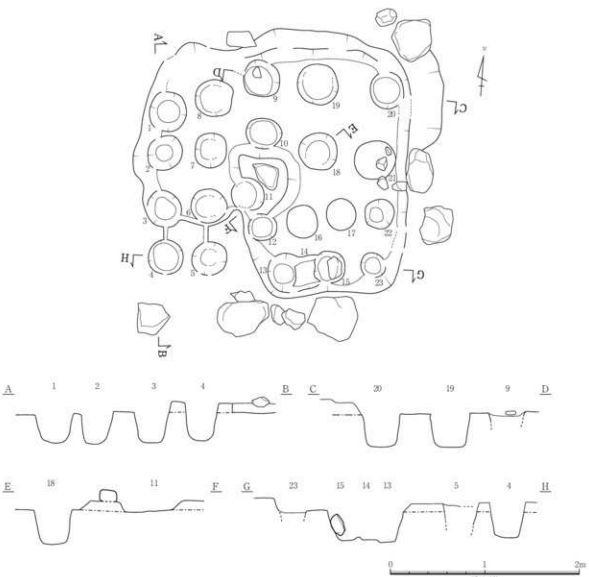


図3－11 主屋壺状土坑遺構図

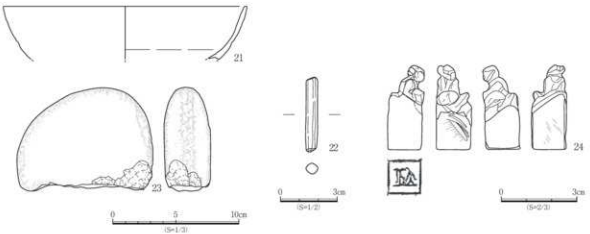


図3－12 主屋壺状土坑出土遺物

平面形は円形で、直径0.30～0.40m、深さ0.35～0.40mを測る。断面はU字状を呈し、壁面は直線的に下方へ掘り込まれる。底面は丸みを帯び、中央部が周縁より3～6㎝程度深い。平面形状と規模から、大きく3類に分類される。

A類　直径0.38～0.40m　比較的大きく、分布範囲の北東側にまとまって分布する。

B類　直径0.35～0.36m前後　平均的な大きさで中央から西側にかけて分布する。

C類　直径0.30～0.32m前後　最も小さいもので直径0.29m。南東側に分布する。

遺構埋土は、2層に分層できる遺構（Ⅰ類）と3層に分層できる遺構（Ⅱ類）とに分かれる。埋土1層は、小礫～拳大の礫を含む締まりのない層で、20～30㎝大の粘土塊が含まれる例もある。埋土2層は礫をほとんど含まない褐色土であり、各遺構とも底面付近はこの褐色土である。大半の遺構が、2層に分層できるⅠ類である。Ⅱ類とした3層に分層可能な遺構は、Ⅰ類の埋土1より上層に締まりのあるやや赤みを帯びた褐色粘土質シルト層が堆積するもので、壺状土坑1・19の2例のみである。他に比べて中央部の落ち込みが少ない。埋土中に人頭大の礫が入る15の例があるが、それ以外の埋土には人頭大の大きさの礫は含まれない。3にはブロック状の粘土塊が混じる。

壺状土坑1から椀状の鉄製品21が出土している。推定される口径19.2㎝、残存高4.2㎝、全体形状は不明である。15からは礫の側面に張り付く形で、漆の被膜が出土している。

周囲は堅くタタキ締められており、土坑壁面と埋土の境は顕著である。TR9の壁面で、下段（大半の壺状土坑が形成される層）と上段（座敷部が形成される層）が連続して構築されたことが判明した。ただし、北東側の壺状土坑20のみ下層がタタキ締められた後、暗褐色の土を挟み、その後上層の一段高い部分をタタキ締めて形成されている。工事で影響を受けない2基については未調査のまま保存した。遺構の機能や性格は不明であるが、何らかの貯蔵を目的としたものである可能性が高い。

⑤陶器埋納遺構1（SF1～6）

座敷部北側に陶器が埋納された祭祀関連遺構が列状に並んで検出された。土坑状の遺構を形成し、小壺に蓋を重ねた形で埋納するもの（SF5･6）、掘り込んだ遺構に陶器または磁器蓋物を埋納するもの（SF1･2）、深さ0.6mのピット状遺構の上に礫を置き、陶器蓋物を埋納するもの（SF3）である。建物の構造上、建築後に遺構を造るのが不可能な場所であり、文化7年（1810）の創建以前に埋められたものだと判断された。陶器の小壺に蓋を重ねた容器が、SF5及び6から合計6点出土した。密閉された容器の

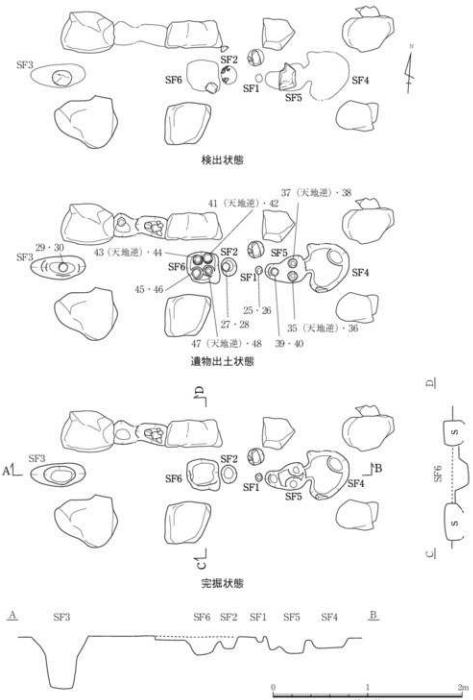


図3－13 主屋陶器埋納遺構遺構図

中には黒変した内容物が伴う。うち4点は、水で満たされた中に内容物が入った状態で出土した。水の由来は不明である。近世の民家床下埋納の例として、胎盤やへその緒などを入れる容器としての「胞衣壺」の埋納が知られており、同様の性格を持つと推察される。SF1からは25・26が出土した。25は陶器蓋である。外面に施釉され、裾部から内面は露胎する。外面天井部に墨書が施される。26は陶器の小型の碗である。内外面とも施釉され、口縁端部は釉を剥ぎ取る。外面に「南」、その直上の口縁端部に「・」の墨書が施される。SF2からは27・28が出土した。27は土師質土器杯である。外面底部に回転糸

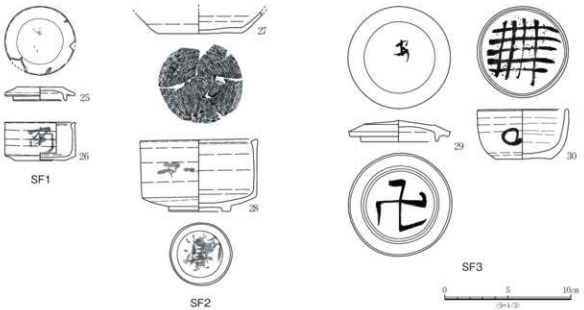


図3－14 主屋陶器埋納遺構出土遺物1

切りの痕跡が残る。28は陶器碗で、外面腰部以下は露胎、高台内に墨書が施される。口縁端部は釉を剥ぎ取る。27は28の内部に落ち込んだ状態で出土したことから、蓋として使用されていたものと見られる。SF3からは29・30が出土した。29は土師質土器蓋で、内面天井部に「卍」、外面天井部にも「安」と見られるの墨書が施される。30は土師質土器の小型の椀で、内面底部に四縦五横の九字と見られる格子文、外面に「○」の墨書が施される。SF4からは31～34が出土した。31は信楽の陶器蓋で、外面は施釉、内面は露胎する。天井部と笠部の境目に明確な稜を成す。かえり部に砂粒が付着する。32は信楽の陶器碗で、内外面とも施釉、外面腰部以下は露胎する。口縁端部は釉を剥ぎ取る。見込みに3カ所の目痕が残る。33は信楽の陶器蓋である。外面のみ施釉、内面は露胎する。天井部と笠部の境目に稜を成す。外面天井部に墨書が見られる。34は信楽の陶器碗で、内外面とも施釉、外面腰部以下は露胎する。口縁端部は釉を剥ぎ取る。見込みに3カ所の目痕が残る。SF5からは35～40が出土した。35は京都・信楽系の陶器蓋である。外面に施釉、内面は露胎し、外面中央に2方から折り曲げた摘みが付く。外面底部に「権馬」の墨書が見られる。36・38は陶器の小型の壺で、内外面とも施釉、外面底部は露胎する。口縁部は短く直立し、端部は水平な面を成し内面口縁部と共に釉を剥ぎ取る。内面底部に3カ所の目痕が残る。外面底部に墨書が見られる。37は35と同様の蓋であるが、産地は不明である。外面底部に墨書が残る。39は京都・信楽系の陶器蓋で、外面は施釉、内面は露胎する。40は京都・信楽系の陶器碗で、内外面とも施釉される。外面に「南」、その直上の口縁端部に「・」の墨書が施される。「南」及び直上口縁端部の墨書については26と同様で、埋納する際に上部から「南」の方角を示すために施された可能性を含む。35・37の蓋は天地が逆転した状態で出土した。SF6からは41～48が出土した。41・43・45・47は35・37と同様の蓋である。42は陶器の小型の壺で、内外面とも施釉される。口縁部は短く直立し、口縁端部及び内面口縁部は釉を剥ぎ取る。外面底部は碁笥底状に深く削り出し露胎する。44は陶器の小型の壺で、外面は施釉、外面底部及び内面は露胎する。口縁部は短く直立し、端部は釉を剥ぎ取る。出土時は内部に有機物が残っていたが詳細は不明である。46は48と同様であるが、外面底部に墨書が見られる。45以外の蓋は天地が逆転した状態で出土した。

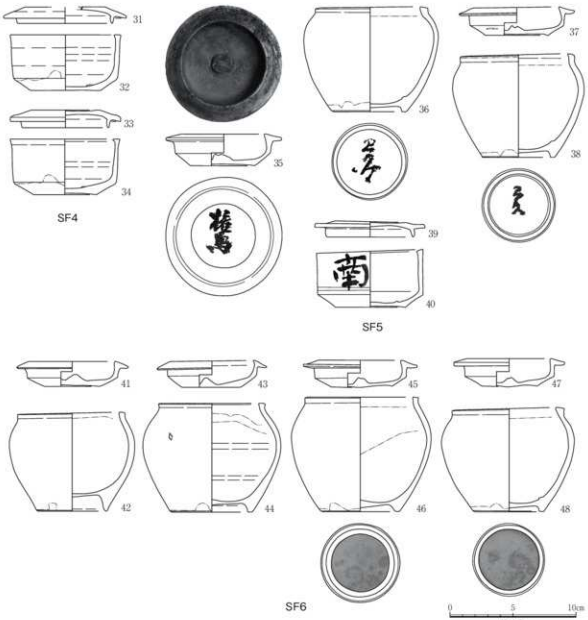


図3－15 主屋陶器埋納遺構出土遺物2

⑥漆器椀埋納遺構（P4～11）

居室部南東部で漆器椀が埋納された祭祀関連遺構を8基検出した。各遺構は床面から掘り込まれ、漆器椀を埋納した後、上部に20～50cm大の礫が置かれる。出土した漆器椀は風化が著しく、木質や漆の被膜のみ残存するものも確認された。出土した漆器椀のうち、残存状態が比較的良好なものについて図示する。P6から49が出土した。内面は黒漆を下地とし、その上面に赤漆が施される。外面は黒漆である。下位は欠損する。P7からは50が出土した。内面は黒漆、外面は黒漆を下地とし、上面に赤漆が施される。高台は欠損するが痕跡が残る。P8からは51が出土した。内外面とも黒漆が施される。高台は削り出しと見られる。またこの漆器椀埋納遺構から北東へ約2.4mの地点のP11にも漆器椀が埋納されていた。

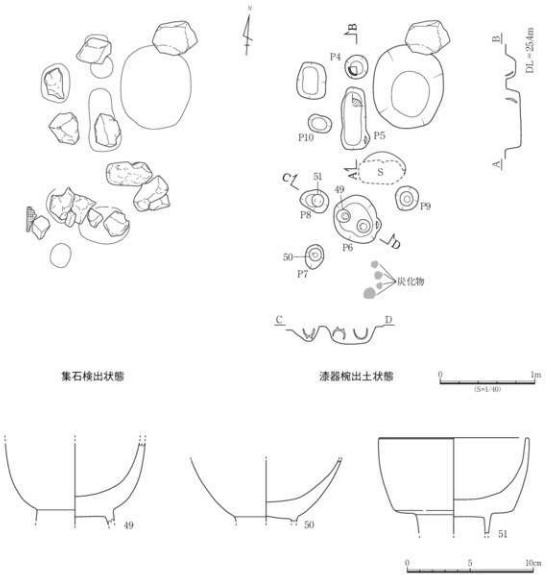


図3－16 主屋漆器椀埋納遺構遺構図・出土遺物

⑦下層のタタキ面

TR3・10及び座敷部中央付近で、床面下0.10～0.15mで下層のタタキ面を検出した。

座敷部のタタキの下層はチャート・砂岩・石灰岩等の拳大の礫を含む。この層の下から更にタタキを検出した。厚さは、床面のタタキが2～5cm、下層から検出されたタタキが1～2cmである。下層のタタキ面には礎石抜取穴あるいは柱穴は存在しない。下層のタタキ面が一定の広がりを持つ平坦面であること、焼土が検出されたこと等から、当初一定期間「生活面」として利用されたと想定していた。しかしその後の調査で、これら2面のタタキが床面地業の工程の一部であることが明らかになった。このタタキ面は居室部には存在せず、座敷部全域のみで確認されたことから、座敷部と居室部は異なる地業であることを示す。居室部では、礫をほとんど含まない橙色土あるいは黄褐色土の上にタタキ面が形成されていた。現状では居室部は座敷部より床面が一段(4～5cm程度)高く、発掘調査の結果から異なる時期に造成されたと考えられる。

⑧鍛冶関連遺構

居室部南西、礎石の下から鍛冶関連と見られる遺構を検出した。面的に調査可能であった地点では2時期の遺構の切合いが認められた。埋土内には焼土・炭化物・鉄滓が含まれ、棒状の鉄製品も出土した。主屋の前身建物に伴う遺構と考えられる。P51の壁面全周には炉壁が形成される。平面形は円形状を呈し、長軸0.50m、短軸0.48m、深さは0.19mを測る。赤変部は隅丸方形状で検出された。埋土から52の扁平な鉄製品が出土した。P52は周囲が被熱赤変していたが、P51のような炉壁は形成されておらず、様相が異なる。平面形は円形状を呈し、直径0.44m、深さ0.14mを測る。また、この約2.3m東部にはP14及びP17があり、同様に鍛冶関連遺構と考えられる。P14は平面円形状を呈し、直径0.3mを測る。被熱を受けた痕跡は見られないが、埋土中から鉄製品が出土した。53～56は中空の棒状鉄製品である。直径約5㎜の棒状で、先端が鉤状に湾曲する。

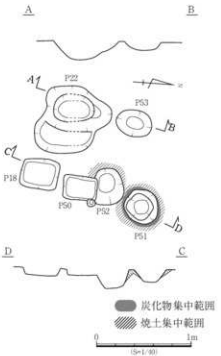


図3－17 主屋鍛冶関連遺構図

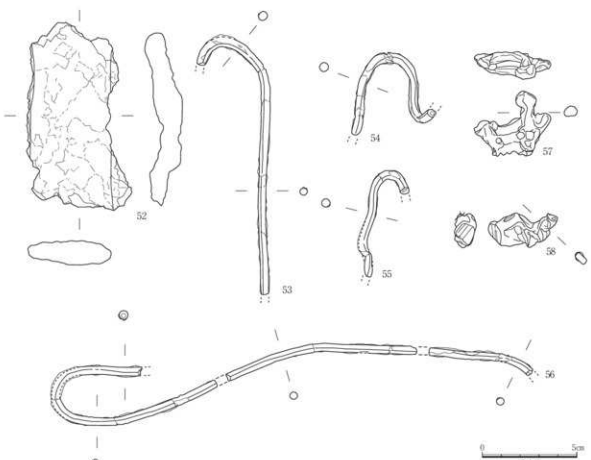


図3－18 主屋鍛冶関連遺構出土遺物

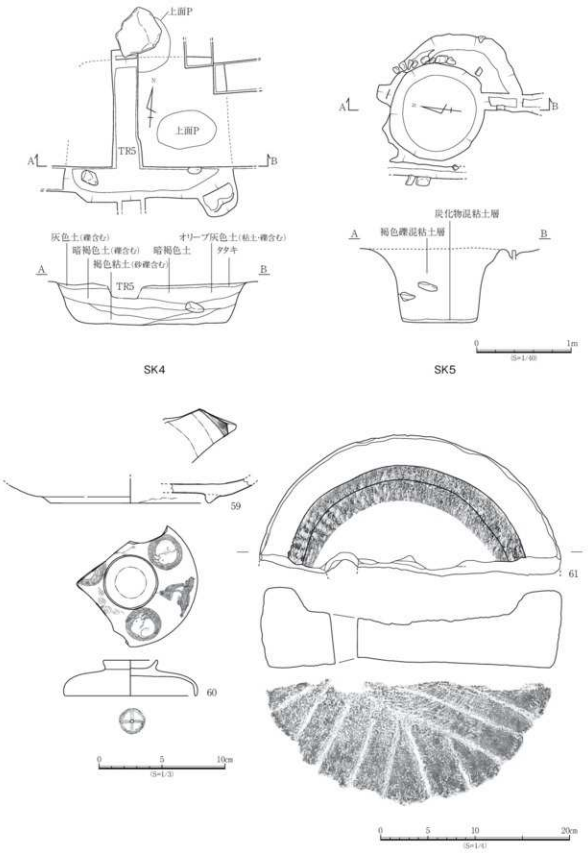


図3－19 主屋SK4・5遺構図・出土遺物・P30出土遺物

⑨その他の遺構

その他の遺構として、SK4・5を抽出する。SK4は土間北部の床下に形成された平面形が隅丸方形の土坑である。南西隅に小規模な張り出し部を持つ。長径1.80m、短径1.50m、深さ0.48mを測る。絵図では「エン」の下に相当する。出土遺物は59の肥前産磁器、くらわんか手の皿である。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、見込み及び高台畳付に砂粒が付着する。SK5は次の間で検出され、平面形円形状を呈する。壁面と床面はハンダ状に塗り固められており、何らかの液体を貯留する施設であると見られる。直径2.0m、深さ0.8mを測り、その規模から居室部に先行して構築されたと考えられる。埋土からは60の肥前産望料碗の蓋が出土した。その他に、土間で検出したP30からは61の砂岩製石臼が出土した。

⑩廃棄土坑

居室部北東角に南北に伸びる溝状の廃棄土坑で、SK16と付した。幕末から近現代に使用されていたと見られる。埋土中からは多くの陶磁器片やガラス片が出土し、その内特徴的なものを抽出し図示した。62～66は戦時中に使用された磁器である。62・63は口縁部及び笠部に緑色の2条の圏線が巡る所謂「国民食器」である。64～66は器面の一部に「統制番号」と呼ばれる産地の一文字及び生産者に付された番号が記される。「岐」は岐阜県、「瀬」は瀬戸を示す。67～72はガラス瓶である。67は日常生活瓶と見られ、鳥と「Egami」のエンボスが見られる。68・69・72は染料(白髪染め)瓶である。68・69は「るり羽」・「定量」及び容量を示すラインのエンボスが見られる。68はコルク製機械栓と見られ、69はスクリュー栓である。70は薬品瓶である。底部に4重の同心円状のエンボスが見られる。71は目薬瓶で、「SANTENDO」のエンボスが見られる。72は「みや古染」のエンボスがあり、胴部は円筒型でスクリュー栓である。71・72については包含層出土資料であるが、同じガラス瓶として合わせてここで図示する。その他、写真図版のみで報告するものについては、観察表に法量・特徴等を記載した。

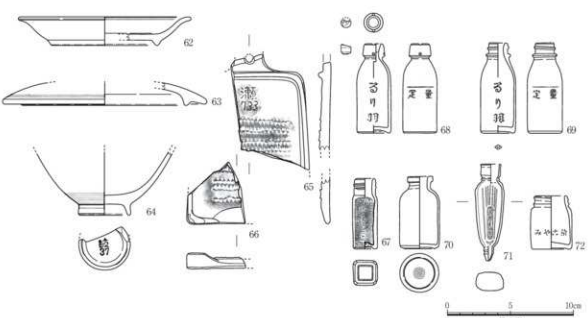
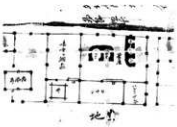


図3－20 主屋廃棄土坑出土遺物

2. 釜屋

(1)調査の概要

釜屋では1～4次にわたって調査を行った。各次調査ごとの概要及び成果を以下にまとめる。事前に行われた保存修理事業における調査では、釜屋から文政8年(1825)創建、天保10年(1839)増改築を示す墨書が確認された。その後明治から昭和にかけて増改築が行われ、現在の姿になった。カマ・クドのあった東側釜屋部分を「釜場」、天保年間に増築した西側部分を「味噌納家」と表記する。なお、安岡家には、「広助さんが本家から養子に来たとき、たった三反の田んぼと釜屋を持ってきた」という伝承がある。広助が養子に来た文化3年(1806)には釜屋が存在していたとされているが、その釜屋は文政8年(1825)創建、天保10年(1839)増改築のものとは異なると想定される。



資料3－2 釜屋周辺絵図

試掘トレンチの位置は調査計画に即して設定した。トレンチの規模は幅0.5mを基本とし、状況に応じて拡幅・拡張を行った。下層確認トレンチを3カ所、礎石確認トレンチを4カ所設定し、崩落部分を取り除くための調査と併せた調査面積は29㎡である。手掘りにより掘削を行い、礎石及び遺構の有無・位置及び堆積状況を確認した。調査に際しては、建物の主軸方向を踏襲した任意の4mグリッドを設定し、測量を行った。また、礎石については、記録を採った上で原位置から動かさず調査を完了した。

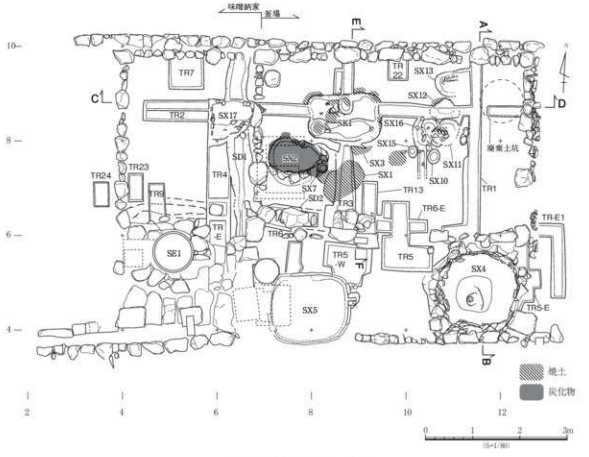


図3－21 釜屋遺構平面図

①1次調査

先述の絵図に記載されている釜屋北東部の礎石及びカマとクドの位置や規模を確認することを目的とした調査である。釜屋の一部は昭和49年(1974)頃崩落し、失われていた。保存修理事業では、現存しない釜屋の復原が計画されており、調査成果はその際の参考資料となる。調査では、一部が崩落し埋没していた礎石列を確認し、崩落前の建物床面を検出した後、TR1～3の設定を行った。カマとクドの位置を確認し、造成土堆積状況を記録した。創建当時と増改築時で地盤面に相違があるかどうかの確認を行うことも調査目的の一つである。また、床下に残っている石列や溝などの分布、絵図以前の焼土集中遺構の存在など、釜屋の来歴に関する情報を収集した。

②2次調査

釜屋南部のコンクリート構造物や床面モルタルの撤去に伴い、工事で影響を受ける部分及び新たに調査可能となった地点にトレンチを設定し、遺構の平面的な広がりの確認を行った。1次調査で検出した遺構以外に、下層から新たな遺構を検出した。コンクリート製カマドの撤去が完了していない状態であったため、最終的な調査は次年度以降に持ち越すこととなった。

③3次調査

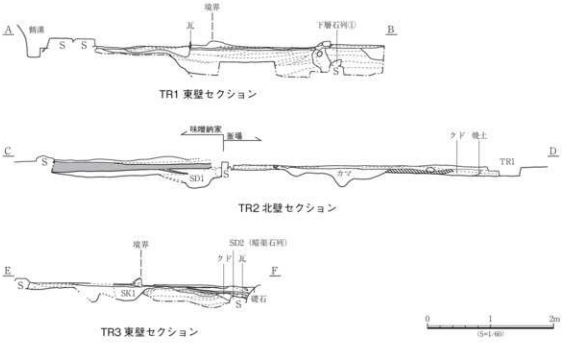
コンクリート製カマド撤去後に行った遺構の性格・形状等の把握を意図した調査である。工事によって破壊される範囲で、カマとクドを中心に確認を行った。

④4次調査

カマ復原工事中に遺物が出土したとの連絡を受け、確認調査を実施した。

(2) 調査成果

調査成果について詳細を掲載する。1～4次の調査で確認した遺構を遺構配置図に示す。検出した遺構についてはそれぞれ通し番号を付し、主なものについて抽出し出土遺物と併せて図示する。各トレンチの基本層序は以下の通りである。



TR1 東壁セクション

TR2 北壁セクション

TR3 東壁セクション

図3－22 釜屋トレンチセクション図

①カマ遺構

SK1 は釜場の中央部やや北西寄りで検出された。底面や北側に接する床面直下の遺構検出面などから、被熱により赤変した焼土が検出された。長径 1.56m 、短径 1.12m 、深さはピット状最深部で床面より 0.14m 、テラス部で検出面より 0.15 ～ 0.17m の平面隅丸長方形状の土坑である。埋土中から細長く板状の鉄製品 82 が出土した。

また、遺構南側の地点に焼土を含む遺構（SX1 ～ 3）が分布していた。いずれも SK1 に先行する焼土遺構であり、特に SX2 は現存する釜屋に先行する前身建物に伴うと考えられる焼成遺構と判断された。SX2 は長径 1.23m 、短径 0.80m 、深さ 0.26m を測る楕円形の土坑である。検出面では炭化物の広がりを確認した。周囲に礫と瓦を配して構築され、遺構内には焼土と炭化物が互層となっていた。図示した瓦 83･84 は、構築する際に使用されたものと考えられる。

②クド遺構

絵図とほぼ同じ地点で焼土を伴う SX11 ・ 12 ・ 13 を検出した。焼土検出部分は内壁と考えられる。SX11 は長径 1.17m 、短径 0.86m（推定）、深さ 0.26m を測る平面楕円形状の遺構である。SX12 は長径 1.09m 以上、短径 0.82m 以上、深さ 0.28m を測る平面楕円形状の遺構である。黄褐色粘土層（地山粘土）の上に暗褐色の礫混じり粘土を敷いて焚口部の床面を形成していた。被熱が明瞭な奥壁に対して、焚口部床面には被熱による赤変や硬化は認められず、部分的に焼土の残存が確認されるのみであった。橙色土・赤褐色土など焼成を示す土を手がかりに遺構を復原したが、遺構形状は明確ではない。

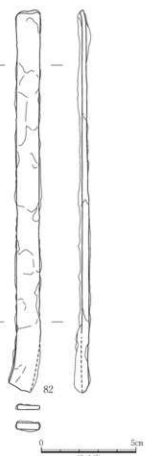


図3－23 釜屋SK1遺構図・出土遺物

SX13は長径1.47m以上、短径0.97m、深さ0.16mを測る平面楕円形状の遺構である。黄褐色粘土層（地山粘土）を掘り込んで構築されていた。焚口底面の高さは３基ともほぼ同じであり、床面からの深さは0.1m、平面的な遺構規模は内壁最大径0.36～0.42m、外壁南北方向1.8m前後と推定される。また、これらの遺構以前に機能したと考えられる焼成遺構も下層から確認された。下層からは、被熱が認められない拳大の礫が出土した。クドの床面形成前の造成礫と見られ、この礫の上部では小礫混じりの暗褐色粘土によってクドの床面が構築されていた。

クド構築時に使われた暗褐色粘土中からは瓦・陶磁器類などの遺物が出土した。これらの遺物から判断されるクドの構築時期は江戸時代後期（幕末に近い時期、19世紀前半）以降である。85はSX10から出土した煉瓦である。全長21.6cm、全幅10.8cm、全厚5.3cmで、大正14年（1925）に定められた統一規格とは異なる。SX11からは86～88が出土した。86は青磁碗で、口縁部の小片である。87は土師質土器サナで、推定直径は10cm程度と見られる。88は磁器蓋で内面及び外面笠端部は施釉、外面笠部から天井部は露胎する。胎土はやや陶質である。SX16から89の陶器甕が出土した。また、SX11及び後述するSX2からは90が出土した。内外面とも褐色の釉が施され、肩部に多重の凹線が巡る。89・90は同一個体と見ら

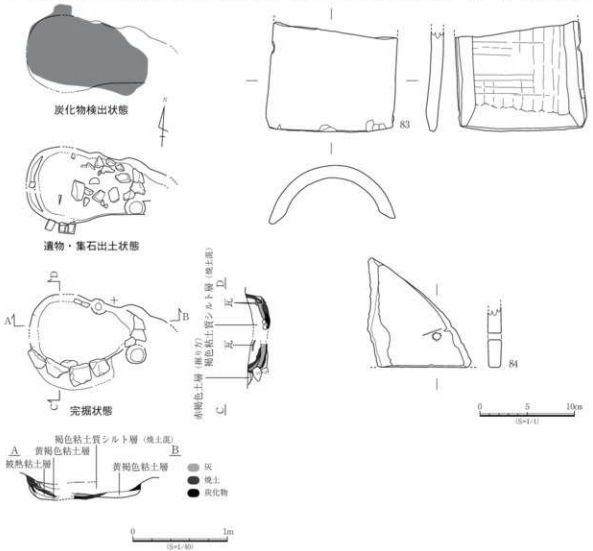


図３－24 釜屋SX2遺構図・出土遺物

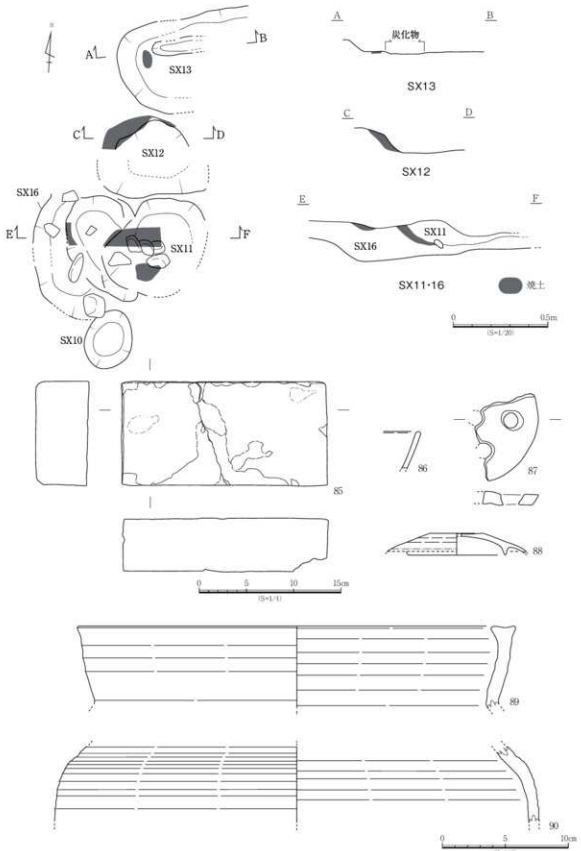


図3－25 釜屋SX10～13・16遺構図・出土遺物

れるが、SX2の奥壁から出土したものと接合したため、個別に掲載する。

③その他の遺構

遺構形成時期を特定することはできないが、釜屋の礎石を据える前、文政８年(1825)に形成されていた遺構として、SD2・SX17・SX4が挙げられる。釜屋建設の時期と同じ年に造られた可能性も残る。SD2が形成され、釜屋創建期にはSD2が暗渠となり、その後礎石を設置、釜屋が建ち使用される。西側に井戸(SE1)、後述する南北溝(SD1)が形成され、最終的には味噌納家が増築されたと考えられる。ここでは構築された時期が古いものから順に掲載する。

ⅰ）SD2

SD2は釜屋の建物南部礎石列の内側(北)で確認された東西方向に延びる溝状遺構である。上面は平面30～70㎝大の礫で蓋をされ、暗渠となっている。幅0.35～0.40m、石列上面からの深さ約0.40mで、検出した延長距離は3.6ｍである。西に向かって傾斜し、建物外部に延びる。石列の下部には現在も空隙が残る。

ⅱ）SX17

SX17は長径1.04m以上、短径1.00m、深さは0.23mを測る平面不整楕円形状の土坑である。埋土は青みを帯びた灰色粘土で、チャートを中心とした角礫が遺構の周囲に配されている。埋土中からは

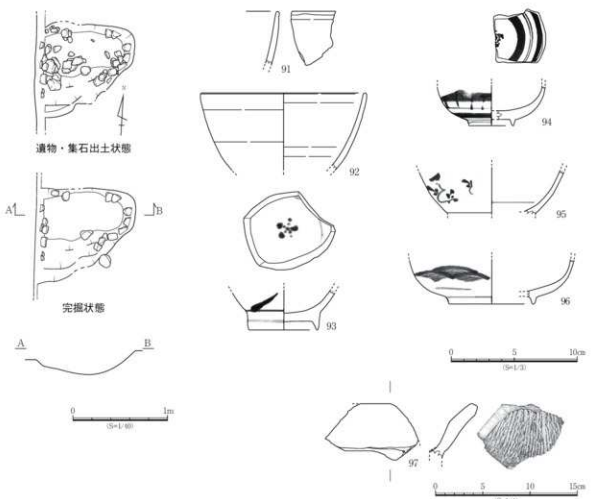


図3－26 釜屋SX17遺構図・出土遺物

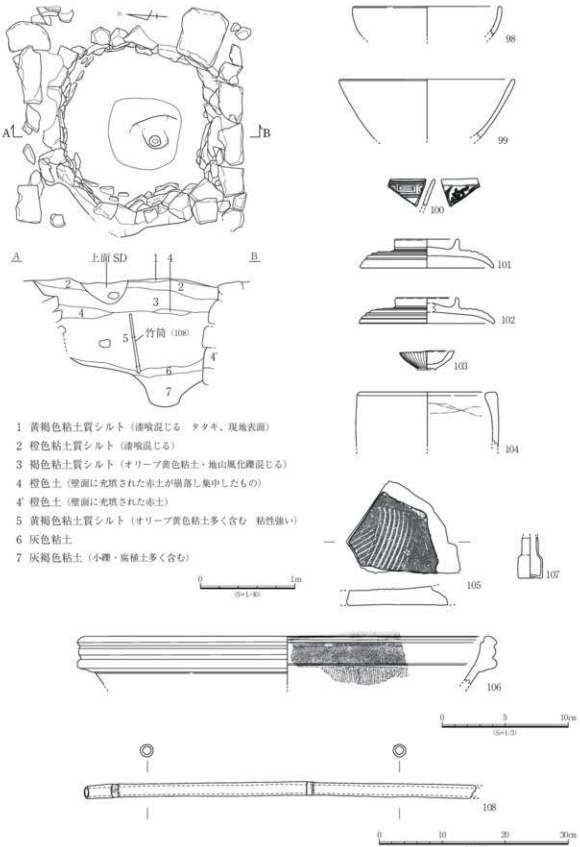


図3－27 釜屋SX4遺構図・出土遺物

陶磁器が出土した。91・92は陶器碗である。91の内外面には灰釉が施される。92は尾戸焼の丸型碗で、内外面に灰釉が施される。93は瀬戸産の陶胎染付碗で、広東型である。見込み圏線、中央にコンニャク印判による五弁花文が施される。97は丸瓦で、凹面に布目圧痕が残る。

ⅲ）SX4

SX4は、絵図で「ハシリ下シヅ」と記された釜屋南東隅に位置する。平面形は円形に状を呈し、直径2.09m、深さ1.36m、周囲は3段以上の石組みと赤土で固められている。検出時には中央付近に直径9cmの床面に達する空洞が確認された。周辺は地下水位が高く、調査時にも常時石組みの2段目まで湛水した状態であった。位置・遺構形状から、取水・排水施設を備えた水溜施設「シズ」と見られる。井戸の廃絶儀礼では、中央に息抜き穴として筒状のものを挿し、埋立てることが現在でも行われており、この「シズ」についても同様の儀礼が行われたものと考えられる。埋土中からは陶磁器や瓦等が出土した。98・99は陶器碗である。98は内外面に灰色の釉がかかる。99は尾戸焼の碗で、内外面に灰釉がかかる。100は磁器碗で、内面口縁部に雷文帯、外面に唐草と草と見られる文様が描かれる。101・102は陶器蓋で、2点とも内外面に鉄釉が施され、外面天井部から笠部にかけて多重の凹線が巡る。103は肥前産の磁器紅皿で、型押し成形による菊花型である。104は陶器火入れで、外面体部から内面口縁部まで施釉され、内面は露胎する。白化粧土の上に白濁した釉である。105・106は炻器擂鉢である。105は内面底部に8条1単位の摺目が残る。106は明石・堺系で、内面口縁部に1条、外面口縁部に2条の凹線が巡る。摺目は9条1単位である。107は小型のガラス瓶で、薬品瓶と見られる。108は遺構中央に差し込まれていた竹筒で、上部は節近くで切断され僅かに破砕されているが、下部は鋸状の工具で斜めに断ち切られる。節から派生した小枝は切り落とされ、切断面は丁寧に整えられる。

ⅳ）SX5

SX5は長径1.77m、短径1.52m、深さ1.09mを測る平面楕円形状を呈する土坑である。壁面及び床面はハンダで構

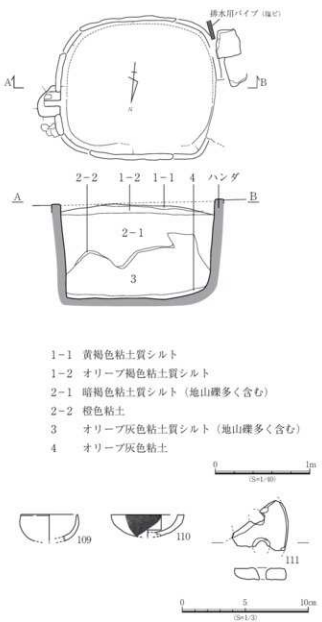


図3－28 釜屋SX5遺構図・出土遺物

築されており、水溜施設としての機能を持つことからSX4と同様に「シズ」であると考えられる。調査時は内部に崩落土が堆積し埋没した状態となっていたが、SX4のような廃絶儀礼は行われておらず、経年により埋没したものと思われる。SX4が廃絶した後に構築され、使用された「シズ」であると考えられる。埋土からは陶磁器類が出土した。109は磁器小杯である。110は肥前産の磁器紅皿で、型押し成形により外面に蛸唐草文が陽刻される。111は土師質土器サナで、厚さは1.0cm、残存部に3カ所の穿孔が見られる。

ⅴ）SE1

SE1は上部をコンクリート製として、現在でも使用される井戸である。コンクリート下部の掘り方は、拳大からやや大きめの礫で埋められ、その上を緑灰色の砂質土で覆い周囲を土手状の堤で取り囲む形に整えている。この層は北側に続く生活面の上層にも堆積している。また、井戸の上層には釜場と並行する南北方向の溝(SD1)が造られている。

ⅵ）SD1

SD1は味噌納屋と釜場の境界西部に南北に延びる溝で、幅0.37～1.01m、深さ0.27m前後を測る。先述のSE1に伴う遺構である。北側に向かって傾斜し、井戸周辺からの排水溝としての役割があったと考えられる。

埋土中からは比較的多くの遺物が出土し、その内27点を図示した。112～114は陶器皿である。112は内外面とも灰釉が施される。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、周縁に白濁したアルミナ砂が塗布される。113は内外面とも灰釉が施され、外面底部は露胎する。断面逆台形状の削り出し高台で、見込み残存部の2カ所に目痕が残る。目痕には炭化物が付着する。114は内外面に灰釉が施され、口縁部内外面は釉剥ぎである。115～118は陶器碗である。115は口縁部小片の内外面に鉄釉が施される。116は瀬戸産胎白手の碗で、内面口縁部に薄い発色の呉須で圏線が巡る。外面に花文と鉄釉による文字が描かれる。貫入が入る。117は断面逆台形状の低い高台を有し、腰部で屈曲する。内面に草と見られる文様が描かれ、胎土及び釉調は黄味を帯びた灰色を呈す。118は内外面に灰釉が施され、腰部は丸味を帯びて湾曲する。119は陶胎染付碗である。外面に鉄釉と呉須による宝文、内面口縁部と見込みに圏線が巡る。

120～122は磁器皿である。120は白磁皿の口縁部小片で、染付は見られない。蓋の可能性も考えられる。121は内面に草が描かれ、内面残存部に1カ所の目痕が残る。122は内面に山が描かれ、内面残存部に1カ所の目痕が残る。123・124は磁器碗である。123は肥前産の広東型碗である。外面に柳文、外面下位及び高台に複数の圏線が巡る。内面口縁部に2条の圏線、見込み圏線内に波濤文と見られる文様が見られる。124は小型の碗で、内外面とも施釉され、口縁部内面は釉を剥ぎ取る。外面腰部及び高台に2条の圏線が巡る。125は磁器蓋で、外面天井部に輪状の摘みが付く。鮮やかな発色の呉須で周縁に雲等の文様が描かれる。126～128は磁器猪口である。何れも肥前系で、内面口縁部に四方襷文が巡る。129・130は陶器鍋で、129は内外面とも灰釉が施され、輪状の把手の一部が残存する。130は内外面とも鉄釉が施される。131は陶器甕で外面に鉄釉が施され、内面は露胎する。胴部中位で上方に屈曲する。132は陶器涼炉である。口縁上面のみ緑色の釉が施され、他は露胎する。残存部内面の1カ所に断面台形状の突起が付く。外側の胴部は欠損する。煎茶が嗜まれていたことを示す資料である。133は陶器瓶である。外面灰白色の釉を施し、内面は露胎する。134～136は炻器擂鉢である。135は備前焼と思われる。137は三巴文の軒丸瓦で、凹面にコビキB痕(小口面に並行する直線状の痕跡)と布目圧痕が残る。138は丸瓦で、凹面に布目圧痕が残る。

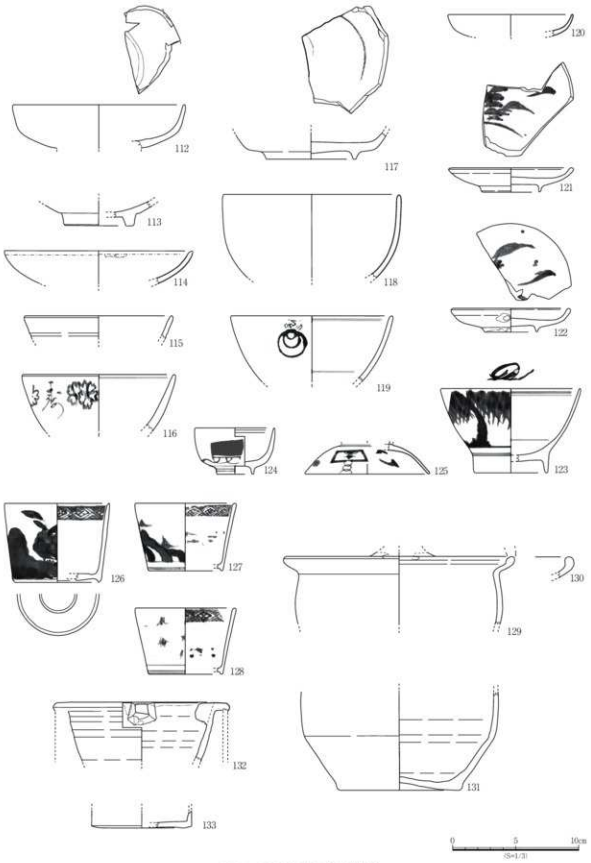


図3－29 釜屋SD1出土遺物1

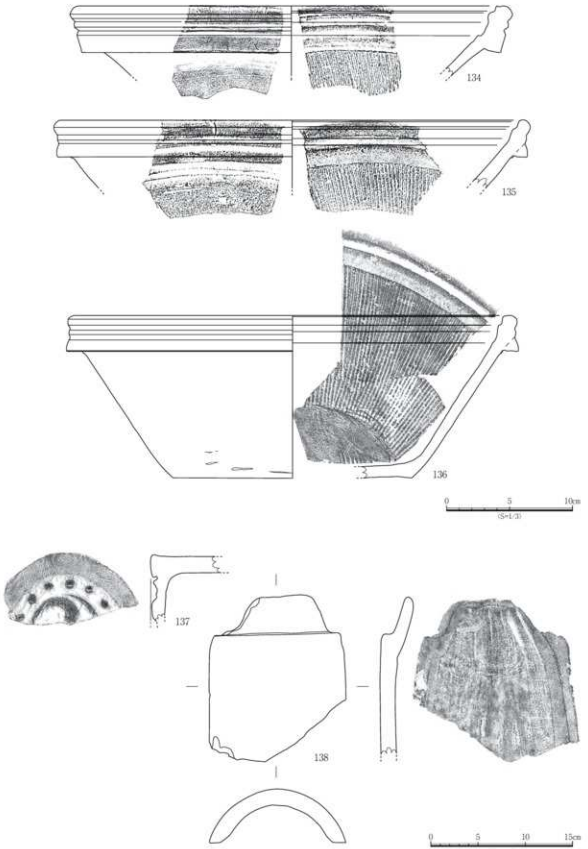


図3－30 釜屋SD1出土遺物2

④崩落土より出土した遺物

先述の通り釜屋は、昭和49年(1974)に一部が崩落し、調査前には礎石が埋没している状態であった。釜屋の床面検出を行うにあたって、崩落土の掘削を行った際に出土した遺物について報告する。崩落土より出土した瓦の枚数は平瓦の大きさに換算して約185枚分である。特徴的なものについては遺物として取り上げ、図化を行い、刻印を有するものについては全て図示した。

139は軒丸瓦である。左巻三巴文で、巴尾は短い。凹面にコビキB痕が残る。凸面筒部はヘラ状工具による縦方向のナデ調整が施され、玉縁部側に直径8mmの穿孔がみられる。

140～151は軒平瓦である。140・141の中心飾りは三巴文である。141の右脇区には□内に「ヤマウ」の刻印が見られる。142はの中心飾りは蔦文、143～146は雄蕊状文である。147・148・151は三巴文の両脇に雄蕊状文を配する。150・151は中心部が欠損し、両脇の唐草文のみ残存する。143・144・146の右脇区には「山勘」の刻印が見られる。

152～154は丸瓦である。152の凹面にはコビキB痕と布目圧痕が残る。側部には漆喰が付着する。153の凹面にもコビキB痕と布目圧痕が残る。側部には鉄分が付着する。154の凹面にもコビキB痕と布目圧痕が残る。凸面筒部の玉縁側に「山勘」の刻印が見られる。

155～158は平瓦である。155・156の尻小口には、焼成後の切り込みが残る。現場での加工が行われ

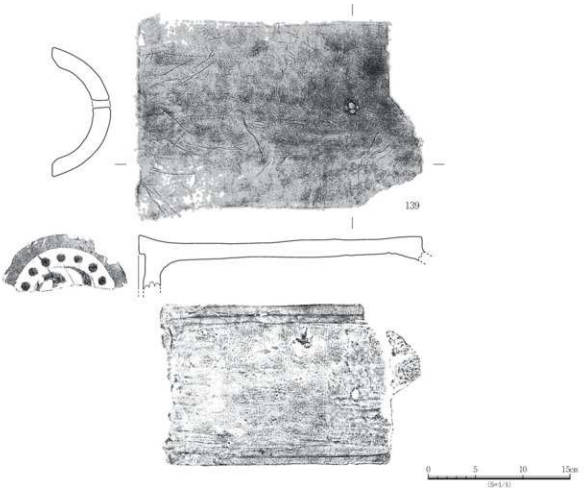


図3－31 釜屋崩落土出土遺物1

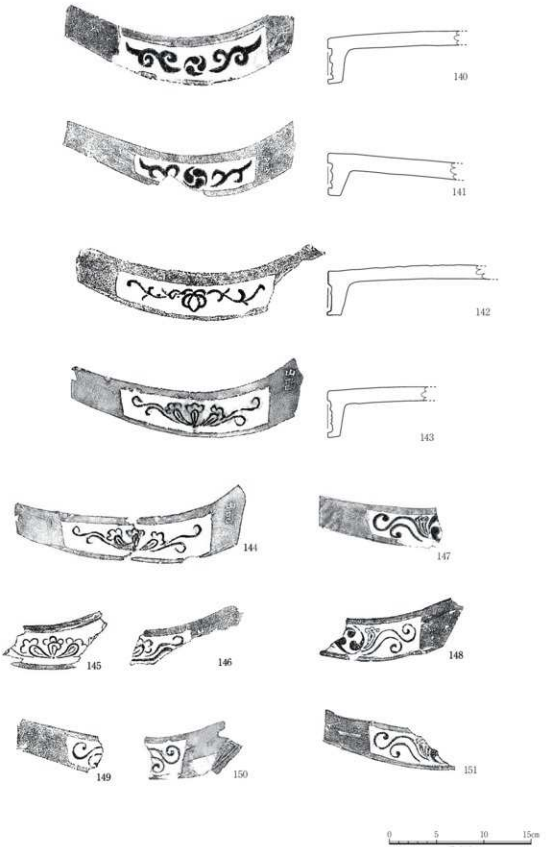


図3－32 釜屋崩落土出土遺物2

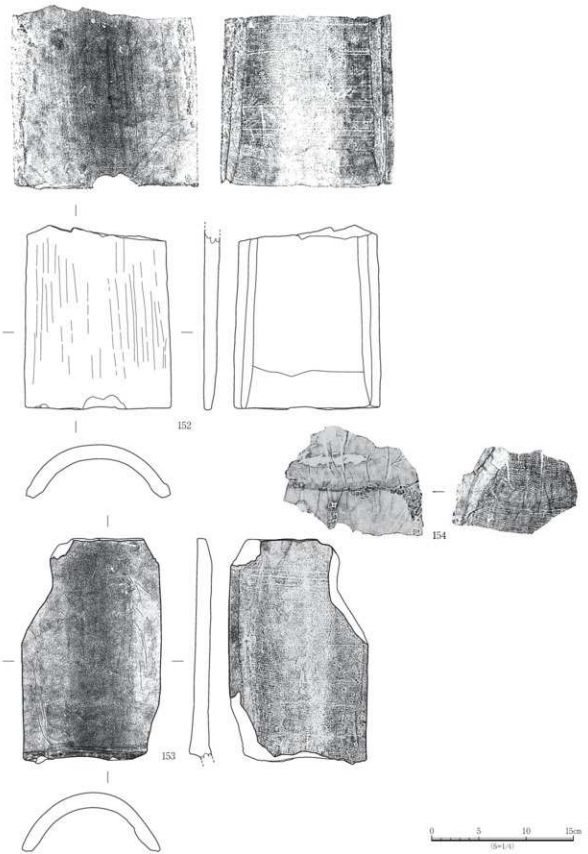


図3－33 釜屋崩落土出土遺物3

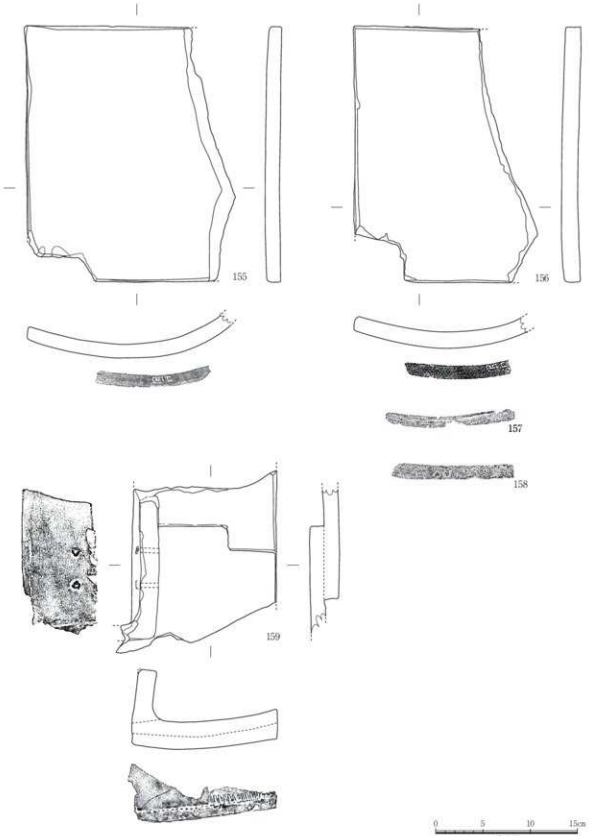


図3－34 釜屋崩落土出土遺物4

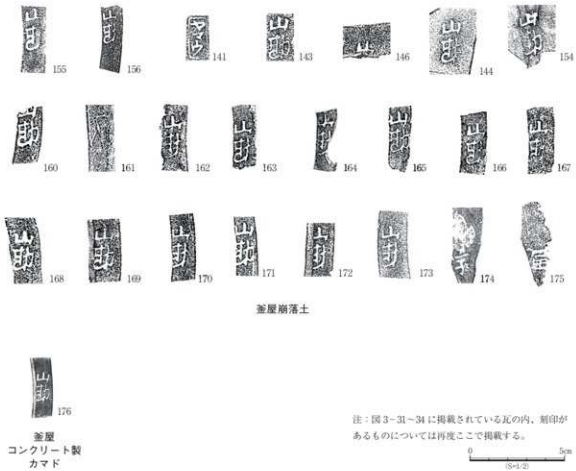


図3－35 釜屋崩落土出土遺物5

たものと見られる。小口面には「山勘」の刻印を有する。157・158の小口面には成型時の粘土切り離しの際のものと見られる緩い円弧状を呈する平行な線状の痕跡が残る。

159は2点の平瓦が接着される。下部の瓦は側部が屈曲し面を成す。袖部の2カ所に直径5㎜の穿孔が見られる。水切用に用いられた土居葺斗瓦又は足駄瓦の可能性が考えられる。

刻印が見られる瓦は崩落土出土のもので23点確認できた。その内19点が「山勘」に限定され、残りは「ヤマウ」が1点、「又」状の線刻が1点、「□富」と見られるものが1点、「□王子」と見られるものが1点である。ここでは、近年まで使用されていたコンクリート製カマドに使用されていた176の刻印も合わせて図示する。176には「山勘」の刻印が施される。釜屋に葺かれていた瓦を転用したものと考えられる。

また、崩落土以外に、現況床面の表採・現代の廃棄土坑から出土した遺物は177～182である。特徴的なものについて図示した。

177は磁器碗で、釜屋東部の現代の廃棄土坑から出土した。外面に草花、高台内には「MARUNAGA CHINA」の文字がプリントされる。178は陶器捏鉢で、北部の表採資料である。内外面に鉄釉が施される。内面下位に重ね焼きの痕跡が残る。近世後期から近代にかけての遺物である。179は南西部から表採された陶器鉢で、口縁部は外方に拡張する。外面口縁部から内面にかけて施釉、外面は露胎する。180～182は煉瓦である。いずれも約1/2が欠損するが、小口の幅及び厚さは大正14年(1925)に定められた統一規格とは異なる。

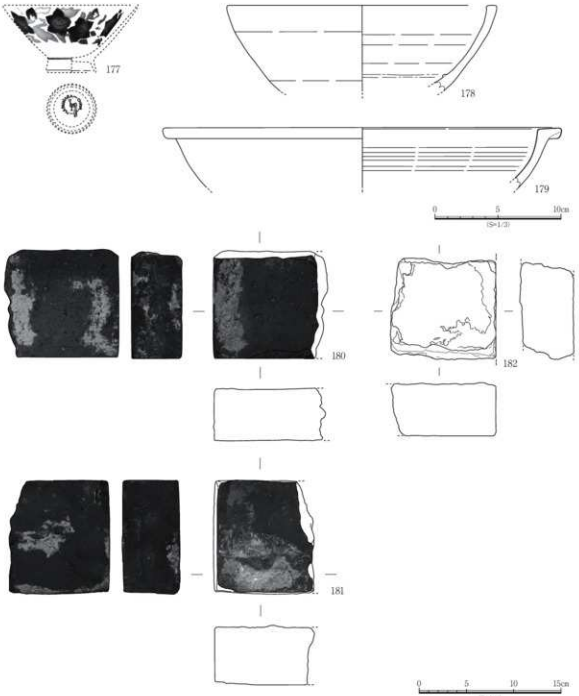


図3－36 廃棄土坑出土遺物

⑤包含層出土遺物

各トレンチの包含層から出土した遺物のうち、特徴的なものを図示した。183～188は陶器碗である。183は京都・信楽系の小型碗で、外面に鉄釉で文様が描かれる。184は内外面とも灰釉が施され、外面に鉄釉で文様が描かれる。185は外面は白化粧土を施し、鉄釉と緑釉の掛け分けによる文様を施す。内面は露胎する。186は外面に薄緑色の釉で草葉文を施文する。187は内外面とも施釉され、外面底部は露胎する。高台の断面形は逆台形状で、尾戸焼に類似する。188は尾戸焼で、内外面に灰釉が

施され、見込みに目痕が残る。189は肥前系の陶器捏鉢である。内外面に褐色の釉が施され、口縁部は釉を剥ぎ取る。外面体部中位に白化粧土による２条の帯線が巡る。190は肥前産の陶器、刷毛目二彩手の鉢である。外面は白化粧土と鉄釉による文様、内面は白化粧土の刷毛塗りが施される。191・192は陶器甕である。191は内外面に鉄釉が施される。192は関西系で、内外面に鉄釉が施される。

193・194は肥前産の磁器皿である。194は外面に花唐草文、内面は山・樹木、見込み２重圏線内に文様が描かれる。195は肥前系の磁器碗で、外面に山水文が描かれる。196は肥前産の小型碗で、外面上

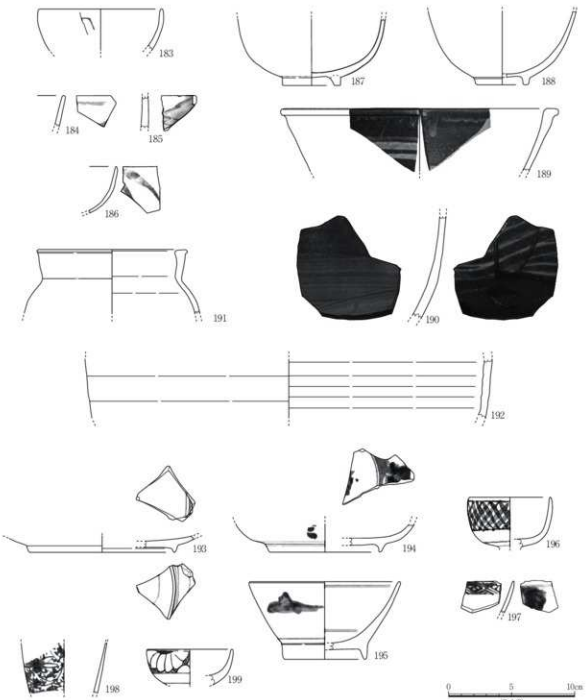


図３－37 釜屋包含層出土遺物１

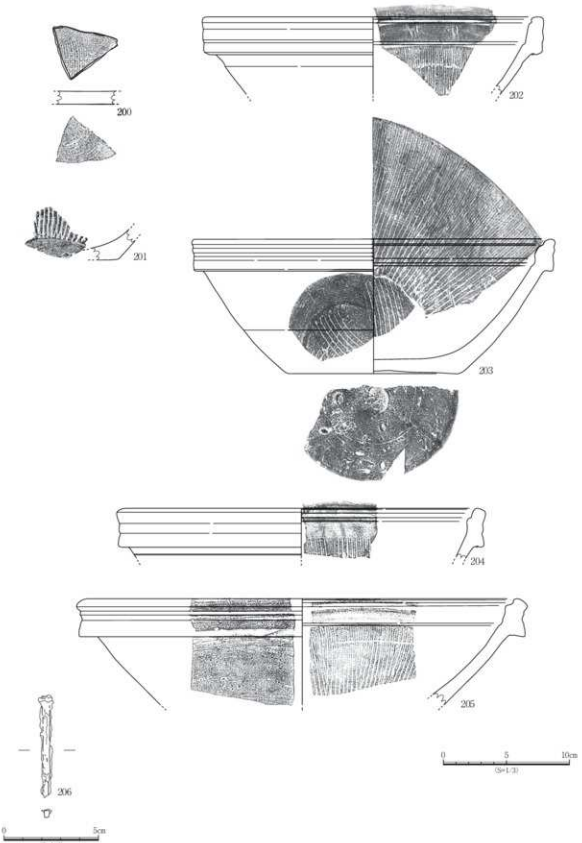


図3－38 釜屋包含層出土遺物2

下圏線間に斜格子文、下位に2条の圏線が巡る。197も磁器碗で、内面口縁部に四方襷文、外面に樹木と見られる文様が描かれる。198は肥前系の磁器猪口で、外面に花唐草文が描かれる。199は磁器仏飯器で、外面上下圏線間に菊花、間に細かい斜格子文が描かれる。

200～205は炻器擂鉢である。200・202・203は明石・堺系で、204・205は備前焼である。206は鉄製の角釘で、頭部は約6㎜四方の方形である。

3. 米蔵

(1) 調査の概要

事前に行われた解体調査では、明和8年(1771)建築当初の墨書が柱頂部から発見され、その後移築された際に西側3mの範囲を拡張し、増築が行われたことが判明した。北部の礎石は水路側に落ち込み建物全体が傾斜しており、礎石位置を修正し補強する工事を行う方針となった。それに伴いトレンチ調査により造成状況の調査を行った。手掘りにより掘削を行い、礎石及び遺構の有無・位置及び堆積状況を確認した。

資料3－3 米蔵周辺絵図

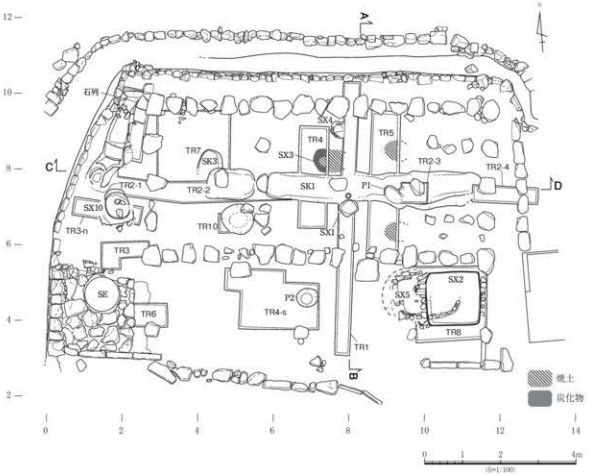


図3－39 米蔵遺構平面図

図3－40 米蔵トレンチセクション図

調査に際しては、建物の主軸方向を踏襲した任意の4mグリッドを設定し、測量を行った。また、礎石については、記録を採った上で原位置から動かさず調査を完了した。

(2) 調査成果

調査成果について詳細を掲載する。確認した遺構を遺構配置図に示す。検出した遺構についてはそれぞれ通し番号を付し、主なものについて抽出し出土遺物と併せて図示する。各トレンチの基本層序は上の通りである。現状のタタキ床面の下層に、3面以上の平坦面を確認した。これらの面には、礎石抜取穴など先行する建物の姿を示す遺構はなく、連続する地業の工程を示す一連のものだと捉えられる。また、建物の西南にある井戸は南西側のみを掘り込んで形成されており、現存する米蔵の敷地造成後に構築されたことが判明した。

①瓦埋納遺構

SX1は建物中央部の下層で検出した。長径0.46m、短径0.41m、深さ0.13mを測る隅丸長方形状の遺構である。埋土中に小口面を上面として36点の瓦が埋納されていた。いずれも完形ではなく、主は短辺で13cm前後、長辺で28cm前後、最小で10cm前後に分割された平瓦である。床面は僅かに凸を呈し、壁面の周縁に比較的法量の大きな瓦を貼り付け、後に内部に瓦を充填した痕跡が見られる。出土した瓦のうち、刻印が見られるものは207・212の2点で、「冨」の字が読み取れる。刻印が確認できないものについても、凹凸面とも丁寧なナデ調整が施される。208～211はSX1から出土した瓦の中

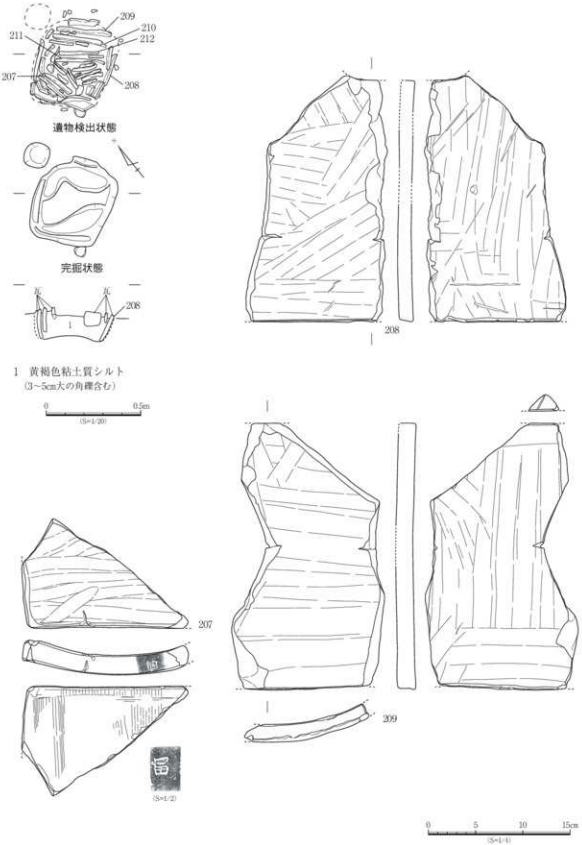


図3－41 米蔵SX1遺構図・出土遺物1

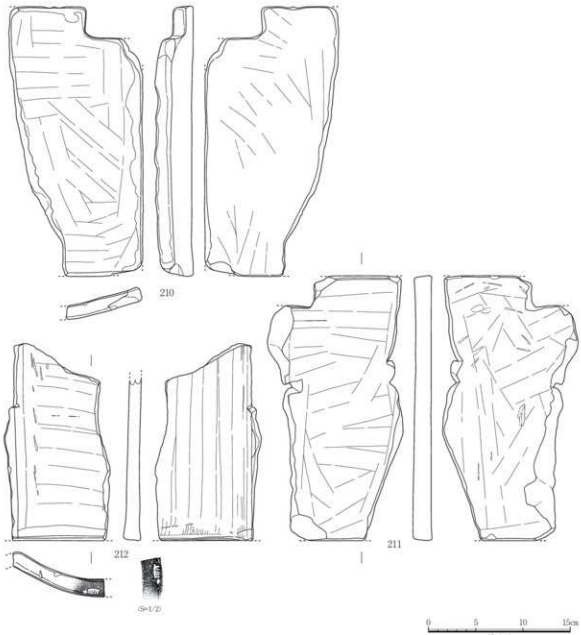


図3－42 米蔵SX1出土遺物2

で平均に近い法量のものである。210・211は摩耗が著しく調整は不明瞭であるが、その他は凹凸面共に丁寧なナデが施され、切り欠きは焼成前に成型されたものである。

②その他の遺構

ｉ）SX2・SX5

SX2は一辺が1.96m以上、深さ0.67mを測る方形状のハンダ土坑である。壁面は瓦片と橙色粘土を用いて積み上げ、内壁はハンダ又は漆喰で仕上げられる。仕上げは壁面中位以上で、中位以下及び床面には施されていない。SX5は長径1.81m、短径1.34m、深さ0.89mを測る平面は不整楕円形状の土坑である。壁面は瓦片と円礫を暗灰褐色粘土を用いて積み上げて構築され、瓦片の多くは長軸側が土坑内部に面していた。床面には暗灰褐色粘土は約5cmの厚さで充填される。いずれも現存礎石の際

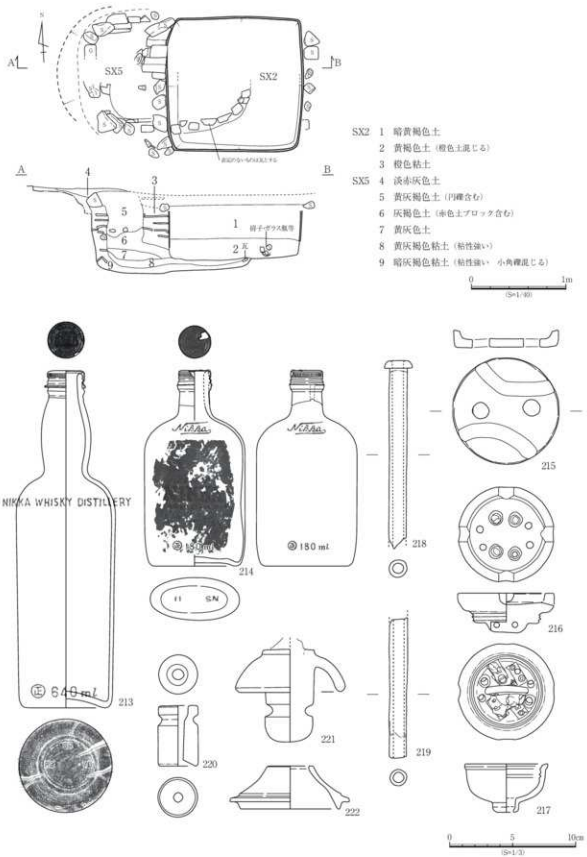


図3－43 米蔵SX2・5遺構図・SX2出土遺物1

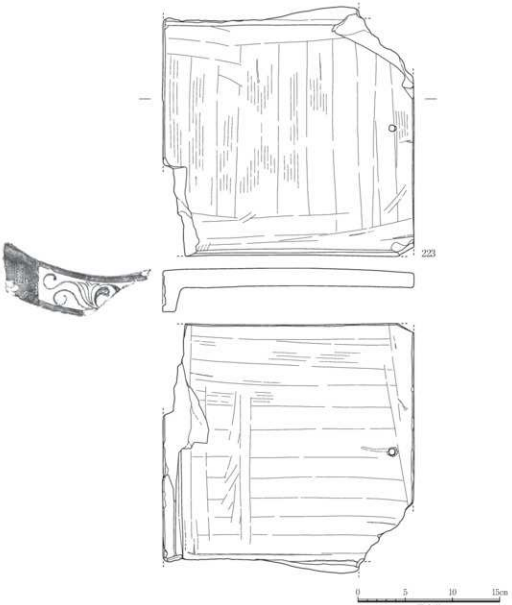


図3－44 米蔵SX2出土遺物2

に近接しており、建物と併存したとは考え難い。SX5が廃絶した後に近接した地点にSX2が構築されている。釜屋SX4と同様に「シズ」と見られる。出土遺物より昭和50年(1975)頃まで使用されていた痕跡が残るが、当初の「シズ」としてではなく廃棄土坑であったと見られ、近現代の陶磁器片やガラス瓶などが大量に出土した。SX5の床面では、SX2の床面付近を構築した瓦片が確認された。

SX2の埋土中からは213～224が出土した。213・214はガラス瓶である。いずれも洋酒瓶で、213は体部下位に「○(の中に)正640ml」、肩部に「NIKKA WHISKY DISTILLERY」、底面に「SN」「F3」「VO」のエンボスが見られる。金属製のスクリュー栓が残る。214の胴部断面は扁平な楕円形で、前面と背面に「○(の中に)正180ml」「Nikka」、底面に「11」「SN」のエンボスが見られる。金属製のスクリュー栓と「NIKKA WHISKY」のラベルが付着する。215～222は磁器製の碍子である。215～217は天井に照

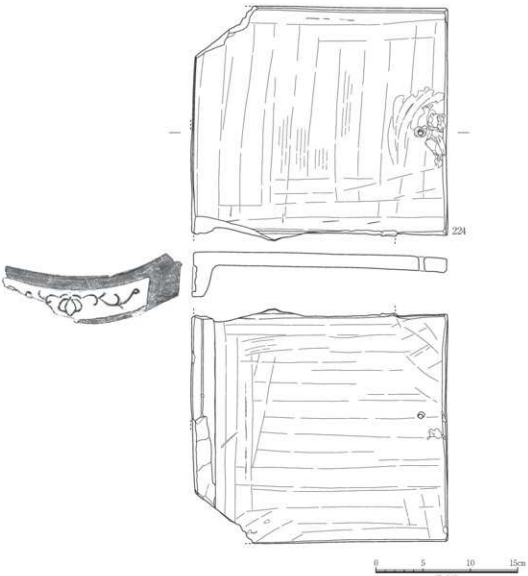


図3－45 米蔵SX2出土遺物3

明等を取り付ける際に使用する天井碍子と呼ばれる製品である。223・224は軒平瓦で、223は三巴文で、「山北□」の刻印を有する。224は蔦文である。いずれも尻小口側に径0.6cmの穿孔が見られる。

SX5の埋土中からは225～232が出土した。225～228は磁器碗である。225は美濃焼の子ども茶碗である。外面に女児と男児、小鳥とタンポポ、帯線の上絵付けが施される。高台内に赤褐色の染付による「岐267」の統制番号を有する。226も同じく美濃焼の子ども茶碗で、体部高台境界付近に圏線、朱色で猫とまりが2カ所ずつプリントされる。うち1カ所は磨滅のため痕跡が確認できるのみである。高台内に陽刻による「岐435」の統制番号を有する。戦時中に生産された所謂統制陶器である。227は肥前系の中型の広東型碗である。呉須は淡い発色で見込み圏線内に文様(岩と波または船か)が描かれる。228の口縁端部は褐色釉、それ以外は鮮やかな発色の呉須で絵付けされる。外面に5条の圏線と馬と雲、外底中央に「彌」の染付が施される。229は陶器の壺である。小型で内外面とも鉄釉を施釉、外面高台は露胎、口唇から内面頸部にかけては釉を削り取る。外底に「二〃．二〃」の墨書が残る。230

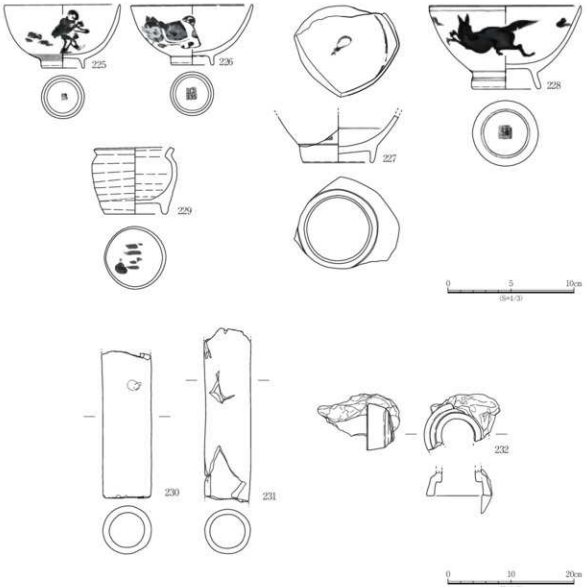


図3－46 米蔵SX5出土遺物

～232は土管である。「シズ」としての給排水の際に使用されたものと見られ、いずれも径7～8cm、厚さは1cm前後を測る円筒型で、232の端部は径10.3cmである。

ⅱ）SX4

北部中央に位置する埋土に焼土・炭化物を伴う遺構である。長径0.42m、短径0.33m、深さ0.12mを測り、西部が幅の狭い段状になる。埋土中央は炭化物が3～8cm堆積し、段状部の周縁に焼土、被熱の痕跡が見られた。埋土中から遺物は出土していない。また、SX4の南東部にかけて他に3カ所の焼土の広がりを確認した。いずれも浅い皿状の堆積で、米蔵建築以前の比較的短い期間に使用されたことが推定される。

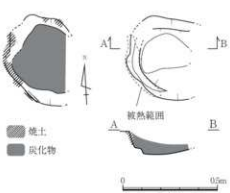


図3－47 米蔵SX4遺構図

ⅲ）北西部石垣

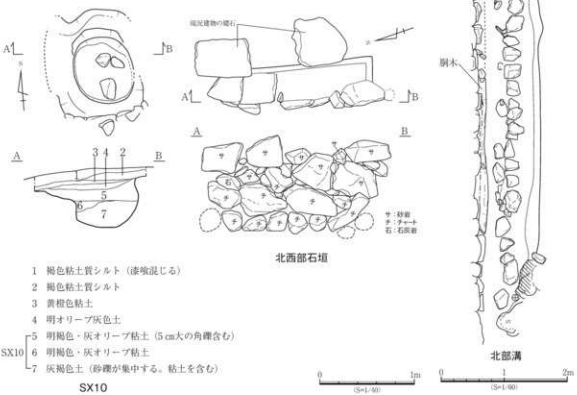
敷地北部から西部にかけて周縁に伸びる排水溝の北西部隅、建物側に位置し、幅1.00m、高さ0.96mを測る。最下段は20cm前後、他は20～60cmの砂岩・チャート・石灰岩で構成された溝に伴う石垣である。最上部の築石の上部に礎石が据えられているため、現況建物に先行すると考えられる。また、石垣の南部には径0.7m、深さ0.8mを測る円形の土坑SX10が確認されている。埋土中からは12～23cmの角礫が出土したが、年代等を特定出来る遺物は出土しなかった。年代・性格等の詳細は不明であるが、検出面が同一であることから、石垣と同時期の遺構であると見られる。

ⅳ）北部石垣の胴木

先述の溝を構成する北部、北側の石垣である。敷地北部の上段を支持する北側石垣の最下部で、径約12cm、長さ3.84mを測る胴木を確認した。胴木は図面等による記録を行った後に上面を覆う保存処理を講じた上で原位置で保存されている。

ⅳ）溝状土坑

SK1は建物中央部に東西に伸びる溝状を呈する土坑である。長径7.23m、短径0.70～0.93mを測る。調査前の段階で床面が皿状に凹み、埋土は表土と同様である。土坑が検出された現況床面ではタタキが確認されたが、土坑床面には存在しない。明確な使用目的があり構築されたものとは考え難く、性格等は不明である。



1　褐色粘土質シルト（漆喰混じる）
2　褐色粘土質シルト
3　黄橙色粘土
4　明オリーブ灰色土
SX10
5　明褐色・灰オリーブ粘土（5cm大の角礫含む）
6　明褐色・灰オリーブ粘土
7　灰褐色土（砂礫が集中する。粘土を含む）

SX10

図3－48 米蔵SX10・北西部石垣・北部溝遺構図

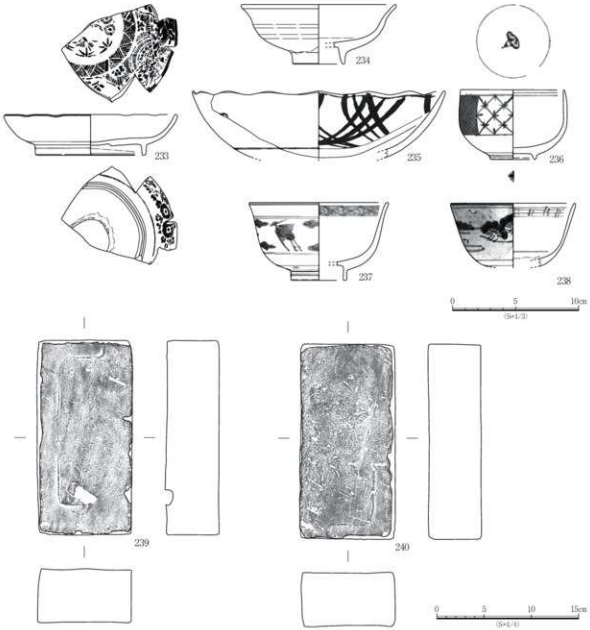


図3－49 米蔵包含層出土遺物

③包含層出土遺物

各トレンチの包含層から出土した遺物のうち、特徴的なものを図示した。233～235は磁器皿である。233の口縁部は輪花型を呈し、端部は呉須塗りされる。型紙刷りで内面に松竹梅円形文と桧垣文、外面は花唐草文と見られる文様が施される。見込み残存部の1カ所に目痕が残る。高台は蛇ノ目高台で砂粒が付着する。234は能茶山焼で、内外面とも鉄釉が2度掛けされ、外面高台は露胎する。見込みに蛇ノ目釉剥ぎの後、白化粧土を刷毛塗りする。235の口縁部は輪花型を呈し、内面口縁部に波状の圏線が巡る。内面に3本1単位の文様が見られる。236～238は磁器碗である。236は能茶山焼で、内面口縁部に2条の圏線、見込み圏線内に文様が描かれる。外面は格子文と四方襷文、高台外面に1条と2条の圏線が施される。高台内に「サ」の銘が見られる。237は肥前系で、内面口縁部に四方襷文、外面に鶴と雲、宝文と見られる文様が細線描きで施される。見込みは松竹梅円形文である。238も肥前

系で、内面口縁部に多重圏線と列点(あるいは格子目文)、見込みに圏線が巡り、外面に山水文が描かれる。見込み蛇ノ目釉ハギの後、白化粧土を刷毛塗りする。239・240は煉瓦である。平面に弧状に砂粒の移動が認められ、胎土に0.3～1cm大の角礫が混じる。JIS規格に相当すると見られる。

4. 道具蔵

(1) 調査の概要

道具蔵の床面は全域がコンクリートに覆われており、コンクリート撤去後基礎を補強する目的で礎石を取り外す工事が行われた。礎石の確認調査は文建協が実施し、調査後、礎石の基礎を鉄筋コンクリートで補強するため、布掘り作業が行われた。掘削作業中に瓦列が出土、道具蔵の礎石基礎工事に先行して地層確認及び遺構検出・遺構調査を主とする試掘確認調査を実施した。

資料3－4 道具蔵周辺絵図

(2) 調査成果

調査成果について詳細を掲載する。確認した遺構を遺構配置図に示す。検出した遺構についてはそれぞれ通し番号を付し、主なものについて抽出し出土遺物と併せて図示する。

道具蔵は文化年間の終わりから文政年間の初め(1815～1818)に他家の蔵を解体し向きを変えて現位置に移築したことが解体調査で判明している。西側出入り口付近で、地業の様子を示す瓦列で囲まれた盛土状の遺構が検出された。礎石撤去後に確認調査を行ったが、建物中央部の床面下層では遺構を確認することはできなかった。

下層確認のためのトレンチ調査では、黄褐色粘土と暗灰褐色土の自然堆積層の上に礫混じり粘土を突き固めて造成された堆積状況が確認された。各トレンチの基本層序は以下の通りである。

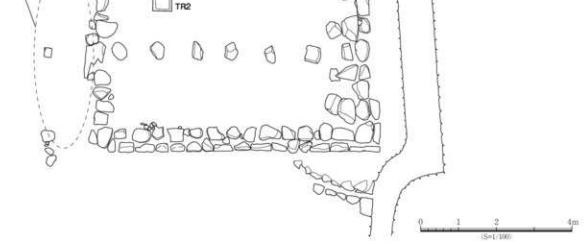


図3－50 道具蔵トレンチ位置図・遺構配置図

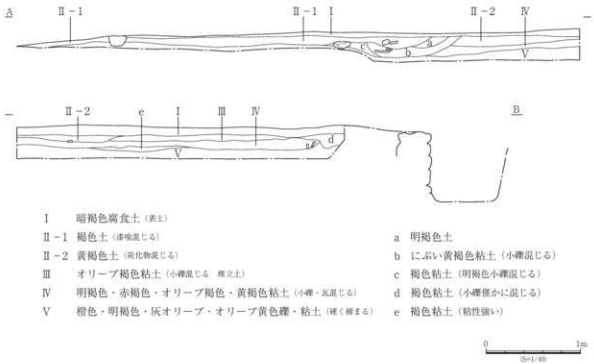


図3－51 道具蔵TR1セクション図

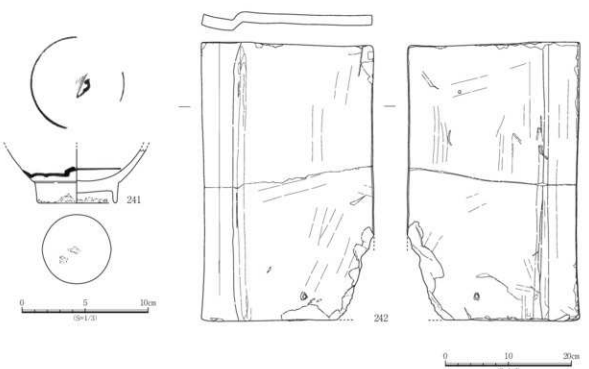
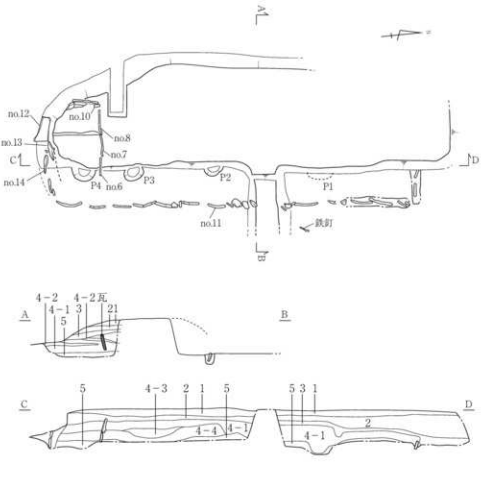


図3－52 道具蔵SX1出土遺物



1　褐色土（表土　漆喰片が多く混じる）
2　褐色土（礫多く混じる）
3　明褐色土
4－1　にぶい黄褐色土
4－2　明褐色土
4－3　褐色・明褐色土
4－4　褐色土（礫・炭化物混じる）
5　褐色・にぶい褐色土（粘土・礫含む）

図3－53 道具蔵SX1遺構図

①盛土状遺構

西側出入り口付近、建物西端の南北列礎石の下面で、地業の様子を示す瓦列で囲まれた盛土状の遺構を検出した。瓦列は東西方向約 1.0 ～ 1.1m、南北方向約 3.9m の隅丸長方形の区画を囲む形で配されていた。瓦の内側は盛土状に土が突き固められ、盛土上部には2面のタタキ面が形成されていた。遺構検出面と2面のタタキ面は道具蔵建築の地業の中で形成されたものと考えられる。また、盛土中には径 0.2m 前後の小ピットが 0.53 ～ 0.80m の間隔で並列する。これらもその一部と見られる。蔵の出入口を造成する目的でつくられた遺構と推測される。

SX1 から出土した遺物の内、241・242 を図示した。241 の磁器碗は広東型を呈す。見込み圏線内に

岩波文、外面に山と雲と見られる染付が描かれる。高台畳付は釉剥ぎで、砂粒が付着する。盛土を囲む瓦は概ね同一の法量に揃えられており、1点の瓦が分割されたものも確認された。分割された瓦は図示した平瓦242で、1点の法量は全長44.2cm、全幅27.4cmと大型で、桟は短く立ち上がり屈曲は僅かである。これを2分割の後再利用し、盛土の土留めとして使用したものと考えられる。塀などに使われる目板瓦と考えられる。また右の遺構図において番号を付した瓦は、比較的平均的な法量のものを抽出し、出土地点を図示した。それぞれについて計測し、表3－1に示す。

表3－1 道具蔵SX1出土瓦法量表

no.	器種	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	備考
6	平瓦	(19.8)	(17.8)	1.6	接合したものを図3－52 242に図示
7	平瓦	27.4	(24.5)	1.7	
8	平瓦	27.4	(23.2)	1.7	
10	平瓦	22.9	(28.9)	1.7	
11	平瓦	(12.0)	(29.4)	1.1	
12	平瓦	(18.4)	(24.1)	1.5	
13	平瓦	(18.0)	(18.2)	1.6	
14	平瓦	(16.3)	24.4	1.5	

5. 新宅

(1) 調査の概要

調査地は幕末から明治に「番屋（ばんや）」があった場所とされている。現状では柿や栗などの果樹園として利用されていたため、縁石が残るのみで建物等は残されていない。新宅の建築に伴い「番屋」に関する礎石・タタキなどの生活面の有無を確認することが調査の主な目的である。調査地にTR1～7のトレンチを設定し、それぞれについて堆積状況及び遺構の有無を確認し、写真及び図面にて記録を行った。また、工事を行う際に下層確認として更に1カ所のトレンチを設定し、立合調査を行った。

資料3－5 新宅周辺絵図

(2) 調査成果

地層確認では、1m以上の厚さで整地土の堆積を確認した。北西部は切土、南東部は盛土によって屋敷地を造成していることが判明した。また、TR5では礎石抜取穴と見られる遺構を確認した。戦後、畑を造成する際にタタキ及び礎石の撤去が行われたと伝えられており、現状は証言通りである。また、下層確認トレンチでも、地山掘削土を使用した盛土の堆積を確認したが、生活面・遺構は検出されていない。調査地中央部では建物またはタタキ撤去の痕跡と見られる漆喰片を多く含む層の広がりが見られた。

また、トレンチ及び遺構から遺物はほぼ出土しなかったが、TR1から磁器戸車が出土した。243は扁平な輪状である。側面と中央の穿孔内は施釉され、表裏面ともに砂粒が付着する。

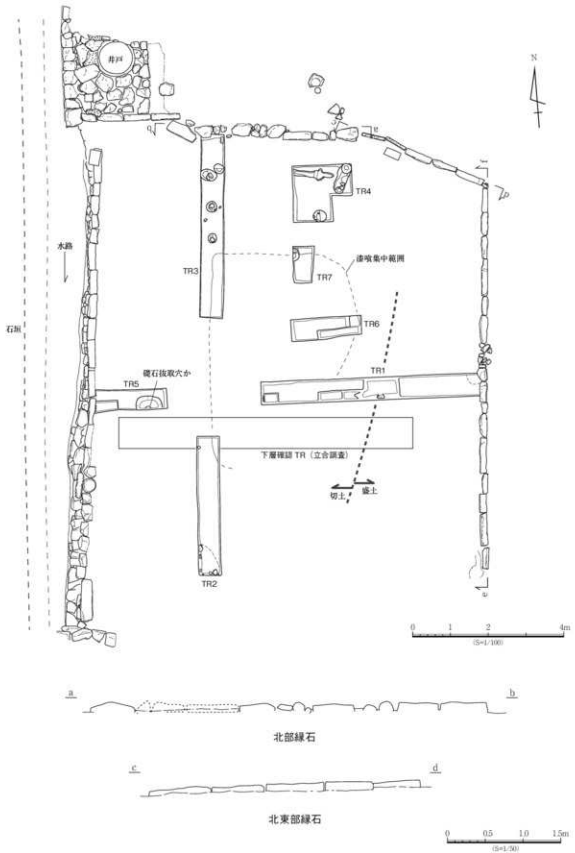


図3－54 新宅トレンチ配置図

図3－55 新宅縁石エレベーション図

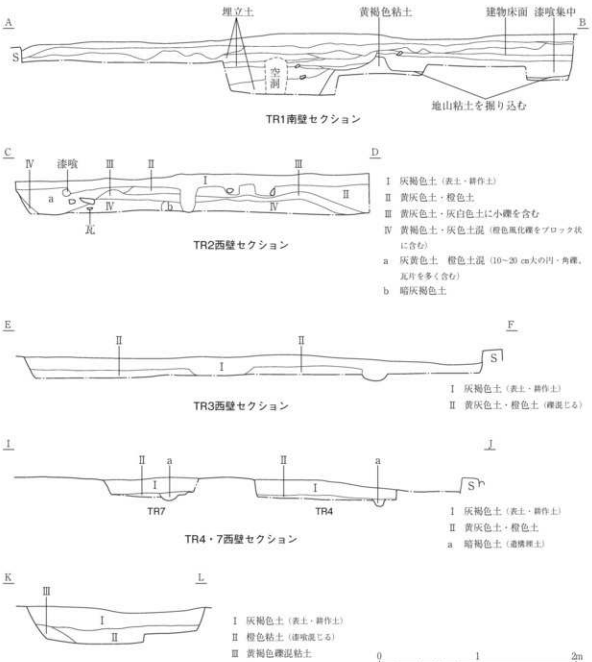


図3－56 新宅トレンチセクション図

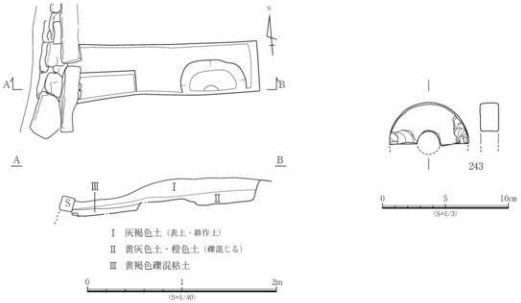


図3－57 新宅TR5遺構図・TR1出土遺物

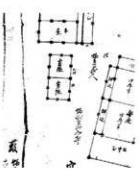
6. 雪隠

(1) 調査の概要

雪隠の復原工事に先行して、上屋建物撤去後に調査を実施した。内部の堆積物を取り除いた後、写真及び図面によって記録を行った。調査の後は文建協によって現位置で整備・復原が行われた。

(2) 調査成果

1辺が約1.80mの方形で、深さ約1.13mを測る土坑が南北に2基並ぶ。壁面はハンダで、更にその上面にセメントによる仕上げが施される。上端周縁には拳大～人頭大の角礫が配されている。北部の土坑の底面では、壁面周縁に伏せた状態で配された丸瓦列を検出した。屋敷地の地下水位が高いことから、遺構を掘る時の水道（みずみち）を意図して配された瓦の可能性が検討される。南部の土坑の壁面仕上げは崩落し、調査時には内部に落ち込んだ状態であった。



資料3－6 雪隠周辺絵図

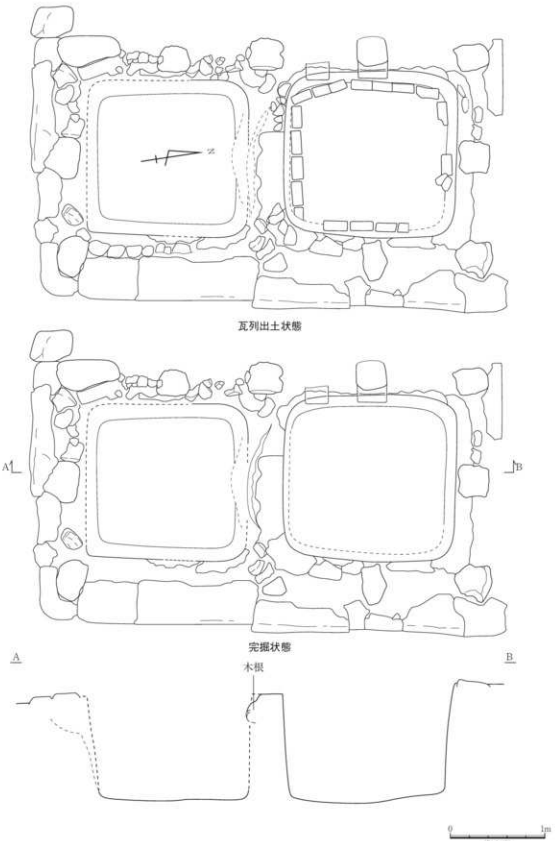


図3－58 雪隠遺構図

第Ⅳ章　まとめ

建造物ごとに明らかになった事実を提示し、調査のまとめとする。

1. 主屋

2棟の建物が連結して主屋を形成する。北西側の居室部が文化5年(1808)、南東側の座敷部が文化7年(1810)に建てられたことなど、建物の来歴が解体調査で明らかになった。復原根拠を検証するため事前に設定された課題は以下の3点でその他は調査時に新たに確認された遺構である。

屋敷地形成の状況(地層)確認

主屋床面下0.6～1.1m前後で旧地表面が確認された。旧地表面の上層は造成土で、その上に床面が形成されていることが判明した。下層は黒褐色土、上層は黄褐色土で、いずれも小礫が混じった造成土層である。

この造成土の上に2面のタタキ面が形成されている。詳細な堆積状況は、座敷部と居室部で異なっている。居室部は座敷部に較べ、現状の床面が一段(4～5cm程度)高く、床面直下の層も異なっている。座敷部ではチャート・砂岩・石灰岩等の拳大の礫を含む層の上に床面が形成され、層の下にタタキ面が確認された。これに対し居室部では、礫を含まない橙色土あるいは黄褐色土の上に床面が形成されていた。2つの建物の地盤が異なる時期に造成されたことを示している。

2面のタタキ面は、比高差10～15cmでともに焼土を伴うことから、調査時には異なる2時期の生活面だと捉えていた。しかしその後、他の調査結果と併せて検討を進め、この2面は床面造成工程中の同時期に形成されたとの結論に至っている。

礎石抜取穴の確認

解体調査で明らかになった主屋の変遷を裏付ける方法の一つが、礎石の位置確認である。現存しない礎石についても、礎石抜取穴により存在を確認することができる。また、抜取穴の痕跡がない地点は柱がなかったことの証明となる。

今回礎石抜取穴の有無を確かめたのは合計24地点、居室部北西角から座敷部南端(式台付近)まで、いずれも復原根拠についての検証である。後世の地形改変のため確認できない地点もあった。礎石抜取穴の検証により、間取りの変更、居室部が建てられた際に座敷部を翌年増築する計画の意図、郷土屋敷として建てられた座敷部建築当時の式台の構造と規模など、復原根拠を裏付けることができた。

絵図及び居室部移築時のクドの位置確認

明治20年頃の絵図に記されたクドの位置を調査したが、その痕跡は確認できなかった。また、居室部移築当時、文化5年(1808)のクドの有無や位置の特定につながる情報も得られなかった。

土間には焼土遺構と焼土層が重なり合い、煮炊きが行われたことを示す。絵図にクドが描かれていた土間北東部は地形改変を受けており、焼土遺構は残っていない。焼土を伴う遺構の中で最も古いものも、弘化年間と推定され、文化年間のものは確認できていない。居室部移築時点から現在に至る煮炊きに関連する施設の変遷は以下のとおりである。

① 居室部移築当初	不明(遺構の存在を確認できず)
② 弘化年間以降	2連のクド遺構(B群－P34・35)
③ 明治20年頃	絵図の位置(2連のクドは地形改変のため残存せず)

④ 明治中期以降　　カマ遺構と周辺の焼土遺構(A群－SX1及びP31～33)
⑤ 現状土間底面形成以降　煮炊に関する施設なし

壺状土坑

座敷部北東部の相の間床下から検出された21基の円筒型土坑である。直径0.30～0.40m、深さ0.35～0.40mで、側壁は堅く締まっている。工事で影響を受けない2基については未調査のまま保存している。

遺構の性格については、当初藍染に関連したものではないかと、具体的に検討を進めたが、藍染を確認できる調査結果は得られなかった。糊づくりや柿渋を原料とした渋染の壺を埋めた土坑、浸透桝など様々な検討を行ったが、現段階では遺構の性格を特定できていない。

壺状土坑は、座敷部北東隅の床面(上段)と相の間床下の一段低くなった地点(下段)に造られている。上下2段のタタキ面の分析により、遺構形成時期が座敷部の建築された文化7年(1810)であること、2面のタタキ面が一連の工程で造られたことが判明した。

陶器埋納遺構

座敷部北部で陶器埋納遺構が確認された。文化7年(1810)の建築以前に埋められたものである。埋納遺構6基から蓋と身がセットになった12組の陶器製の埋納容器が出土した。人名と見られる「権馬」、「卍」の墨書のある蓋など一連の遺物は祭祀に関連する遺物と位置付けている。この他にも、側面に「南」や判読不能なものなど墨書の残る陶器がある。

これらの容器の中に有機物が残るものがあったが、残存状態が悪く内容物の特定はできていない。今次調査で出土した埋納陶器の中に胞衣壺が含まれる可能性を検討している。へその緒や胎盤などを容器に入れた胞衣壺を地下に埋める民俗例は全国で知られており、高知平野でも昭和30年代まで行われていた。一旦埋めた胞衣壺を掘り出して別の場所に埋め直す民俗例も報告されている。

漆器椀埋納遺構

居室部南東部に漆器椀埋納遺構が確認された。漆器椀の残存状況は悪く、漆の被膜だけ残る遺構もある。埋納された地点の上部に礫が置かれるという共通点がある。埋納遺構は現在の床面から掘り込まれており、全部で8基ある。漆器椀は、伏せられ高台部分を上にした状態の個体が1点、それ以外は正位置で埋納されていた。

これら漆器椀埋納遺構は、居室部南東端に位置する「座敷」の床下付近に集中している。同様の事例は県内に例がなく、近世の建造物床下の漆器椀埋納遺構として注目される。

鍛冶関連遺構

居室部南西部から鍛冶関連遺構が確認された。礎石の下から検出され、2時期の遺構の切合いが認められた。遺構内には焼土・炭化物・鉄滓が含まれ、棒状の鉄製品も出土している。主屋の前身建物の時期に伴う遺構と見られる。文化年間以前の安岡家について知り得る遺構の存在が明らかとなった。

遺構は直線状に並ぶ円形及び隅丸方形状の土坑と離れた位置に形成される土坑があり、中心となる円形土坑は壁面が窯壁状に焼き締まっている。遺構の切合い関係から、鍛冶関連遺構は各地点とも2時期以上にわたって造り替えられている。当地にお下家の祖とされる覚兵衛正元が居を構えたとされる明和8年(1771)から居室部が建築された文化5年(1808)までのいずれかの時期に機能した遺構である。

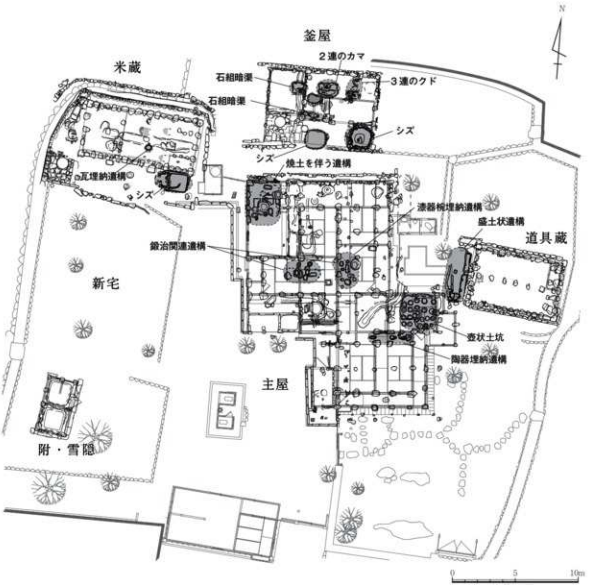


図4－1 安岡家住宅試掘調査全体遺構配置図

2. 釜屋

事前に設定された課題は、建物崩落等により埋まっている礎石列の確認・絵図に残る2連のカマと3連のクドの位置と形態の検証の2点である。

礎石列・狭間石

釜屋は保存修理工事前には建物の北半が崩落により失われた状態であり、建物の一部であった場所は崩れ落ちた瓦や土により覆われていた。

調査開始時には「釜場」の北側通りと東側通りの礎石が、建物崩落のため礎石の有無自体不明な状況であった。「味噌納家」部分の北側通りと西側通りも建物自体の沈下のため、礎石は埋まった状態となっていた。このため、調査は地下に埋まる礎石列の確認を目的とし、推定通りに礎石及び狭間石列が検出された。

絵図に残る2連のカマと3連のクド

カマは、釜場中央北寄りで検出されたSK1が相当する。遺構の平面は長径(東西)1.56m、短径(南北)1.12mの隅丸長方形で、床面からの深さは遺構北半で0.15～0.17m、さらに北壁沿い中央部に長径0.43m、短径0.33m、遺構底面からの深さ0.14mの楕円形のピット状の落ち込みがあった。これにより、カマ遺構は2つに区分されたと推定される。遺構周縁・底面付近からは炭化物・焼土が確認された。

SK1南側の焼土を含む遺構、SX1～3は、いずれもSK1に先行したものである。釜屋建物建築当初「釜場」南西部の一角に、カマ等の機能を持つ焼成遺構が形成されていたと見られる。

クドは、「釜場」の東側に絵図と同じ配置で確認された。SX11～13が相当する。クドの焚口底面の高さは3基ともほぼ同じで、床面からの深さは0.10m、平面的な遺構規模は内壁最大径0.36～0.42m、外壁南北方向1.80m前後と推定される。南側のクドの下からは同規模の焼土遺構が検出されている。クド構築時の造成土である暗褐色土中からは瓦・陶磁器類などの遺物が出土した。クドの構築時期は江戸時代後期(19世紀前半)以降である。

「釜場」と「味噌納家」の境界部分の南北溝

「釜場」に沿って造られた溝で、井戸(SE1)からの排水のため北側の水路に繋がる。「味噌納家」が増築される時点まで機能していたと考えられる。SD1は礫・瓦などの遺物で埋め立てられて廃絶している。出土した遺物に、鮮やかな緑に発色する涼炉がある。天保10年(1839)以前に安岡家住宅で煎茶が嗜まれていたことを示す遺物であり、幕末前夜の安岡家住宅での生活の一端を窺うことのできる資料である。

シズ遺構と石組暗渠

「釜場」南東隅で、石組遺構SX4を検出した。絵図に「ハシリ下シヅ」と記されている地点である。安岡家住宅のある香我美町山北地区はじめ県内各地で「シズ」と呼ばれていた遺構で、生活用水のための施設である。昭和30年頃までは県内各地に残っていた。また、釜屋の床下からは、暗渠状になった溝が検出された。SD2は南側礎石列に沿って東西方向に延びる石組みの暗渠で、釜場の西側へと延びている。SX4とSD2は北側の水路から取り込んだ水を利用する目的で造られた一連の施設で、SX4に一旦溜まった水がSD2を通じて排水されるシステムだったと考えられる。

これらの遺構は文政8年(1825)の釜屋建築と同時期に形成されたものである。SX4は遺構中央に竹を挿し埋め立てられていた。息抜きの孔を確保した廃絶儀礼として注目される。SX4は廃絶後、西側へ移動、井戸の東側に新たにハンダで仕上げられたSX5が形成された。

下層から検出された遺構・前身建物の存在

「釜場」と「味噌納家」の境界部、礎石の下から遺構が確認された。焼土を伴わない平面不整楕円形の土坑SX17で、釜屋建物に先行する遺構である。出土遺物は瓦や陶磁器類で、遺物の時期は江戸時代後期18世紀後半から19世紀初頭である。

3. 米蔵

床下の調査により米蔵建築前後の地業や形成された遺構に関する事実が明らかとなった。

下屋の土坑

米蔵の南東隅、下屋の下に切合い関係がある2基の土坑SX2・SX5が検出された。SX5よりSX2が新しい。SX2は方形の土坑で周囲をハンダで固められている。遺構の形は釜屋で調査された「シズ」

と類似している。

SX5は、戦後種イモを貯蔵する室（むろ）として使われていた。廃絶時期は昭和50年前後で、隣接する風呂場解体の際の大量の煉瓦やコンクリート片などの廃棄物で埋め立てられていた。統制陶器やガラス製品、碍子など、戦前から戦後にかけての遺物が出土している。

井戸の「掘り方」

米蔵の西部の現在も使われている井戸SEは、井戸枠上端より井戸底の堆積土上面までの深さが7.8mであった。

井戸の掘り方は、造成土の上から掘り込まれており、形成時期は米蔵造成時期より新しい。米蔵自体は天保8年（1837）に建てられており、井戸はそれ以降に構築されたことになる。井戸から北東側には掘り方がほとんどなく、南西方向の片側に偏った掘り方である。

米蔵の床面造成・瓦埋納遺構

米蔵の床面と下層に3面以上のタタキ面及び不整合面が存在することを確認した。これらは、米蔵の床面形成時の一連の地業だと判断している。

建物に関する遺構は確認できなかったが、2面目で焼土遺構を、3面目で瓦埋納遺構を検出した。焼土遺構（SX3･4）は掘り方をほとんど持たないか、あるいはごく浅い掘り込みに焼土・炭化物が残る。瓦埋納遺構（SX1）は祭祀的な性格を持つ遺構（地鎮遺構）である。近世後期（19世紀第2四半期）に建てられた蔵の地鎮遺構として注目される事例である。

下層の石垣

北西部石垣の下層から現況石垣とは異なる石列が確認された。井戸を構築した際に米蔵西部の溝の形状が変わっており、この地形改変に伴い埋めたてられた石垣だと考えられる。北部の溝からは石垣の下に設置する「胴木」も検出されている。

4. 道具蔵

下層の造成

道具蔵は文化年間の終わりから文政年間のはじめ（1810年代後半）に建てられたと推定されている。下層確認のためのトレンチ調査では、黄褐色粘土と暗灰褐色土の自然堆積層の上に礫混じり粘土を突き固めて造成された堆積状況が確認されている。

盛土状遺構

中央および東側部分からは遺構・遺物は検出されていない。瓦列が確認されたのは、建物西端の南北列礎石の下からである。この瓦列は短径（東西）約1.0～1.1m、長径（南北）約3.9mの隅丸長方形の区画を囲む形で配され、瓦の内側は盛土状に土が突き固められていた。瓦で囲まれた盛土上部の東西方向の幅は推定約1.0m、遺構の上層には2面のタタキ面が形成されていた。蔵の出入口を造成する目的でつくられた遺構だと考えられる。

瓦が埋設された遺構面と上部で2面のタタキ面が検出された。これらは道具蔵建築の一連の工程の中で形成されたものである。2面あるいはそれ以上のタタキ面や不整合面を重ねて床面を仕上げる工法は、主屋や米蔵など他の調査地点でも確認されている。

5. 新宅

幕末にはこの位置に「番屋（ばんや）」の建物があったとされているが、礎石は本来あるべき場所にはなく、床面タタキの痕跡も確認できなかった。一部、漆喰片が多量に混じった橙色土の分布が見られ、これが建物に関連する可能性は考えられるが、遺物はほとんど出土していない。

地層確認では、1m以上の厚さで造成土の堆積が確認された。屋敷地西側の南北に走る溝に近接する範囲まで盛土により屋敷地を造り出していることが明らかになった。旧地形および屋敷地の造成を知るうえで貴重な資料が得られた。

6. 雪隠

雪隠の解体修理の最終段階で土坑下部のモルタルを一部取り除き、下層確認を実施、測量・観察を行った。2基並ぶ北側の土坑では、底面の周縁に丸瓦が配されていた。安岡家住宅周辺は地下水位が高く、地上からの掘削深度により湧水が認められる地点がある。この丸瓦は、湧水に対する対策、水道（みずみち）として設置された可能性がある。

遺物観察表

凡例

1. 遺物観察表の法量は, 基本的に口径・器高・底径について計測した。残存長については( )で記載する。
   その他, 器形により必要なものは直接項目に付け加えた。
   瓦・石製品及び鉄製品については全長・全幅・全厚、その他、必要な法量の計測をそれぞれ記載した。
2. 色調については『新版標準土色帳』(農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修)に準じた。
3. 胎土については肉眼観察で判別できるものについてのみ記載した。
4. 備考には年代のわかるものについて記載した。

調査区	番号	遺構層位	器種器形	法量（cm） 口径	器高	底径	色調 内面・外面・断面	特徴	備考
主屋	1	TR3 南端床下1層	磁器 碗	－	(1.7)	－	灰白 灰白 灰白	肥前産。口縁部小片。内面口縁部に圏線、外面に植物が描かれる。	
	2	TR3 南端黒色埋立土	陶器 供膳具	－	－	全厚 (0.9)	灰白 灰褐 褐灰	底部小片。内面に白化粧土が刷毛塗りされる。	
	3	TR3 南紅供部 黒色埋立土	陶器 碗	－	(3.0)	－	浅黄 浅黄 にぶい黄橙	口縁部小片。内外面に乳白色の釉薬が施される。口縁端部は丸く収める。	
	4	TR3 南部黒色土	青磁 鉢	－	(2.8)	(7.0)	緑白 緑白 灰白	肥前産。内外面に青磁釉が施される。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。高台畳付付近は露胎。高台内周縁に砂粒が付着する。	18c 末
	5	TR4 南端	銭貨	－	－	外縁厚 0.17 文字面厚 0.12	－	残存部に「寶」の文字が残る。重量1.0g	
	6	TR10 西部 1層	瓦	全長 23.1	全幅 11.1	全厚 6.2	橙色	刻印は施されていない。法量は日本標準規格ではない。	大正14年（1925）以前
	7	TR3 北部 礎石直下	磁器 蓋口	(7.9)	(6.0)	(6.6)	明緑灰 明緑灰 灰白	肥前系。内面口縁部に2条の圏線。外面圏線間に矢羽文、底部に2条の圏線が巡る。	18c 末～19c 前半
	8	土間 北隅 床下1層	陶器 擂鉢	(21.2)	(4.8)	－	黒褐 黒褐 橙	内外面に鉄釉が施される。口縁端部は水平面を なし、釉を調き取る。内面下位に重ね焼きの痕跡が残る。	
	9	土間 表採	銭貨	外縁外径 2.50 外縁内径 1.92	内郭外径 0.95 内郭内径 0.57	外縁厚 0.13 文字面厚 0.15	－	寛永通宝。重量4.0g	
	10	居室部 北部	銭貨	外縁外径 2.42 外縁内径 1.95	内郭外径 0.80 内郭内径 0.60	外縁厚 0.13 文字面厚 0.12	－	寛永通宝。重量3.0g	
	11	居室部 北部	銭貨	外縁外径 2.28 外縁内径 1.81	内郭外径 0.91 内郭内径 0.67	外縁厚 0.12 文字面厚 0.13	－	寛永通宝。重量1.0g	
	12	居室部 北部	磁器 ミニチュアか	1.2	3.2	1.4		小さな亀状。表面が円形になり陰陽太極図のような文様が描かれる。	
	13	居室部 床直下炭層	銅製品 煙管	全長 (5.7)	雁首幅 0.4	火皿幅 1.4	－	厚さ0.1cm。外径1.1cm、内径0.9cm。重量9.4g	
	14	TR11	石素材 剥片	全長 8.3	全幅 12.8	全厚 2.4	－	砂岩製の剥片。重量208.0g	
	15	TR11	石素材 剥片	全長 9.0	全幅 10.6	全厚 1.8	－	砂岩製の剥片。重量146.0g	
	16	TR6 西部	石素材 剥片	全長 10.4	全幅 15.5	全厚 (4.9)	－	砂岩製の剥片。重量842.0g	
	17	TR8 中庭 I・II層	瓦質土器 焙ぉ	－	(3.4)	(15.0)	灰 灰 灰白	胎土に雲母片を含む。底部はの高台状で、外方へ大きく開く。	近世以降
	18	TR8 中庭	土師質土器 焙ぉ	－	(3.5)	－	灰白 灰白 灰白	残存部上位2カ所に円形、下位1カ所に方形の透かしがみられる。	19c
	19	中庭 瓦列	石製	全長 (3.2)	直径 (0.7)	－	灰白	断面円形の棒状を呈す。先端部は使用により磨滅し折損。側面に「キタ」の文字が彫りこまれる。重量20g	
	20	中庭	石製品 石臼	全長 19.8	全幅 37.3	全厚 12.4	－	花崗岩製。重量14.5kg	

調査区	番号	遺構層位	器種器形	法量（cm）口径	法量（cm）器高	法量（cm）底径	色調 内面・外面・断面	特徴	備考
主屋	21	壺状土坑1 11層	鉄製品 鞭	(19.2)	(4.2)	–	–	鞭状を呈する。底部と見られる部分は欠損する。重量45.1g	
	22	壺状土坑9	石製	全長 (4.0)	直径 0.6	–	–	側面に成形時の稜がわずかに残る。先端部は使用により磨滅。重量30g	
	23	壺状土坑9	石製品 叩石	全長 (8.2)	全幅 10.9	全厚 3.7	–	端平な砂岩円礫。折損に伴う調整と側縁に使用に伴うと考えられる敲打痕が残る。時期不明。重量530g	
	24	壺状土坑20	石製品 石印	全長 3.4	全幅 1.4	–	–	羽目は外枠で14mm、枠内は12mm四方の方形。側面に成形時の擦痕が残る。上部に和服で胡坐をかく人物が彫られる。頭部は髷、朱が付着する。重量120 g	
	25	SF1	陶器 盞	天井部径 3.7 笠部径 5.6	1.1	かえり径 4.2	灰白 灰白 灰白	京都・信楽系。外面は施釉、笠端部は釉薬を掻り取る。内面は露胎する。外面天井部に墨書が残る。	1807年以前（出土状況）
	26	SF1	陶器 碗	5.6	3.1	3.9	灰黄 浅黄橙 灰白	京都・信楽系。小型碗。腰部で稜を成し、口縁部は直立。口縁端部は稜を調整取る。内外面とも施釉、外面底部は露胎。外面に「南」、直上の口縁端部に「-」の墨書が残る。	19c
	27	SF2	土師質土器 杯	–	(1.8)	6.7	橙 橙 橙	直として使用。内外面とも回転ナデ、底部切り離しは回転糸切り。	
	28	SF2	陶器 碗	9.2	5.8	4.8	灰白釉 浅黄 灰白	京都・信楽系。内外面とも施釉、外面腰部以下は露胎する。見込みに3カ所の目痕が残る。断面長方形の削り出し高台。高台内に墨書が残る。	1807年以前（出土状況）
	29	SF3	土師質土器 盞	天井部径 5.6 笠部径 6.2	1.7	かえり径 6.2	橙 にぶい橙 –	内外面の天井部に墨書あり。内面「卍」、外面は「安」か。	1807年以前（出土状況）
	30	SF3	土師質土器 碗	7.0	4.0	4.4	にぶい橙 にぶい橙 –	小型の碗。内面底部に四眼五横の九字と見られる格子文、外面に「〇」の墨書が施される。	1807年以前（出土状況）
	31	SF4	陶器 盞	天井部径 (6.4) 笠部径 (9.8)	1.3	かえり径 (7.4)	灰白 灰白 灰白	信楽。外面は施釉、内面は露胎する。天井部と笠部の境に稜をなす。かえり部に修粒付着。	19c
	32	SF4	陶器 碗	8.8	4.4	5.5	灰白 灰白 灰白	信楽。内外面とも施釉、外面腰部以下は露胎する。口縁端部は水平面をなし、稜を調整取る。腰部で稜をなし、屈曲する。見込みに径3～6mmの目痕が3カ所残る。	19c
	33	SF4	陶器 盞	天井部径 5.4 笠部径 8.8	1.4	かえり径 6.9	灰白 灰白 灰白	信楽。外面は施釉、内面は露胎する。天井部と笠部の境に稜をなす。外面天井部に墨書の痕跡あり。	19c
	34	SF4	陶器 碗	8.7	4.4	5.0	灰白 灰白 灰白	信楽。内外面とも施釉、外面腰部以下は露胎する。口縁端部は水平面をなし、稜を調整取る。腰部で稜をなし、屈曲する。見込みに径3～6mmの目痕が3カ所残る。	19c
	35	SF5	陶器 盞	天井部径 6.6 笠部径 9.2	2.5	かえり径 5.2	灰白 にぶい橙 –	京都・信楽系。土師質状を呈す。外面は施釉、内面は露胎する。外面中央に2方から折り曲げた摘みを貼り付ける。外面底部に「権馬」の墨書あり。	1807年以前（出土状況）
	36	SF5	陶器 壺	8.0	8.3	6.1	明オリーブ灰 灰白 –	小型壺。内外面とも施釉、外面底部は露胎。口縁部は短く直立。端部は水平面を成し、内面口縁部と共に輪調整。内面底部に3カ所の目痕。貫入顕著。外面底部に墨書あり。	1807年以前（出土状況）
	37	SF5	陶器 盞	天井部径 6.8 笠部径 9.2	2.3	かえり径 5.1	浅黄 にぶい橙 –	土師質状を呈す。外面は施釉、内面は露胎する。外面中央に2方から折り曲げた摘みを貼り付ける。外面底部にわずかに墨書が残る。	
	38	SF5	陶器 壺	8.0	8.2	5.8	灰白 灰白 –	小型壺。内外面とも施釉、外面底部は露胎。口縁部は短く直立。端部は水平面を成し、内面口縁部と共に輪調整。内面底部に3カ所の目痕。貫入顕著。外面底部に墨書あり。	1807年以前（出土状況）
	39	SF5	陶器 盞	天井部径 5.6 笠部径 8.8	1.2	かえり径 6.8	灰白 灰白 灰白	京都・信楽系。外面は施釉、内面は露胎する。外面天井部はわずかに円状を呈す。	18c 末～19c 前半
	40	SF5	陶器 碗	8.4	4.6	5.6	浅黄橙 浅黄橙 –	京都・信楽系。腰部で稜を成し、口縁部は直立する。口縁端部は内傾し面を成し、稜を調整取る。内外面とも施釉。外面に「南」、直上の口縁端部に「-」の墨書が残る。	18c 末～19c 前半

調査区	番号	遺構 層位	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	色調 内面・外面・断面	特徴	備考
主屋	41	SF6	陶器 壺	天井部径 6.8 笠部径 8.9	2.0	かえり径 4.3	浅黄 にぶい黄 灰白	土師質状を呈す。外面は施釉、内面は露胎である。外面中央に2方から折り曲げた摘みを貼り付ける。	18世紀 年以前（出土状況）
	42	SF6	陶器 壺	7.6	7.9	5.4	内外面とも黄褐 にぶい黄 灰白	内外面とも施釉。口縁部は短く直立、端部は水平面を成し、内面口縁部と共に釉を剥ぎ取る。釉調は浅黄色。外面底部は番笥底状に深く削り出し露胎である。	18世紀 年以前（出土状況）
	43	SF6	陶器 壺	天井部径 6.6 笠部径 8.8	2.2	かえり径 4.7	にぶい黄 にぶい黄橙 灰白/浅黄橙	土師質状を呈す。外面は施釉、内面は露胎である。外面中央に2方から折り曲げた摘みを貼り付ける。確質の焼き上がり、貫入あり。	
	44	SF6	陶器 壺	7.5	8.7	6.3	にぶい黄橙 黄褐 灰黄	小型壺。外面は施釉、外面底部及び内面は露胎である。口縁部は短く直立する。端部は水平面を成し、釉を剥ぎ取る。内部に有機物が残る。	
	45	SF6	陶器 壺	天井部径 6.5 笠部径 9.0	2.2	かえり径 4.9	浅黄 オリーブ黄 －	土師質状を呈す。外面は施釉、内面は露胎である。外面中央に2方から折り曲げた摘みを貼り付ける。	18世紀 年以前（出土状況）
	46	SF6	陶器 壺	8.1	9.1	6.3	浅黄 にぶい黄 －	外面は施釉、底部は露胎、内面は露胎である。口縁部は短く直立する。端部は水平面を成し、釉を剥ぎ取る。外面底部に墨書あり。	18世紀 年以前（出土状況）
	47	SF6	陶器 壺	天井部径 6.6 笠部径 8.8	2.3	かえり径 4.5	にぶい黄橙 オリーブ黄 －	土師質状を呈す。外面は施釉、内面は露胎である。外面中央に2方から折り曲げた摘みを貼り付ける。	18世紀 年以前（出土状況）
	48	SF6	陶器 壺	7.8	8.3	5.5	にぶい黄橙 にぶい黄橙 －	内外面とも施釉。外面底部は露胎、口縁部は短く直立。端部は水平面を成し、内面口縁部と共に釉剥ぎ、内面底部に3カ所の目痕、貫入顕著。外面底部に墨書あり。	18世紀 年以前（出土状況）
	49	P6	漆器 椀	－	(6.5)	－	赤～暗赤灰 黒褐 －	内面は下地黒漆の上に赤漆、外面は黒漆が施される。風化が著しく、詳細は不明。	
	50	P7	漆器 椀	－	(4.9)	－	暗赤灰～黒 暗赤 －	内面は黒漆、外面は下地黒漆の上に赤漆が施される。高台の痕跡あり。風化が著しく、詳細は不明。	
	51	P8	漆器 椀	(11.8)	(7.7)	－	黒褐 黒褐 －	内外面とも黒漆が施される。風化が著しく、詳細は不明。	
	52	P51	鉄製品 不明	長辺 10.0	短辺 5.6	全厚 0.5	－	縦平な板状で、わずかに長軸方向に湾曲する。重量 101.0g	
	53	P14	棒状鉄製品	全長 (13.7)	直径 0.4～0.5	延長 (17.5)	－	直径約 5mmの棒状で、鉤状を呈する。重量 8.3g	
	54	P14	棒状鉄製品	全長 4.4	直径 0.5	延長 (10.3)	－	直径約 5mmの棒状で、鉤状を呈する。重量 4.7g	
	55	P14	棒状鉄製品	全長 5.7	直径 0.5	延長 (7.0)	－	直径約 5mmの棒状で、鉤状を呈する。重量 3.2g	
	56	P14	棒状鉄製品	全長 (8.8) (10.1) (5.5)	直径 0.4～0.45	延長 (30.0)	－	直径約 5mmの棒状で、鉤状を呈する。重量 13.1g	
	57	居室部 次の間 畳層炭中	鉄滓	全長 4.1	全幅 3.5	全厚 1.5	－	重量 13.1g	
	58	居室部 次の間 畳層炭中	鉄滓	全長 3.7	全幅 1.8	全厚 1.2	－	重量 7.1g	
	59	SK4	瓶器 甕	－	(2.2)	(12.8)	灰白 灰白 灰白	肥前産くらわんか手の甕。内面に2条の圏線と文様あり。見込み蛇ノ目釉剥ぎ、砂粒が付着する。高台畳付にも砂粒が付着する。	18～19c 主に18c
	60	SK5	瓶器 甕	芝部径 (10.4)	2.9	－	灰白 灰白 灰白	肥前産型料碗の蓋。輪状の摘みが付く、外面に「丸に兎」、「鳥」はか、内面は「十字花」状の文様。摘み径 4.2 cm	18c 後半

調査区	番号	遺構層位	器種器形	法量（cm） 口径	器高	底径	色調 内面・外面・断面	特徴	備考
主屋	61	P30	石製品 石臼	全長 15.1	全幅 30.0	全厚 8.5	－	砂岩製。重量 5.05kg	
	62	SK16	細器 皿	（13.5）	2.3	8.3	白 白 白	「国民食器」。内面口縁部に 2 条の緑色の圏線が巡る。	戦中
	63	SK16	細器 蓋	笠部径 （16.3）	（1.8）	かえり径 （12.9）	白 白 白	「国民食器」。外面笠部周縁に 2 条の緑色の圏線が巡る。	戦中
	64	SK16	細器 碗	－	（5.1）	4.1	白 白 白	所謂統制陶器。外面底部に「岐 37」の統制番号。「岐阜県陶磁器工業組合連合会」所属「多治見陶興」による。外面下位に多重圏線、高台周縁に 2 条の圏線が巡る。	
	65	SK16	細器 おろし皿	全長 （9.2）	全幅 （6.3）	全厚 1.1	灰白 灰白 灰白	瀬戸産の所謂統制陶器。「瀬 733」の統制番号あり。「瀬戸陶磁器工業組合」に所属の生産者による。66 と同一個体か。	昭和 15 ～ 21 年
	66	SK16	細器 おろし皿	全長 （5.0）	全幅 （4.7）	全厚 1.3	灰白 灰白 灰白	65 と同一個体か	昭和 15 ～ 21 年
	67	SK16	ガラス瓶 日常生活瓶か	1.4	5.6	2.0	青色透明	スクリュー栓。ガラスに気泡が残る。胴部は断面方形で、角は面取り状。側面に凸と「Egami」のエンボス有り。	
	68	SK16	ガラス瓶 白髪染め瓶	1.5	7.1	2.7	青色透明	コルク製機械栓か。胴部に「ろり羽」・「定量」、液体の容量を示すラインのエンボス有り。「定量」の文字は左から右、底部・側うすが見られる。	
	69	SK16	ガラス瓶 白髪染め瓶	1.5	7.2	2.5	無色透明	スクリュー栓。胴部に「ろり羽」「定量」、液体の容量を示すラインのエンボス有り。「定量」の文字は左から右。底部に「○」のエンボス。	
	70	SK16	ガラス瓶 薬品瓶	2.0	5.8	2.4	無色透明	コルク栓。やや層の強る筒型状。底面に 4 重の同心円状のエンボス有り。気泡・側厚が見られる。	
	71	居室部 北東隅	ガラス瓶 目薬瓶	全長 7.7	全幅 2.3	－	黄色透明	スポイド型。上部ゴムは欠損する。「SANTENDO」のエンボス有り。「参天堂薬局」の「大学目薬」である。	昭和
	72	T86 東端	ガラス瓶 白髪染め瓶	2.6	4.3	3.0	無色透明	広口のスクリュー栓。円筒型の胴部に「みや古染」のエンボス有り。	
	73	SK16	ガラス瓶 白髪染め瓶	1.4	7.3	2.7	無色透明	スクリュー栓。プラスチック製の内栓が残る。胴部に「元禄」・「定量」・「GENROKU」のエンボス有り。文字は全て左から右。底部に「◇」・「2」のエンボス有り。	
	74	SK16	コルク栓	全長 0.7	全幅 0.9	全厚 0.9	－	コルク製の栓。	
	75	SK16	ガラス瓶 白髪染め瓶	1.4	7.1	2.7	薄青色透明	コルク製機械栓か。胴部に「ろり羽」・「定量」、液体の容量を示すラインのエンボス有り。「定量」の文字は左から右。底部「18」のエンボス有り。	
	76	SK16	ガラス瓶 白髪染め瓶	1.4	7.2	2.7	青色透明	コルク製機械栓か。胴部に「ろり羽」・「定量」、液体の容量を示すラインのエンボス有り。「定量」の文字は左から右。底部「18」のエンボス有り。	
	77	SK16	ガラス瓶 白髪染め瓶	1.4	7.1	2.7	薄緑色透明	コルク製機械栓か。胴部に「ろり羽」・「定量」、液体の容量を示すラインのエンボス有り。「定量」の文字は左から右。底部「5」のエンボス有り。	
	78	SK16	ガラス瓶 白髪染め瓶	1.4	7.3	2.7	無色透明	スクリュー栓。コルク製の内栓が残る。胴部に「ろり羽」「定量」、液体の容量を示すラインのエンボス有り。「定量」の文字は左から右。底部「14」のエンボス有り。	
	79	SK16	ガラス瓶 薬品瓶か	1.9	5.9	3.1	無色透明	コルク栓。底部に「T C W CO」・「TYPE Ⅲ 70 USA」のエンボス有り。	
	80	SK16	ガラス瓶 薬品瓶か	1.05	4.7	2.0	無色透明	スクリュー栓。底部に「5」「10」「SANKYO」のエンボス有り。	

調査区	番号	遺構 層位	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	色調 内面・外面・断面	特徴	備考
主屋	81	SK16	ガラス瓶 化粧品瓶	－	9.3	3.9	無色透明	口縁部は欠損。胴部は断面方形で、角は面取り状。気泡が多く、胴うす・底厚が見られる。	戦前か
釜屋	82	SK1	鉄製品 不明	全長 (20.3)	全幅 1.3	全厚 0.4	－	細長く板状の鉄製品。両側縁は幅0.3cm前後の面をなす。基部は丸く仕上げられ、先端部は緩く屈曲し、鋭利になっている。折損によるものかどうかは不明。	
	83	SX2	丸瓦	全長 (11.7)	全幅 (14.0)	全厚 (1.3)	灰 灰 灰	凹面にコビキB痕あり。長辺方向のナデで仕上げる。	
	84	SX2	平瓦	全長 (11.6)	全幅 (11.1)	全厚 (1.5)	黄灰 灰白 灰白	2次的な被熱により部分的に赤変する。凹面に織維圧痕がのこる。直径8mmの穿孔あり。	
	85	SX10	煉瓦	全長 (21.8)	全幅 (11.1)	全厚 (5.7)	橙 橙 橙	煉瓦の規格は、全長21.6cm、全幅10.8cm、全厚5.3cm。表面は砂粒が斜め方向に移動する。平面に光沢不足による筋状の空洞が見られる。	大正14年以前
	86	SX11	青磁 碗	－	(3.0)	－	灰オリーブ 灰オリーブ 灰	口縁部小片。内外面とも青磁釉がかかる口縁端部は丸く仕上げる。	
	87	SX11	土師質土器 ザル	全長 (7.0)	全幅 (10.0)	全厚 1.0	灰白 橙 橙	推定直径10cm程度。残存部に3カ所の穿孔あり。	
	88	SX11	瓶器 壺	天井部径 (4.2) 笠部径 (11.1)	1.8	かえり径 (7.8)	灰白 灰白 灰白	内面及び外面笠端部は施釉、外面笠部から天井部は露胎する。中央に釉を剥ぎ取った痕跡が残る。胎土はやや陶質。	
	89	SX16	陶器 甕	(34.6)	(6.6)	－	黒褐 黒褐 にぶい黄橙	口縁部から頸部片。内外面に褐色の釉が施される。口縁部は内湾気味に直立する。口縁端部は内外面に拡張し、やや凹状の面をなす。90と同一個体。	
	90	SX2 SX11	陶器 甕	－	(6.1)	－	黒褐 黒褐 灰白	肩部片。内外面に褐色の釉が施される。肩部に多重の凹線が巡る。89と同一個体。	
	91	SX17	陶器 碗	－	(4.3)	－	浅黄 浅黄 灰白	内外面とも灰釉が施される。外面口縁部が回転ナデにより強かに凹線状になる。	
	92	SX17	陶器 碗	(13.0)	(6.2)	－	灰白 灰白 灰白	尾戸焼の丸型碗。内外面に灰釉が施される。表面にピンホールあり。	18c 後～19c
	93	SX17	陶胎染付 碗	－	(3.2)	5.5	灰白 灰白 灰白	瀬戸産の広東型碗。見込みに圏線、コンニャク印刷による五弁花文、外面高台に圏線。外原は淡い発色。	18c 末～19c
	94	SX17	瓶器 碗		(3.2)	(3.6)	灰白 灰白 灰白	肥前産。内面に帯線の間に2条圏線、見込みに手描きによる五弁花。外面は帯線と複数の圏線が巡り、格子文風の文様が描かれる。	18～19c
	95	SX17	瓶器 碗	－	(3.5)	－	灰白 灰白 灰白	外面に草花文、花唐草か、内面見込みに圏線が巡る。	
	96	SX17	瓶器 碗	－	(3.6)	(6.9)	灰白 灰白 灰白	肥前産、外面に青海波文、高台に2条の圏線が巡る。	18～19c
	97	SX17	丸瓦	全長 (6.0)	全幅 (9.8)	全厚 (1.5)	オリーブ黒 灰 灰白	玉縁部、凹面に布目圧痕、部分的にナデが見られる。	19c 前半
	98	SX4 (TR1)	陶器 碗	(11.7)	(2.4)	－	にぶい橙 にぶい橙 橙	口縁部小片、内外面に灰色の釉薬がかかる。	
	99	SX4 (TR1)	陶器 碗	(13.6)	(4.8)	－	灰白 灰白 灰白	尾戸焼。内外面とも灰釉がかかる。釉調は雑器的な印象。	18c 後半～19c 前半
	100	SX4	瓶器 碗	－	(2.2)	－	灰白 灰白 灰白	口縁部小片、内面に蔦文帯、外面唐草と草文か。	19c

調査区	番号	遺構層位	器種器形	法量（cm）			色調	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面・外面・断面		
釜屋	101	SX4	陶器蓋	笠部径(10.6)	2.3	－	にぶい褐 褐 灰白	内外面に鉄釉が施される。外面天井部から笠部にかけて多重の凹線が巡る。横み径5.3cm	近世
	102	SX4	陶器蓋	笠部径(10.6)	2.1	－	にぶい褐 褐 灰白	内外面に鉄釉が施される。外面天井部から笠部にかけて多重の凹線が巡る。横み径5.1cm	近世
	103	SX4	瓶器紅皿	(4.4)	1.5	1.5	灰白 灰白 灰白	肥前産。型押成形による菊花型で、口縁端部はやや幅広の水平面状を呈す。	19c 前半
	104	SX4	陶器火入れ	(10.8)	(4.4)	－	灰白～明褐 灰白 灰白～明褐	外面及び内面口縁部は施釉。内面は露胎する。白化粧土の上に白濁した釉を施す。貫入が入る。口縁部は内面側に肥厚し、丸みを帯びた面を成す。	19c
	105	SX4	鉢器徳利	－	(1.5)	－	にぶい赤褐 にぶい赤褐 にぶい赤褐	内面底部に8条1単位の櫛目。	
	106	SX4	鉢器徳利	(32.5)	(3.9)	－	灰褐 灰褐 明赤褐	明石・堺系。内面口縁部に1条の凹線、口縁端部は丸く収める。外面口縁部に2条の凹線、口縁下端は外方へ拡張。9条1単位の櫛目。粘土に白色鉱物を含む。	
	107	S X 4	ガラス瓶薬品瓶か	－	(3.3)	1.9	薄緑色透明	小型の瓶。気泡を多く含む。	
	108	SX4	竹筒	全長(62.3)	全幅2.8	全厚2.1	－	上部は節近くで切断、強かに破砕され、下部は鋸状の工具で斜めに断ち切られる。節から派生した小枝は切り落とされ、切断面は丁寧に整える。節は抜いていない。	
	109	SX5	瓶器杯	(4.5)	(2.1)	－	灰白 灰白 灰白	小型で碗状を呈する小杯。内外面とも施釉される。	
	110	SX5	瓶器紅皿	(5.8)	(1.7)	－	灰白 灰白 灰白	肥前産。型押成形による。外面に唐草文の陽刻文様が施される。口縁端部はやや幅広の水平面状を呈す。	19c 中葉以降
	111	SX5	土師質土器サナ	－	－	全厚1.0	浅黄橙 浅黄橙 浅黄橙	残存部に直径0.9～1.4cmの3カ所の穿孔あり。	
	112	SD1（TR4）	陶器瓶	(13.6)	(3.5)	－	灰オリーブ 灰オリーブ 灰オリーブ	在地産。内外面とも灰釉が施される。見込み蛇ノ目釉剥ぎ。周縁に白濁したアルミナ砂が塗布される。	
	113	SD1（TR4）	陶器瓶	－	(2.0)	(5.4)	にぶい黄橙 にぶい黄橙 明黄褐	断面逆台形状のケズリ出し高台。残存部の見込み2カ所に目痕が残る。目痕には炭化物が付着する。	
	114	SD1（TR4－N）	陶器瓶	(15.0)	(2.6)	－	オリーブ黄 灰白 灰黄	内外面に灰釉が施される。口縁部内外面は釉剥ぎ。	
	115	SD1（TR4）	陶器碗	(5.8)	(1.9)	－	暗褐 暗褐 黄灰	口縁部小片の内外面に鉄釉が施される。外面中位のロクロ目が明確状に巡る。	
	116	SD1（TR4－E）	陶器碗	(12.0)	(4.6)	－	灰白 灰白 浅黄	瀬戸産粕台手の碗。内面口縁部に薄い外景による圏線、外面に花文と鉄釉による文字が描かれる。貫入が入る。	18c 末～19c
	117	SD1（カマド西）	陶器碗	－	(2.1)	(7.2)	灰白 灰白 灰黄	瓦戸焼か。断面逆台形状の低い高台を有し、腰部で屈曲する。内面に草と見られる文様が描かれる。粘土及び釉調は黄味を帯びた灰色。	18c
	118	SD1（TR4）	陶器碗	(14.0)	(6.6)	－	にぶい黄 にぶい黄橙 にぶい黄橙	内外面に灰釉が施される。腰部は丸味で湾曲する。	
	119	SD1	陶器染付碗	(12.8)	(5.3)	－	灰白・灰白・灰白	瀬戸産か。外面に鉄釉と外景による宝文、内面口縁部と見込みに圏線が巡る。	
	120	SD1	瓶器瓶	(10.0)	(1.7)	－	灰白・灰白・灰白	白磁の口縁部小片。又は盃か。残存部に染付は見られない。	

調査区	番号	遺構 層位	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	色調 内面・外面・断面	特徴	備考
釜屋	121	SD1 (TR－E)	植器 鼎	(9.6)	1.9	(4.5)	灰白 灰白 灰白	内面残存部の１カ所に目痕が残る。内面に草が描かれる。	
	122	SD1	植器 鼎	(9.2)	1.9	(4.2)	灰白 灰白 灰白	内面に山が描かれる。外面口縁部に晩成時に気泡が弾けた際のものと見られる円型の痕跡の周囲が黒く変色し砂粒が付着する。内面残存部の１カ所に目痕。	
	123	SD1 (TR－E)	植器 椀	11.0	6.7	5.8	灰白 灰白 灰白	肥前産、広東型の中碗。外面に無文、下位に圏線、高台に２条の圏線が巡る。内面口縁部に２条の圏線、見込み圏線内に波濤文か。	18 末～19c 前半
	124	SD1	植器 椀	(6.3)	3.7	2.9	明緑灰 明緑灰 灰白	内外面とも施釉。口縁部内面は釉を剥ぎ取る。外面高台に２条の圏線、腰部に１条の圏線、竹等の文様が描かれる。外形は鮮やかな発色。	
	125	SD1 (TR2)	植器 蓋	笠部径 (9.6)	(2.4)	－	灰白 灰白 灰白	外面天井部に輪状の摘みが付く。周縁に雲等の文様が描かれる。外形は鮮やかな発色。	19c 前葉 ～19c 中葉
	126	SD1 （カマド西）	植器 鍋口	(8.2)	6.3	(6.5)	灰白 灰白 灰白	肥前産。内面口縁部に四方禅文、見込みに圏線。外面草花、底部下位に２条の圏線が巡る。蛇目凹形高台。	18c 後半 ～19c 中葉
	127	SD1 (TR2)	植器 鍋口	(7.8)	5.4	(5.9)	灰白 灰白 灰白	肥前系。内面口縁部に四方禅文、見込み に圏線。外面山水文、底部下位に３条の圏線が巡る。蛇目高台。胎土はやや陶質。	
	128	SD1 (TR4)	植器 鍋口	(7.8)	5.4	(5.9)	灰白 灰白 灰白	肥前系。内面に四方禅文。外面に文字、底部に２条１単位と１条の圏線が巡る。細かい貫入が入る。	18・19c
	129	SD1 (TR4)	陶器 鍋	(18.0)	(5.8)	－	灰オリーブ 灰オリーブ 灰黄	内外面とも灰釉が施される。貫入が入る。	18c 後半 以降
	130	SD1 (TR4)	陶器 鍋	－	(1.7)	－	暗赤褐 暗赤褐 浅黄	能茶山焼か。内外面とも鉄釉が施される。口縁端部は内面側に肥厚する。	19c
	131	SD1	陶器 壺	－	(7.9)	(9.5)	黄灰 黒褐 黄灰	外面鉄釉が施され、内面は露胎する。胴部中位で屈曲し、稜線状になる。外面底部中央部は凹み、糸切痕が見られる。	
	132	SD1 (TR4)	陶器 壺か	(13.5)	(4.7)	－	灰白 灰白 灰白	口縁上面のみ施釉され、他は露胎する。境目は釉剥ぎ、釉薬は緑色に発色する。内面の一カ所に断面台形状の突起が付く。外側の胴部は欠損する。	
	133	SD1 (TR4)	陶器 甕	－	(1.4)	(8.0)	灰白 灰白 灰白	外面に灰白色の釉を施し、内面は露胎する。外面底部は釉を剥ぎ取る。	
	134	SD1 （カマド西）	瓦器 擂鉢	(32.6)	(5.6)	－	にぶい赤褐 にぶい赤褐 明赤褐	内面口縁部に２条の凹線が巡り、口縁端部の一部は内側し尖る。外面口縁部に２条の凹線、下端は外方へ拡張し、断面三角形を呈す。11 条１単位の密な摺目。	
	135	SD1 (TR2)	瓦器 擂鉢	(37.0)	(5.4)	－	暗赤褐 暗赤褐 暗赤褐	機能処。内面口縁部に２条の凹線、端部は丸く収める。外面口縁部に２条の凹線、下端は断面三角形状。外面は強いナデにより砂粒が動く。10 条１単位の密な摺目。	
	136	SD1	瓦器 擂鉢	(35.0)	12.9	(19.0)	赤褐 赤褐 明赤褐	明石・堺系。内面口縁部に２条の凹線。外面口縁部に２条の凹線。下端は断面三角形を呈す。外面は強いナデにより砂粒が動く。10 条１単位の密な摺目。	
	137	SD1	軒丸瓦	全長 (7.6)	全幅 (14.3)	全厚 (1.7)	灰～黄灰 灰～オリーブ黒 灰白	三巴文。凹面にコビキＢ痕と布目圧痕が残る。凸面は長軸方向のナデ・ミガキが施される。	天保 10 年（1839）以前
	138	SD1 (TR4－N)	丸瓦	全長 (17.7)	全幅 (14.5)	全厚 1.6－1.7	オリーブ黒 灰～オリーブ黒 灰白	凹面に布目圧痕が残る。縦方向のナデで仕上げる。焼成不良。瓦当直径 16.0cm	
	139	崩落土	軒丸瓦	全長 (30.5)	全幅 13.7	全厚 2.0	暗灰 暗灰 灰	三巴文。凹面にコビキＢ痕と布目圧痕が残る。隙部の玉縁側に直径 8mm の穿孔有り。凸面全面に縦方向のヘラ状工具によるナデが施される。瓦当直径 13.7cm	
	140	崩落土	軒平瓦	全長 (14.1)	全幅 (24.5)	全厚 (1.5)	灰 灰 黄灰	三巴文。凹面は横面方向、凸面は小口方向にミガキあり。瓦当高 5.0cm	

調査区	番号	遺構層位	器種器形	法量（cm）			色調	特徴	備考
				口径	器高	底径	内面・外面・断面		
釜屋	141	崩落土	軒平瓦	全長 (14.5)	全幅 (28.7)	全厚 (1.7)	暗灰 暗灰 灰白	三巴文。右に袖を有する。右脇区に「ヤマウ」の刻印あり。瓦当高 4.3cm	
	142	崩落土	軒平瓦	全長 (17.3)	全幅 (26.3)	全厚 (1.5)	灰黄 灰白 灰	唐文。右に袖を有する。炭素の吸着不全で器表面は灰白色を呈し、磨滅顕著。瓦当高 4.7cm	
	143	崩落土	軒平瓦	全長 (10.7)	全幅 (24.5)	全厚 (1.5)	暗灰 暗灰 淺黄	雄恙状文。右に袖を有する。右脇区に「山勘」の刻印あり。瓦当高 5.0cm	
	144	崩落土	軒平瓦	全長 (12.6)	全幅 (25.0)	全厚 (1.5)	暗灰 灰オリーブ 灰	雄恙状文。右に袖を有する。右脇区に「山勘」の刻印あり。瓦当高 4.3cm	
	145	崩落土	軒平瓦	全長 (10.9)	全幅 (12.1)	全厚 (1.6)	暗灰 暗灰 灰白	雄恙状文。上下の外区にはヘラ状工具によるミガキが施される。瓦当高 4.4cm	
	146	崩落土	軒平瓦	全長 (8.3)	全幅 (13.8)	全厚 (1.6)	暗灰 暗灰 灰白	雄恙状文。右に袖を有する。右脇区に「山」の刻印あり。「山勘」か。	
	147	崩落土	軒平瓦	全長 (17.3)	全幅 (16.0)	全厚 (1.4)	オリーブ黒 灰白 灰	三巴文の両脇に雄恙状文。	
	148	崩落土	軒平瓦	全長 (12.0)	全幅 (16.5)	全厚 (1.3)	暗灰 灰白 灰	三巴文の両脇に雄恙状文。右に袖を有する。瓦当高 4 cm	
	149	崩落土	軒平瓦	全長 (14.5)	全幅 (16.1)	全厚 (1.3)	灰オリーブ 暗灰 灰	右に袖を有する。残存する文様区には唐草が見られる。	
	150	崩落土	軒平瓦	全長 (9.6)	全幅 (9.2)	全厚 (1.5)	暗灰 暗灰 灰白	右に袖を有する。残存する文様区には唐草が見られる。	
	151	崩落土	軒平瓦	全長 (6.1)	全幅 (15.6)	全厚 (1.4)	暗灰 淺黄 灰	三巴文の両脇に雄恙状文。右に袖を有する。	
	152	崩落土	丸瓦	全長 (19.3)	全幅 (15.4)	全厚 (1.55)	黒褐 灰 灰黄	凹面にコビキＢ痕と布目圧痕が残る。側部に漆喰が付着する。	
	153	崩落土	丸瓦	全長 (23.9)	全幅 14.6	全厚 1.5～1.9	灰 灰 灰白	凹面にコビキＢ痕と布目圧痕が残る。側部に漆分が付着する。玉縁部は欠損。	
	154	崩落土	丸瓦	全長 (11.0)	全幅 (13.0)	全厚 (1.7)	オリーブ黒 暗灰 灰オリーブ	凹面にコビキＢ痕と布目圧痕が残る。筒部の玉縁側に「山勘」の刻印あり。	
	155	崩落土	平瓦	全長 27.2	全幅 (22.4)	全厚 1.8	灰 灰 灰白	小口面に「山勘」の刻印あり。焼成後の切り込みが現地で加工された痕跡が残る。	
	156	崩落土	平瓦	全長 27.3	全幅 (19.6)	全厚 1.8	灰 灰 灰白	小口面に「山勘」の刻印あり。焼成後の切り込みが現地で加工された痕跡が残る。	
	157	崩落土	平瓦	全長 (8.8)	全幅 (15.8)	全厚 (1.3)	灰 灰 灰白	小口面に成型時の粘土切り離しの際のものと見られる平行な線状の痕跡が残る。	
	158	崩落土	平瓦	全長 (21.0)	全幅 (14.1)	全厚 (1.6)	オリーブ黒 灰白 灰黄	小口面に成型時の粘土切り離しの際のものと見られる平行な線状の痕跡が残る。	
	159	崩落土	平瓦	全長 (17.1)	全幅 (19.3)	全厚 (3.2)	灰 灰 灰白	2点の平瓦が接着。下部の瓦は側部が屈曲し面を成す。袖部分の2カ所に直径 5mmの穿孔。水切用に用いられる土居製斗瓦又は足駄瓦か。	
	160	崩落土	平瓦	全長 (15.6)	全幅 (13.1)	全厚 (1.5)	灰 灰 灰白	小口面に「山勘」の刻印あり。	

調査区	番号	遺構 層位	器種 器形	法量（cm） 口径	器高	底径	色調 内面・外面・断面	特徴	備考
釜屋	161	崩落土	平瓦	全長 (10.8)	全幅 (10.2)	全厚 (1.5)	暗灰 暗灰 灰	側面に「又」状の線刻あり。	
	162	崩落土	平瓦	全長 (9.4)	全幅 (8.2)	全厚 (1.7)	オリーブ黒 灰白 灰	小口面に「山勘」の刻印あり。	
	163	崩落土	平瓦	全長 (12.0)	全幅 (13.0)	全厚 (1.4)	暗灰 灰白 灰白	小口面に「山勘」の刻印あり。	
	164	崩落土	平瓦	全長 (12.6)	全幅 (11.1)	全厚 (1.5)	暗灰 暗灰 灰	小口面に刻印あり。「山勘」か。小口は面取りが施される。	
	165	崩落土	平瓦	全長 (14.5)	全幅 (14.7)	全厚 (1.5)	灰 灰白 灰	右に袖を有する。小口面に「山勘」の刻印あり。	
	166	崩落土	平瓦	全長 (18.9)	全幅 (16.9)	全厚 (1.7)	暗灰 灰白 灰白	小口面に「山勘」の刻印あり。	
	167	崩落土	平瓦	全長 (17.1)	全幅 (14.6)	全厚 (1.6)	灰 灰 灰白	小口面に「山勘」の刻印あり。四面の小口側に鉄分の付着あり。	
	168	崩落土	平瓦	全長 (8.5)	全幅 (18.2)	全厚 (1.7)	暗灰 灰白 灰	小口面に「山勘」の刻印あり。	
	169	崩落土	平瓦	全長 (19.8)	全幅 (12.3)	全厚 (1.8)	灰 オリーブ黒 灰	右に袖を有する。小口面に「山勘」の刻印あり。	
	170	崩落土	平瓦	全長 (20.1)	全幅 (17.7)	全厚 (1.7)	暗灰 暗灰 灰	右に袖を有する。小口面に「山勘」の刻印あり。	
	171	崩落土	平瓦	全長 (20.8)	全幅 (18.6)	全厚 (1.4)	暗灰 暗灰 灰	右に袖を有する。小口面に「山勘」の刻印あり。	
	172	崩落土	平瓦	全長 (22.5)	全幅 (20.0)	全厚 (1.4)	オリーブ黒 灰白 灰白	小口面に「山勘」の刻印あり。焼成後の切り込みが現地で施工された痕跡が残る。	
	173	崩落土	平瓦	全長 (18.0)	全幅 (23.0)	全厚 (2.0)	灰 灰 灰白	小口面に「山勘」の刻印あり。焼成後の切り込みが現地で施工された痕跡が残る。	
	174	崩落土	平瓦	全長 (5.2)	全幅 (12.3)	全厚 (1.6)	暗灰 暗灰 灰オリーブ灰	小口面に刻印あり。他とは異なる。	
	175	崩落土	平瓦	全長 (6.5)	全幅 (10.0)	全厚 (1.6)	灰 暗灰 灰	小口面に「□冨」の刻印あり。	
	176	現存 コンクリート製 カマド	平瓦	全長 (13.0)	全幅 (13.0)	全厚 (1.5)	灰 灰 灰白	小口面に「山勘」の刻印あり。四面にセメントが付着する。	
	177	TR1	磁器 碗	10.8	5.4	3.9	灰白 灰白 灰白	外面に草花、高台内に「MARUNAGA CHINA」の文字がプリントされる。	現代
	178	崩落土	陶器 擂鉢	(21.2)	(6.8)	–	黒褐 黒褐 褐灰	在地産か。内外面とも鉄釉が施される。口縁端部は水平面を成し輪剥ぎ。内面下位に重ね焼きの痕跡が残る。	近世後期～明治
	179	南西部	陶器 鉢	(31.5)	(4.8)	–	褐 にぶい黄 浅黄	口縁部は外方に拡張。外面口縁端部及び内面にかけて施釉される。外面体部は露胎。	
	180	TR	煙瓦	全長 (12.2)	全幅 (12.0)	全厚 (5.5)	にぶい橙 – 橙	長手の一面・平及び小口面に漆喰付着。同一方向に砂粒が移動する。幅105cm前後、厚さ53cm。	大正14年（1925）以降

調査区	番号	遺構層位	器種器形	法量（cm）			色調 内面・外面・断面	特徴	備考
				口径	器高	底径			
釜屋	181	TR	埴瓦	全長 (10.7)	全幅 (12.1)	全厚 (6.3)	にぶい赤褐 にぶい赤褐 明赤褐	長手の一面・平及び小口面に漆喰付着。同一方向に移蛇が移動する。仕上げは不定方向のナデ。幅 11.5 ～ 11.7 cm、厚 5.5 ～ 5.8cm	大正 14 年 (1925) 以前
	182	崩落土	埴瓦	全長 (11.1)	全幅 (10.2)	全厚 (5.5)	明赤褐	小口面と長手に漆喰が付着する。	大正 14 年 (1925) 以前
	183	TR1	陶器 碗	(9.7)	(3.3)	－	灰白 灰白 灰白	京都・信楽系。小型の碗。外面に鉄釉で文様が描かれる。	18c 後半 ～ 19c 中葉
	184	V 層	陶器 碗	－	(2.5)	－	灰白 灰白 灰白	口縁部小片。内外面とも灰釉が施される。外面に鉄釉による施文。	
	185	V 層	陶器 碗	－	(2.6)	－	橙 浅黄 橙	外面白化粧土の後、鉄釉と緑釉の掛け分けによる文様を施文する。内面は露胎。	
	186	TR1 埋立下層	陶器 碗	－	(3.7)	－	灰白 灰白 灰白	外面に薄緑色の釉で草葉文を施文。	
	187	TR13 黒褐色土	陶器 碗	－	(5.3)	(4.6)	灰黄 灰白 灰黄	高台は断面逆台形状で尾戸焼に類似する。内外面とも施釉。外面底部及び高台は露胎。	
	188	SK1 の下層	陶器 碗	－	(5.9)	(4.2)	灰白 灰白 灰白	尾戸焼。内外面に灰釉が施される。見込み残存部の 1 カ所に目痕あり。	18c 後半 ～ 19c
	189	TR1	陶器 皿鉢	(20.3)	(5.0)	－	褐 褐 淡赤橙	肥前系。内外面に褐色の釉。口縁部は外方に拡張し、水平な面を成す。口縁端部上面及び外面は釉を剥ぎ取る。外面体部中位に白化粧土による 2 条の帯線が巡る。	17 ～ 18c
	190	TR6	陶器 鉢	－	(8.2)	－	褐灰～灰褐 灰白～褐灰 にぶい橙	肥前産。刷毛目二彩手。外面白化粧土と鉄釉による文様、内面は白化粧土の刷毛塗り が施される。	17 ～ 18c
	191	TR5 ～ W 黒色土上層	陶器 壺	(11.8)	(5.2)	－	黒褐 黒褐 にぶい黄橙	内外面とも鉄釉が施される。口縁部は内外面に拡張し、上面は水平な面を成す。	
	192	SK1 の下層	陶器 壺	－	(4.8)	－	暗褐 暗褐 灰白	関西系。内外面鉄釉が施される。内面ロクロ目顕著。	18 ～ 19c
	193	SK1 の下層	磁器 皿	－	(1.3)	(11.7)	明緑灰 明緑灰 灰白	肥前産。外面高台に 2 条、高台内に 1 条の圏線。内面見込みに圏線、文様が描かれる。	18c 以降
	194	SK1 の下層	磁器 皿	－	(2.3)	(8.9)	明緑灰 明緑灰 灰白	肥前産。外面に花唐草文、内面は山・樹木、見込み 2 重圏線内に文様が描かれる。	18c
	195	TR5（紙）	磁器 碗	(11.9)	6.2	(6.4)	灰白 灰白 灰白	肥前系。外面に由水文、高台と体部の境目に 2 条の圏線、内面口縁部と見込みに幅広の圏線。	1780 年代 以降～ 幕末
	196	石列上	磁器 碗	(6.5)	(4.0)	－	灰白 灰白 灰白	肥前産。外面上下圏線間に斜格子文、下位に 2 条の圏線が巡る。	19c
	197	TR6 ～ E	磁器 碗	－	(2.6)	－	明緑灰 明緑灰 灰白	内面口縁部に四方襷文、外面口縁部に圏線、樹木文か。	
	198	SK1 の下層	磁器 猪口	－	(4.0)	－	灰白 灰白 灰白	肥前系。外面に花唐草文。	18 ～ 19c
	199	TR1	磁器 仏飯器	(6.7)	(2.9)	－	灰白 灰白 灰白	外面上下圏線間に菊花、その間に細かい斜格子文が描かれる。	18c 後葉 ～ 19c 前葉
	200	TR6	知器 擂鉢	－	－	全厚 1.1	赤褐 にぶい赤褐 橙	明石・堺系。内面底部の摺目はウールマーク状を呈す。	18c 以降
	201	TR1	知器 擂鉢	－	(2.4)	－	灰褐 暗赤褐 明赤褐	内面に条線。単位は不明瞭。	

調査区	番号	遺構層位	器種器形	法量（cm） 口径	器高	底径	色調 内面・外面・断面	特徴	備考
釜屋	202	TR1	鉢器 擂鉢	(26.8)	(6.2)	－	赤褐 赤褐 赤褐	明石・堺系。胎土に白色粒物を含む。内面口縁部に１条の凹線。口縁端部は丸く収める。外面口縁部に１条の凹線。下端は下外方へ拡張する。摺目の単位は 13 条か。	1825 年（文政８年）以前
	203	SK1の下層	鉢器 擂鉢	(28.4)	10.7	(13.6)	橙 明赤褐 明赤褐	明石・堺系。胎土に白色粒物を含む。内面口縁部に１条の凹線。口縁端部は丸く収める。外面口縁部に２条の凹線。口縁下端は下外方へ拡張し、尖り気味になる。条数１単位の摺目。	18c 以降
	204	SK1の下層	鉢器 擂鉢	(28.0)	(4.0)	－	にぶい赤褐 にぶい赤褐 にぶい赤褐	備前焼。口縁部内面に１条、外面に２条の凹線。口縁端部は水平な面を保ち、口縁下端は下外方へ拡張する。摺目の単位は９条以上。	18c 以降
	205	TR1	鉢器 擂鉢	(34.4)	(8.5)	－	暗赤褐 暗赤褐 褐灰	備前焼。内面口縁部に１条の凹線。外面口縁部に２条の凹線。口縁端部は丸く収める。外面口縁下端は外方へ拡張する。10 条１単位の摺目。	
	206	TR5－E	鉄製品 釘	5.4	0.8	0.5	－	角釘。頭部は約 6mm四方の方形。重量 3.0g	
米蔵	207	SX1	平瓦	全長 (11.6)	全幅 (17.6)	全厚 1.7	灰オリーブ 灰白 灰白	凹面は短軸方向に平行なミガキで仕上げる。一部は炭素吸着が不十分で灰白色を呈する。凸面に板目による調整痕が残る。小口面に「冨」の刻印あり。	
	208	SX1	平瓦	全長 (26.2)	全幅 (15.0)	全厚 1.5	灰 灰 灰白	凹凸面とも丁寧なナデ。	
	209	SX1	平瓦	全長 28.3	全幅 (16.2)	全厚 1.9	灰 灰 灰白	凹凸面とも丁寧なナデ。凹面は長辺に直交、凸面は長辺に平行。端部のみ直行の調整。	
	210	SX1	平瓦	全長 28.7	全幅 (14.3)	全厚 1.6	暗灰 暗灰 灰黄	摩耗著しく調整は不明瞭。	
	211	SX1	平瓦	全長 28.1	全幅 (14.4)	全厚 1.7	黄灰 黄灰 灰	摩耗著しく調整は不明瞭。	
	212	SX1	平瓦	全長 (20.9)	全幅 (11.3)	全厚 1.3	灰 灰 灰白	丁寧な仕上げ。細毛状・ヘラ状工具の始点がのこる。小口面に「冨」の刻印あり。	
	213	SX2	ガラス瓶 洋酒瓶	2.95	26.8	6.7	褐色透明	肩が張り、頸部中位が膨らむボート型。外面に「NIKKA WHISKY DISTILLERY」、「○正 640ml」、底面に「SN」「F3」「V0」のエンボス、スクリュー栓が残る。	昭和 31 年以降
	214	SX2	ガラス瓶 洋酒瓶	2.55	15.7	6.6	褐色透明	胴部断面は扁平な楕円形。底面にナーリング、「○正 180ml」「Nikka」、底部に「11 SN」のエンボス。スクリュー栓と「NIKKA WHISKY」のラベルが残る。	昭和 31 年以降
	215	SX2	天井碍子	直径 8.5	1.4	－	白 白 白	シーリングローゼット、天井から配電する際の台座。外面と穿孔部分に施釉。天井に接する面は露胎。径 1.2cm の穿孔・幅 1.2cm の溝を上端が 2 ヵ所見られる。	
	216	SX2	天井碍子	最大径 7.7	3.2	－	白 白 白	シーリングローゼットの配電盤。外面と穿孔部に施釉。カバー部と接合するスクリュー部は露胎。台座に接する部分は露胎しアルミナ砂が付着。径 1cm の穿孔が４ヵ所、0.5cm の穿孔が２ヵ所。断熱部品が残存。キリ部はマイナス。	
	217	SX2	天井碍子	1.4	3.8	6.6	白 白 白	シーリングローゼットのカバー。外面と電線が触れる穿孔部分は施釉。配電盤と接合するスクリュー部は露胎する。	
	218	SX2	直碍管	全長 (15.0)	外径 13～14	孔径 0.8	白 白 灰白～淡黄	円筒型で、内部は施釉、外面は露胎。端部は施釉される。片方が折損、残存する端部は厚さ 0.6cm、径 22cmほどの円形に肥厚する。	
	219	SX2	直碍管	全長 (11.2)	外径 13～15	孔径 0.8	白 白 灰白	円筒型で、内部は施釉、外面は露胎、端部は施釉される。	
	220	SX2	碍子	3.1	4.8	2.8	白 白 白	筒状の内外面に白色の釉が施される。下面（底）は露胎する。穿孔の径は 0.7cm。	
	221	SX2	ピン碍子	中央径 3.8	(8.3)	最大径 8.8	灰白 灰白 灰白	大型の笠を有する碍子。全面施釉され、笠頂部は金属製の部品が残存する。軸部には配線のための幅 1cmの溝が巡る。	
	222	SX2	碍子	3.7	3.5	7.8 最大径 8.5	白 白 白	頂部が筒状の笠状を呈する。内面は施釉、外面頂部のみ施釉され、裾部は露胎する。胎土はやや陶器質。	

遺物観察表12（米蔵・道具蔵・新宅）

調査区	番号	遺構層位	器種器形	法量（cm）口径	法量（cm）器高	法量（cm）底径	色調 内面・外面・断面	特徴	備考
米蔵	223	SX2	軒平瓦	全長 26.7	全幅 (26.5)	全厚 1.4	灰 灰白	三巴文。右に袖を有する。「山北□」の刻印あり。尻小口側に径 0.6cmの穿孔あり。全高 7.8、瓦当高 4.4、文様区高 3.3、文様区幅（11.3）、周縁高 0.6、周縁幅（15.5）cm。	
	224	SX2	軒平瓦	全長 27.2	全幅 (24.9)	全厚 1.5	暗灰 灰白	葛文。右に袖を有する。尻小口側に径 0.6cmの穿孔あり。全高 8.2、瓦当高 4.7、文様区高 2.7、文様区幅（15.5）、周縁高 1.2、周縁（18.8）cm	
	225	SX5	細部瓦	9.2	5.1	3.3	白 白 白	美濃焼子ども茶碗。外面に灰黒と黄黒、小鳥とタンポポ。高台境界に等線の上絵付け。高台内に赤褐色の染付の「結 207」の統制番号。結草局掘削第工業組合連合会所属の「冬治見陶舗」生産。	昭和 15 ～ 21 年
	226	SX5	細部瓦	9.7	4.8	3.3	白 白 白	美濃焼子ども茶碗。高台境界に圏線。朱色で縁とまりがこさ所ずつプリント（ふち）と所は絵柄。白色輪を全面に施輪。高台内に陽刻による「結 435」の統制番号。結草局掘削第工業組合連合会所属。「マルジリ製陶所」生産による。	昭和 15 ～ 21 年
	227	SX5	細部瓦	－	(3.8)	5.6	灰白 灰白 灰白	肥前系。中型の広東型碗。外展は濃い発色で見込み圏線内に文様（岩と波または船か）が入る。	19c
	228	SX5	細部瓦	12.1	6.7	5.2	灰白 灰白 灰白	口縁端部は褐色釉。他は軽やかな発色の呈宋で絵付け。外面口縁上条、高台境界付近上条。高台内面2条。底部1条の圏線と高と条。外底中央に「圏」の染付。高台は中央高く、八の字に開く。	19c 前半 ～ 中葉
	229	SX5	陶器 壺	5.8	5.3	4.9	黒褐 黒褐 明赤褐	小型の壺。内外面とも鉄釉を施輪。外面高台は露胎。口縁から内部部は釉を掛り取る。外底に「二、二」の墨書が残る。	
	230	SX5	土管	全長 (23.4)	外径 7.7 ～ 7.9	孔径 5.6	にぶい赤褐 にぶい赤褐 赤褐	器壁は厚さ 1.0 ～ 1.1cm。胎土は赤褐色、灰色及び白色砂粒を含む。内周面と長軸方向に直交する線痕。褐色の釉が塗され、一部黒褐色の釉が筋状に流れる。外面は部分的に露胎。両端部は欠損する。	
	231	SX5	土管	全長 (22.7)	外径 7.1 ～ 7.4	孔径 5.6	赤灰 灰褐 にぶい赤褐	器壁は厚さ 0.9cm。胎土はにぶい赤褐色、灰色及び白色砂粒を含む。内外面とも長軸方向に直交する線痕がある。内面は外面より粗く、わずかに斜傾する。内外面とも灰褐色の釉が施され、一部黒褐色の釉が筋状に流れる両端部は欠損する。	
	232	SX5	土管	端部外径 10.3	外径 7.2	孔径 5.4	暗赤褐 暗赤褐 にぶい黄橙	土管の端部。昭和 50 年頃まで使用されたとされる通称「セメン漆喰」（ハンダにセメントを少量混ぜたもの）が付着する。	
	233	北東部 礎石付近	細部瓦	(13.4)	3.3	(8.8)	灰白 灰白 灰白	口縁部は輪花型で、端部は外展塗りされる。型紙刷りで、内面に松竹梅円形文と松原文、外面は花唐草文か。見込み残存部の1寸所に目皮、蛇ノ目高台で砂粒付着。	明治 10 年以降、主に 1880 年代
	234	床上	陶器 瓶	(12.2)	4.7	(4.2)	褐暗褐 褐暗褐 にぶい橙	徳茶山焼。内外面とも鉄釉が施され、極薄は 2 度掛けされる。外面高台は露胎する。見込み蛇ノ目釉剥ぎの後、白化粧土を刷毛塗りする。高台外ケズリ。	19c 中葉 以降
	235	床上	細部 瓶または鉢	(20.1)	(5.3)	－	灰白 灰白 灰白	口縁部は輪花型を呈す。内面口縁部に波状の圏線。内面に 3 本 1 単位の文様（草文か）あり。外展は濃い発色。	
	236	床上	細部 碗	8.2	5.6	3.7	灰白 灰白 灰白	徳茶山焼。内面口縁部に 2 条。見込みに 1 条の圏線。見込みに文様。外面格子文と四方襷文。高台外面に 1 条と 2 条の圏線が施される。高台内に「十」の表が見られる。	1820 年代 から幕末
	237	床上	細部 碗	(11.0)	6.2	(4.3)	灰白 灰白 灰白	肥前系。内面口縁部に四方襷文。外面に蛇と雲、宝文か。文様が細線抜きで施される。見込みに松竹梅円形文。	19c 中葉
	238	床上	細部 碗	(9.8)	(5.1)	－	灰白 灰白 灰白	肥前系。内面口縁部に多重圏線と列点（あるいは格子目文）。見込みに圏線。外面に山水文。見込み蛇ノ目釉剥ぎの後、白化粧土を刷毛塗りする。	18 ～ 19c
	239	床面直下	埴瓦	全長 20.7	全幅 10.2	全厚 5.7	橙	平面に弧状に砂粒の移動が認められる。胎土に 0.3 ～ 1 cm大の角礫が混じる。JIS 規格に相当すると見られる。	
	240	床面直下	埴瓦	全長 20.7	全幅 10.2	全厚 5.8	橙	平面に弧状に砂粒の移動が認められる。胎土に 0.5cm前後の角礫が混じる。JIS 規格に相当すると見られる。	
道具蔵	241	SX1	細部 碗	－	(4.3)	6.2	明緑灰 明緑灰 灰白	広東型を呈す。見込み圏線内に岩波文。外面に山と雲と見られる染付が描かれる。高台畳付は輪潤ぎ、砂粒が付着する。	
	242	SX1	平瓦	全長 27.4	全幅 44.2	全厚 1.7	黄灰 灰 灰白	大型で、桟は短く立ち上がり屋敷は傾かである。屋などに使われる目板瓦か。	
新宅	243	TR1	細部 戸車	底径 6.3	全長 (3.5)	全厚 1.5	灰白 灰白 灰白	側面と中央の穿孔内は施輪。表裏面とも砂粒が付着する。孔径は 1.7cm。	

写真図版

主屋覆屋設置状態(南西より)

主屋覆屋設置状態(南より)

図版2

主屋調査前風景(南より)

主屋座敷部調査前風景(北より)

主屋座敷部調査前風景(南西より)

主屋居室部北東調査前風景(西より)

図版４

主屋居室部調査前風景（南より）

主屋居室部西部調査前風景（南より）

主屋座敷部式台調査前風景（東より）

主屋居室部土間調査前風景（南西より）

主屋 TR3西壁セクション(南東より)

主屋 TR3西壁セクション(南東より)

主屋 TR6黒色土検出状態(南より)

主屋座敷部 TR10掘削状態(東より)

主屋居室部土間トレンチ掘削状態(北より)

主屋居室部土間トレンチ掘削状態(東より)

主屋 TR11 抜取穴完掘削状態(北西より)

主屋礎石抜取穴検出状態(西より)

主屋焼土を伴う遺構群検出状態(西より)

主屋 SX1セクション(北より)

主屋壺状土坑検出状態(南より)

主屋壺状土坑半裁状態(南東より)

主屋壺状土坑1・2完掘状態

主屋壺状土坑1遺物出土状態

主屋壺状土坑3半裁状態

主屋壺状土坑4半裁状態

主屋壺状土坑6半裁状態

主屋壺状土坑9遺物出土状態

主屋壺状土坑10検出状態

主屋壺状土坑11検出状態

主屋壺状土坑13 ～ 15完掘状態(南より)

主屋壺状土坑16検出状態

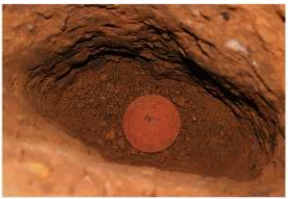
主屋壺状土坑17検出状態

主屋壺状土坑19半裁状態

主屋壺状土坑完掘状態(南より)

主屋陶器埋納遺構遺物出土状態(西より)

主屋陶器埋納遺構遺物出土状態(北東より)


主屋 SF3 遺物出土状態(29)

主屋 SF4 遺物出土状態(31)

主屋 SF4 遺物出土状態(33)

主屋 SF5 遺物出土状態(35 ～ 40)

主屋 SF5 遺物出土状態(39・40)

主屋 SF5 完掘状態

主屋 SF6 遺物出土状態(41 ～ 48)

主屋 SF6 完掘状態

主屋 P6遺物出土状態(西より)

主屋漆器椀埋納遺構完掘状態(南東より)

主屋 P6遺物出土状態(49)

主屋 P7遺物出土状態(50)

主屋 P8遺物出土状態(51)

主屋 P11遺物出土状態

主屋鍛冶関連遺構検出状態(南より)

主屋 P18・50検出状態(西より)

主屋鍛冶関連遺構焼土・炭化物検出状態(東より)

主屋 P14 遺物出土状態(53 ～ 56)

主屋 P22 半裁状態

主屋 SK4 セクション(東より)

主屋 SK4 完掘状態(南東より)

主屋 SK5 半裁状態(西より)

主屋 SK5 完掘状態

主屋 SK7 完掘状態(南より)

主屋炉検出状態(北より)

釜屋調査前風景(西より)

釜屋「釜場」カマド調査前風景(東より)

釜屋「釜場」崩落土調査前風景(南東より)

釜屋「釜場」崩落土除去状態(西より)

釜屋1次調査終了状態(西より)

釜屋2次調査終了状態(西より)

釜屋「釜場」2次調査終了状態(東より)

釜屋「釜場」遺構完掘状態(西より)

釜屋「釜場」トレンチ掘削状態(南西より)

釜屋 TR1 東壁セクション(西より)

釜屋 TR2 北壁セクション(南より)

釜屋 TR3 東壁セクション(南西より)

釜屋「味噌納家」トレンチ掘削状態(南より)

釜屋 TR4 西壁セクション(南東より)

釜屋トレンチ掘削状態(北西より)

釜屋 TR5西壁セクション(東より)

釜屋 TR5南壁セクション(北より)

釜屋 TR24セクション(西より)

釜屋 SE1周辺堆積状態(南東より)

釜屋 SK1 炭化物検出状態(南より)

釜屋 SK1 セクション(南東より)

釜屋 SK1 鉄製品出土状態(82)

釜屋 SK1 完掘状態(北より)

釜屋 SK1 復原状態(南西より)

釜屋 SX2検出状態(南東より)

釜屋 SX2遺物出土状態(南より)

釜屋 SX2完掘状態(南東より)

釜屋 SX2完掘状態(北より)

釜屋 SX2焼土検出状態(南より)

釜屋クド遺構セクション(南より)

釜屋 SX13検出状態(東より)

釜屋 SX10・16検出状態(南より)

釜屋 SX10 ～ 12・16焼土検出状態(北西より)

釜屋 SX11・16北壁セクション(南より)

釜屋 SD2暗渠検出状態(西より)

釜屋 SX17完掘状態(南より)

釜屋 SX4セクション(西より)

釜屋 SX4完掘状態(西より)

釜屋 SX5検出状態(東より)

釜屋 SX5半裁状態(北より)

釜屋 SX4遺物出土状態(101)

釜屋 SD1セクション(北より)

釜屋 SD1集石出土状態(南より)

釜屋 SD1遺物出土状態(123)

釜屋 SD1遺物出土状態(126)

釜屋 SD1遺物出土状態(129)

釜屋 SD1遺物出土状態(131)

釜屋 SD1 遺物出土状態(135)

釜屋 SD1 遺物出土状態(137)

釜屋崩落土遺物出土状態(139)

釜屋崩落土遺物出土状態(142)

釜屋 SD1 遺物出土状態

釜屋排水遺構(現代)検出状態(北より)

釜屋崩落土遺物・漆喰出土状態(南西より)

釜屋崩落土遺物出土状態(南より)

釜屋崩落土下面排水管検出状態(南より)

米蔵調査前風景(西より)

米蔵調査前風景(東より)

米蔵完掘状態(南西より)

米蔵北西部完掘状態(西より)

米蔵完掘状態(北より)

米蔵 TR1・5東壁セクション(西より)

米蔵 TR1 南部東壁セクション(西より)

米蔵 TR1 南部西壁セクション(南東より)

米蔵 TR1 東壁セクション(南西より)

米蔵 TR2－1北壁セクション(南東より)

米蔵 TR2－2北壁セクション(南より)

米蔵 TR2－4上面完掘状態(東より)

米蔵 TR2遺物出土状態(236)

米蔵 TR3南壁セクション(北東より)

米蔵 TR3上面完掘状態(北より)

米蔵 TR4 − s P2検出状態(北より)

米蔵 TR4 − s 完掘状態(西より)

米蔵 TR6上面完掘状態(北東より)

米蔵 TR7上面完掘状態(南東より)

米蔵 TR10上面完掘状態(西より)

米蔵 SK3検出状態(北より)

米蔵 SX4 焼土・炭化物検出状態(南西より)

米蔵 SX1遺物出土状態(北東より)

米蔵 SX1遺物出土状態(西より)

米蔵 SX1完掘状態(西より)

米蔵 SX5床面 SX2検出状態(南より)

米蔵 SX2遺物出土状態(北より) (213)

米蔵SX2・5半裁状態(南東より)

米蔵SX2・5セクション(南より)

米蔵北西部石垣検出状態(南より)

米蔵北西隅石垣検出状態(南西より)

米蔵北部溝石垣検出状態(北より)

米蔵北部溝胴木検出状態(北より)

米蔵SK1完掘状態(南東より)

米蔵SK1・P1完掘状態(北西より)

道具蔵SX1遺物出土状態(北東より)

道具蔵トレンチセクション(南東より)

道具蔵トレンチセクション(南より)

道具蔵トレンチセクション(東より)

道具蔵SX1半裁状態(東より)

道具蔵P2～4遺構検出状態(東より)

道具蔵 SX1 遺物出土状態(北東より)

道具蔵 SX1 南部セクション(東より)

道具蔵 SX1 中央バンクセクション(北より)

道具蔵遺物出土状態(南より)

道具蔵 SX1 遺物出土状態(南より)

新宅調査前風景(北東より)

新宅調査前風景(東より)

新宅トレンチ掘削状態(北東より)

新宅TR2セクション(北東より)

新宅 TR2・3 完掘状態(北より)

新宅下層確認 TR 掘削状態(北東より)

新宅西部溝石垣調査前風景(北より)

新宅西部石垣(東より)

新宅南西部石橋(西より)

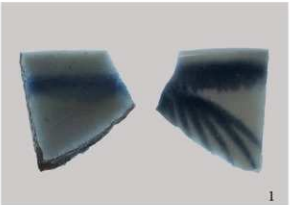
雪隠掘削状態(北東より)

雪隠北部完掘状態（南東より）

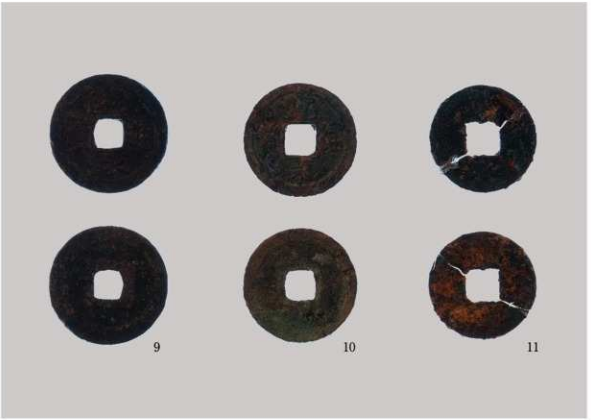
雪隠南部石組検出状態（東より）

雪隠整備前状態(北より)

雪隠北部整備前状態(東より)



陶器(碗・捏鉢・供膳具)・磁器(碗・擂口)・青磁(鉢)・煉瓦・銭貨



磁器(ミニチュア)・石素材(剥片)・銅製品(煙管)・銭貨

土師質土器(焜炉)・瓦質土器(焜炉)・石製品(叩石・石臼・石墨)・石素材(剥片)・鉄製品(椀)

陶器(椀・蓋)・石製品(石印)

陶器(碗・蓋)・土師質土器(杯・椀・蓋)

35

36

35

36

37

39

38

40

陶器(碗・壺・蓋)

41

43

42

44

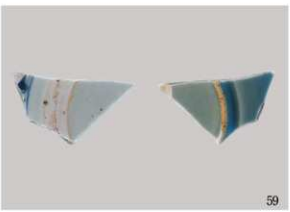
45

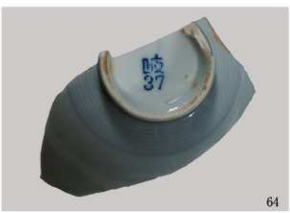
47

46

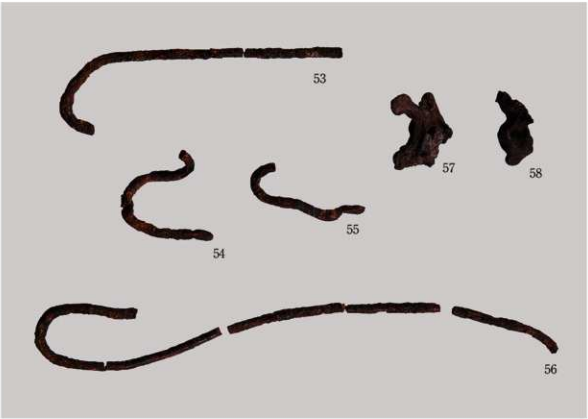
48

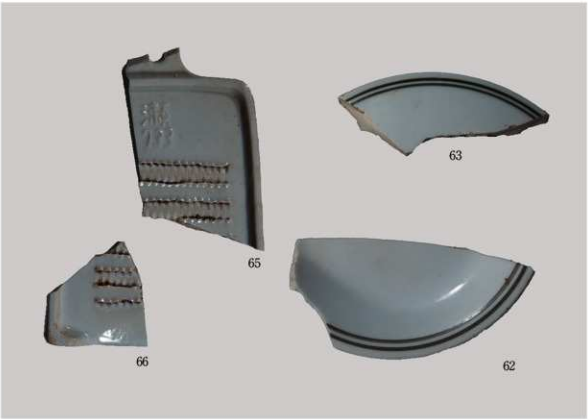
陶器(壺・蓋)





磁器(皿・椀・蓋)・漆器(椀)・石製品(石臼)・鉄製品

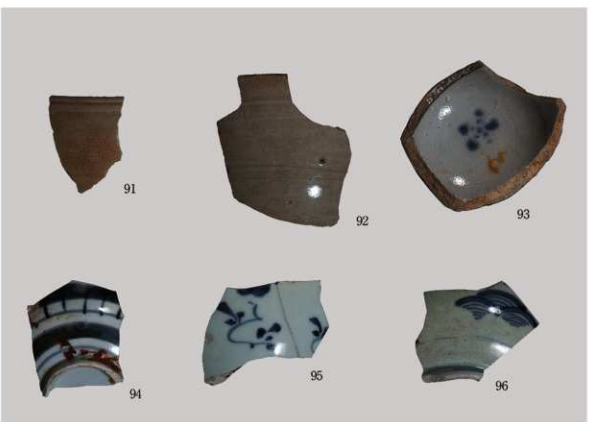




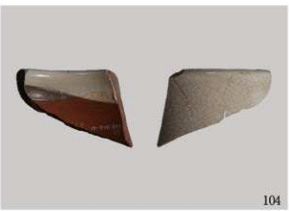
磁器(皿・おろし皿・蓋)・棒状鉄製品・鉄滓

ガラス瓶(日常生活瓶・薬品瓶・白髪染め瓶・目薬瓶・化粧品瓶)・コルク栓

陶器(甕)・磁器(蓋)・青磁(碗)・土師質土器(サナ)・丸瓦・平瓦・煉瓦・鉄製品



陶器(碗・甕)・磁器(碗)・陶胎染付(碗)・丸瓦・ガラス瓶(薬品瓶)・鉄製品(釘)



陶器(蓋・火入れ)・磁器(紅皿)・炻器(擂鉢)・竹製品(竹筒)

陶器(皿・碗)・磁器(皿・紅皿・杯)・陶胎染付(碗)・土師質土器(サナ)

磁器（皿・碗・猪口・蓋）

128

129

130

132

131(胴部)

131(底部)

133

134

陶器(甕・瓶・鍋・涼炉)・磁器(猪口)・炻器(擂鉢)

135(内面)

135(外面)

136(内面)

136(外面)

137

138

139

140

炻器(擂鉢)・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦

141

142

143

144

145

146

148

149

軒平瓦

150

151

152

153

154

155

156

157

軒平瓦・丸瓦・平瓦

158

159

160

161

162

163

164

165

平瓦

166

167

168

169

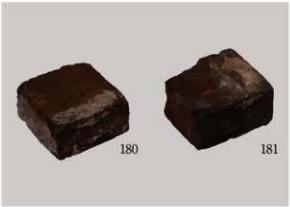
170

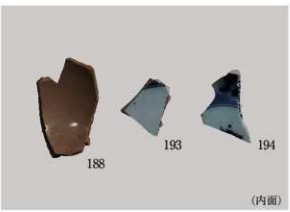
176

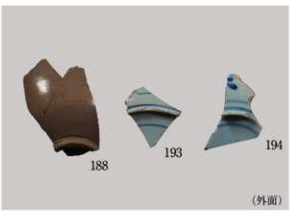
177

178

陶器(擂鉢)・磁器(碗)・平瓦





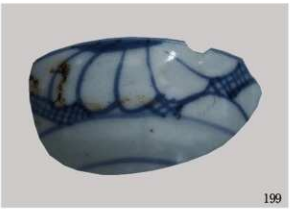


陶器(碗・鉢・控鉢・甕)・磁器(皿)・煉瓦

陶器(碗・鉢・甕)・磁器(碗)・炻器(擂鉢)

195

198


199

201

202

204

203(内面)

203(外面)

磁器(碗・猪口・仏飯器)・炻器(擂鉢)

205

207

208

214

209(凹面)

209(凸面)

210(凹面)

210(凸面)

炻器(擂鉢)・平瓦・ガラス瓶(洋酒瓶)

211(凹面)

211(凸面)

212(凹面)

212(凸面)

平瓦・碍子

223

224

225

226

227

229

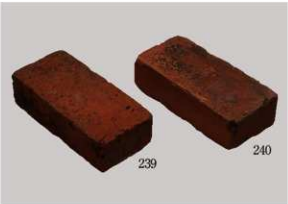
228

229

陶器(壺)・磁器(碗)・軒平瓦

陶器(皿)・磁器(皿・碗)・土管

238


239 240

241

243

242 表3－1 no.10 表3－1 no.14

磁器(碗・戸車)・平瓦・煉瓦

報告書抄録

ふりがな	やすおかけじゅうたく
書名	安岡家住宅
副書名	重要文化財建造物保存修理工事に伴う埋蔵文化財試掘確認調査報告書
シリーズ名	高知県香南市発掘調査報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	松村 信博　横山 藍
編集機関	香南市文化財センター（香南市教育委員会）
所在地	高知県香南市香我美町山北1553－1
発行年月日	2020年3月27日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
安岡家住宅（やすおかけじゅうたく）	〒781－5213 高知県（こうちけん） 香南市香我美町（かがみちょう）山北（やまきた）979－1	39211	180061	33° 34′ 40″	133° 44′ 08″	2013.11.12 ～ 2018.6.25	671.2㎡	記録保存調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
安岡家住宅	屋敷地	近世 近現代	土坑 溝跡 ピット 祭祀関連遺構 鍛冶関連遺構 カマド遺構 クド遺構 シズ遺構	陶器 磁器 瓦 鉄製品 石製品 ガラス瓶	

要約	国重要文化財安岡家住宅の復原修理工事の根拠となる情報収集を目的として行われた調査である。 主屋では礎石抜取穴の検証により、間取りの変更などの復原根拠を裏付ける成果が得られた。またその他にも壺状土坑や祭祀関連遺構を検出した。釜屋では明治20年頃作成された絵図に残るクド・カマ遺構を確認し、昭和30年頃までは県内各地に残っていた「シズ」と呼ばれる生活用水に関する遺構についても、詳細な調査成果が得られた。米蔵では地鎮を目的とする瓦埋納遺構や新旧2基の「シズ」遺構を確認した。 近世後期から近現代における民家の変遷及び生活を辿る数少ない事例となった。

高知県香南市発掘調査報告書第17集

安岡家住宅

重要文化財建造物保存修理工事に伴う埋蔵文化財試掘確認調査報告書

2020年3月27日

発行　高知県香南市教育委員会
香南市文化財センター

高知県香南市香我美町山北1553－1
Tel. 0887－54－2296

印刷　半田印刷